松山市埋蔵文化財調査報告書第6集

かいなご・松ヶ谷古墳

1975

松山市教育委員会

かいなご・松ヶ谷古墳

1975

松山市教育委員会

松ヶ谷一号墳出土の装飾器台

はじめに

松山市は道後平野の北西部に位置し，南には四国山脈が走り，西と北は瀬戸内海に面している。東の山地から西に向って流れる重信川と東北から平野部を斜めに横切って重信川に合流する石手川は共にこの平野をうるおし古くから農耕文化が栄えたところであります。

昭和47年に発見された古照遺跡の発掘調査の結果は３つの巨大な堰が発掘されて，四世紀にすでに現在と変らぬ程のかんがい施設・農業土木技術が進歩していたことが判明しました。また，国道11号線バイパス建設に伴う事前調査では数多くの遺跡が出土しましたが，なかでも福音寺町竹ノ下遺跡からは５世紀の木製器具や，全国的に見ても珍らしいU字形鋤先の着装部を明確にもつ鋤やエブリ形農具など重要なものが出土して当時の農耕文化を物語っております。これら道後平野の稲作経営を基盤として古墳文化が栄え，周辺部の丘陵に無数の古墳がはん築されて，残っているのであります。しかし，かつての開墾などで消滅してしまったものも多いようであります。

本報告書に収録されたかいなご・松ヶ谷古墳もそれらの一つでありますが，当教育委員会が調査を実施したことにより，古代文化の一端が究明されるものと思います。

本調査にあたり協力された方々にお礼申し上げると共に本書が広く活用されることを期待いたします。

昭和50年３月30日

松山市教育長

関谷勝良

例　言

1　本書は，松山市教育委員会が，平井町所在のかいなご古墳群のうち1号墳と2号墳について，また恵原町に所在する松ヶ谷古墳群の第1号墳の発掘調査記録である。

2　発掘調査体制は次のとおりである。

調査主体　松山市教育委員会
教育長　仙波光三
〃次長　中村安定
社会教育課長　谷川敏一
〃　補佐　野間清典
主幹補兼文化係長　岸　郁男
管理係長　川上　進
矢野　完・西尾幸則

調査員
森　光晴（松山市文化財専門委員）
大山正風（川内中学校教諭）

3　協力者名簿

かいなご古墳　玉井常雄・江戸　孝・仙波五月・川田愛子
松ケ谷古墳　八倉　茂・志村只夫・山口健一・三好俊彦・仙波　弘・菅　嘉見
田和岸男・森　健次・森脇和正・高市由美子・仙波五月

4　本書の作成にあたっては，遺物整理は文化係全員で行なった。遺跡・遺物の写真撮影は，大山正風，岸郁男，西尾幸則が担当した。本書の執筆及び実測・製図は森光晴があたった。

5　発掘調査にあたっては地主の和田政雄氏と田和岸男氏は積極的に協力され，また出土品一切を寄贈していたゞき感謝にたえない。

6　出土品は，すべて松山市指定文化財・考古資料に指定し松山市教育委員会が保管にあたっており，古照資料館に収蔵陳列して一般に公開している。

本 次 目 次

序　文

例　言

かいなご古墳……1

Ⅰ　調査の経過……3

Ⅱ　遺跡の位置と環境……3

1　遺跡の位置……3

2　自然的環境……3

3　社会的環境……4

Ⅲ　かいなご1号墳……6

1　外部構造……6

(1)　1号墳の現況……6

(2)　墳　　丘……6

2　内部構造……6

(1)　羨道部の構築……6

(2)　玄室部の構築……6

(3)　主体部の構築形態について……8

3　出土遺物……8

(1)　須恵器……9

(2)　銅　鏡……10

(3)　金　環……10

④　その他……10

Ⅳ　かいなご2号墳……10

1　外部構造　墳丘……10

2　内部構造……10

3　出土遺物……11

①　土師式土器……12

②　須恵器……12

③　玉　類……16

④　鉄　器……17

Ⅴ　結　　語……17

松ヶ谷古墳……21

Ⅰ　調査にいたるまでの経過……23

Ⅱ　遺跡の位置と環境……23

1　遺跡の位置……23

2　自然的環境……23

3　歴史的環境……25

Ⅲ　発掘日誌……25

Ⅳ　松ヶ谷1号墳……27

1　外部構造……27

2　主体部の構造……27

3　出土遺物……30

①　土師式土器……30

②　須恵器……32

③　鉄　器……50

④　装身具……50

Ⅴ　結　　語……53

挿図目次

地形図1　**かいなご**古墳群付近の地形図と古墳……5
第2図　1号墳　墳丘実測図……7
第3図　1号墳天井石俯瞰図……7
第4図　主体部実測図及び遺物出土状況図……8
第5図　出土遺物実測図……9
第6図　2号墳　墳丘実測図……11
第7図　主体部実測図及び遺物出土状況図……12
第8図　出土遺物実測図……13
第9図　土師式土器と甕……14
第10図　横　　瓮……15
第11図　玉類と鉄器……17
第12図　1号墳墳丘断面図とセクション……18
第13図　1号墳及び2号墳の計測比較図……19
地形図2　**松ヶ谷**古墳群付近の地形図と古墳……24
第14図　1号墳　墳丘実測図……27
第15図　天井石俯瞰図……28
第16—1図　墳丘断面とセクション……28
第16—2図　主体部実測図……29
第17—1図　出土遺物実測図　坏……31
第17—2図　〃　坏と高坏……34
第17—3・4図　〃　高　坏……36
第17—5・6図　〃　坩その他……38
第17—7・8図　〃　提瓶と広口壺……42
第17—9・10図　〃　器　台……46
第17—11・12図　〃　装飾器台……48
第17—13図　〃　鉄器と装身具……51
第17—14図　遺物出土状況図……52

図 版 目 次

図版第1 (1) かいなご1号墳遠景……55
(2) 調査前の1号墳（天井石露出）……55
図版第2 (1) 羨道部の天井石横架状況……56
(2) 羨道部の天井石除去状況……56
図版第3 (1) 閉塞口より見た主体部の状況……57
図版第4 (1) 玄室内の布石の状況……58
図版第5 (1) 鏡の出土状況……59
(2) 壁面石積の状況……59
図版第6 (1) かいなご2号墳遠景……60
(2) 2号墳の近景と立地……60
(3) 玄門部での閉塞の状況……60
図版第7 (1) 玄室方向から見た閉塞と羨道……61
(2) 羨道部より東壁面の石積状況……61
(3) 上方からの玄室（天井石の落下位置）……61
図版第8 (1)・(4) 土器の出土状況……62
(2)・(3) 鉾と管玉の出土状況……62
図版第9 上段 1号墳出土遺物……63
下段 2号墳出土遺物……63
図版第10 (1) 2号墳出土遺物……64
図版第11 (1) 松ヶ谷1号墳の遠景……65
(2) 天井石を除去し侵入せる状況……65
(3) 盗掘による側壁の崩壊状況……65
図版第12 (1) 発掘風景……66
(2) トレンチと天井石の状況……66
図版第13 (1) 天井石の横架状況……67
(2) 奥壁部の天井石の落下状況と盗掘口……67
図版第14 (1) 集中豪雨により側壁の崩壊状況……68
(2) 崩壊後の発掘状況……68

図版第15 (1) 閉塞の現状……69
(2) 土砂を取り除いた閉塞状況……69
図版第16 (1) 玄室内より見た羨道部……70
(2) 羨道口の状況と天井石の配置状況……70
図版第17 (1) 器台55の出土状況 1……71
(2) 器台56広口52の出土状況 2……71
図版第18 (1) 坏・高坏の出土状況 3……72
(2) 広口53，54の出土状況 4……72
図版第19 (1) 天井部より写す……73
(2) 銀環の出土状況 5……73
図版第20 (1) 壁面の石積状況……74
(2) 発掘後の墳丘復元状況……74
図版第21 (1) 坏……75
図版第22 (1) 17～19 坏……76
(2) 高坏 3，4，26，27，28……76
図版第23 (1) 土師式土器（高坏1，2）……77
(2) 須恵器高坏（無蓋高坏20～23）……77
図版第24 (1) 須恵器有蓋高坏 29，30，31～33……78
(2) 須恵器無蓋高坏 34……78
図版第25 (1) 土師式土器坩 5～6……79
(2) 須恵器短頸坩 35～40……79
図版第26 (1) 須恵器短頸坩 41～44……80
(2) 須恵器直口壺45，広口46，甕 47……80
図版第27 (1) 須恵器 坩42，広口壺53……81
(2) 須恵器 器台 55，56……81
図版第28 (1) 須恵器 装飾器台 57……82
(2) 須恵器 広口壺 52，54……82
図版第29 (1) 轡63，刀子58，60，鉄鏃62……83
(2) 銀環64，切子玉67～69……83
(3) 須恵器提瓶 50，51……83

かいなご古墳

所在地　松山市平井町谷之内253番地

かいなご古墳群

I　調査の経過

小野地区の山林は松食虫の被害のため，松林を果樹園に造成したいとの地主からの連絡があり，市教委で現地踏査を行なった。この地域では，すでに開墾により数多くの古墳が壊滅しているため，かねてより地区公民館運動の一環として，埋蔵文化財保護についての指導に当っていた地区でもあった。地目変更の予定地内に２基の古墳が存在したが，１基はすでに天井石はなく凹地となっており，他の１基もまた一部天井石が持ちさられており，更に奥壁部が開かれ少なくとも２度以上の盗掘がなされたものと推察された。前者が円墳であるのに対して，後者は方墳であった。方墳は当地方には数少ない古墳の形態である。当委員会は昭和47年３月22～28日，４月３～９日の２度にわたって調査を実施した。

II　遺跡の位置と環境

1　遺跡の位置

かいなご１号墳は東経132°48′40″北緯33°42′02″の交差する周辺の地域である。行政的位置は，愛媛県松山市平井町谷之内253番地である。

2　自然的環境

四国山地石鎚山系に水源を発する重信川（旧伊予川）は，松山平野のやや北西方向に貫流し，洪積台地の徴高地をすぎる地点で洪積台地を開析して流れる小野川，内川，堀越川，川付川と合流し，更に下流の出合附近で石手川と合流しつつ瀬戸内海の伊予灘に流入している。重信川の北側は福見山（1053m）経座森（785m）観音山（483.4m）杉立山（669m）から芝ケ峠（282m）に連なる分岐山塊が存在する。これら分岐山塊端に久米地区鷹ノ子の八幡山（106m）があり，低丘陵山地は消滅し，同山系が形成した鷹ノ子，北久米，南久米，来住の洪積台地へと続く。この洪積台地は，分岐山塊より発する諸河川の開析により浸蝕あるいは，隆起により一部に河岸段丘を形成している。この洪積台地をすぐるところ，松山平野に点在する分離独立丘陵である星ノ岡，土亀山，天山，東山等の丘陵が指呼の間にある。

これら一望できる松山平野も地質的には，高縄山地系に流れを発する石手川により大きく２分され，石手川以北は，松山城のある勝山の分離独立丘陵を除き，御幸山，大峰ケ台，岩

子山，久万ノ台，太山寺山など花崗岩層に属し，石手川以南は和泉砂岩層により形成されている。この和泉砂岩層は南約10kmの地帯を東西に走行する中央構造線まで続いている。中央構造線以南は三波川層に属し緑泥片岩類が存在する。この三波川層をもうがち流れる重信川にも一部緑泥片岩類を含むが，その大半は砂岩系の河原石で形成されている。

3　社会的環境

松山平野を東より西に貫流する二大河川に平行しつつ合流する，小野川，川付川，堀越川の開析作用により，上流では扇状地を形成し，また回春して下流に沖積平野を形成している。いまこの沖積地に面する洪積台地や，開析谷の周辺部には，数多くの遺跡がある。これらの遺跡は縄文時代の後期から弥生，古墳時代にわたる埋蔵文化財の宝庫となっている。地形図(1)。

さて，かいなご古墳群を取りまく周辺部の遺跡は，大きく２つのパターンに分けられる。その１つは平野部の遺跡（星ノ岡，北久米，高岡，長隆寺，南久米，鷹ノ子）や遺物包含地（水泥，今吉）で，その多くは弥生時代の後期から古墳時代に繁栄した生活，生産の遺跡であり，他は丘陵地帯の稜線及び傾斜地に群集している土坑墓および小規模な古墳群（北久米丸山，山田池，大谷池，芝ケ峠，今吉，観音山）などである。

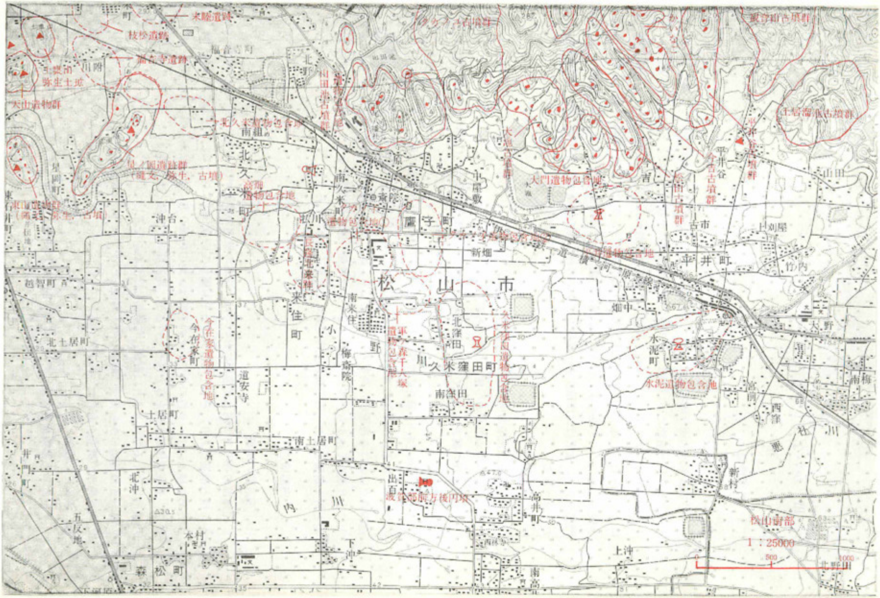
これらの古墳群は，そのほとんどが横穴式石室を有する後期の家族墳と考えられ，規模的にも直径10m内外の円墳を中心とするものが多い。更に平野部における古墳を求めるならば，松山市指定文化財となっている波賀部神社の前方後円墳，発掘調査後開発され消滅した三島神社古墳や，県指定文化財の経石山古墳等の前方後円墳がある。

また，戦時中に滑走路となって消滅した双子塚（タンチ山）や南久米の東山神社境内の古墳も，かつては前方後円墳であったと考えられる。

これら前方後円墳の周辺部には，小規模な墳丘を有するが，丘陵地帯の小規模古墳に対し，平坦地では様相を異にしている。ただおしむらくは，戦後丘陵部の山林地が，果樹園に造成され，平野部は宅地化の波にあおられ，これら遺跡の大半は消滅し，また消滅寸前におかれている。

これら消滅した古墳からの出土遺物には方格規矩文鏡，捩文鏡，五鈴鏡等も出土している。また外部構造においても変化のあるものがあったなどと言われているが，正式な調査も無く，遺物も散逸しているようである。

地形図 1



来駿遺跡
枝松遺跡
福音寺遺跡
福音寺町
大山遺物群
北久米遺物包含地
南組
北久米町
大門遺物包含地
松山市
平井町
古市
上苅屋
竹内
新畑
畑中
北窪田
久米窪田町
南窪田
水泥遺物包含地
水泥町
今在家遺物包含地
今在家町
道安寺
梅爺院
来住町
南来住
土居町
南土居町
北土居町
越智町
沖台
北沖
内川
下沖
上沖
森松町
本村
五反地
出百
高井町
南高井
西窪
宮前
南梅
新村
大野
山田
平井谷
土居窪坂古墳群
経石山古墳群
松山南部
1：25000

Ⅲ　かいなご１号墳

1　外部構造

(1)　１号墳の現況

１号墳は前述の通り破壊されており，羨道部及び玄室部の内部構造については調査しえたが，副葬された遺物については，わずかに残存する遺物を収集したにとどまった。内部のかく乱状態からみて，すくなくとも２回以上の盗掘に見舞われたものと推察できる。この盗掘により天井石の一部が取り除かれ中央部より玄門付近を，また奥壁の上端部の積石を取り除き侵入している。しかも前の侵入者は，構内の流入した堆積土の多くを奥壁部へ移動させ玄門部を荒し，後者は，堆積土を一部構外に排出の後，他の堆積土を玄門部の側に移動をさせた形跡がある。

(2)　墳　丘

墳丘の構築は丘陵の尾根の一部をカットして，そのカットした土砂でもって封土としたものであり，古墳の墳丘の形態は方墳である。

ただ墳丘部の調査については，でき得る限り後述する条件が発生し(保存)小規模の調査にとどめた。

墳丘高2.1ｍであり，墳丘の規模は１辺13.2ｍ×10.5ｍあり丘陵部の尾根をＬ字状にカットしたものである。主体部の構築は，和泉砂岩の風化土に掘り込んで設置されており，古墳築造の時点における復原墳丘高を考えたとしても，流失比高は50㎝前後と推定される。このことにより遠かく地からの客土の必要はなく，丘陵部の尾根を切開することにより，墓域の決定と封土構築とした一石二鳥の工程であったと見るべきであろう。

2　内部構造

(1)　羨道部の構築

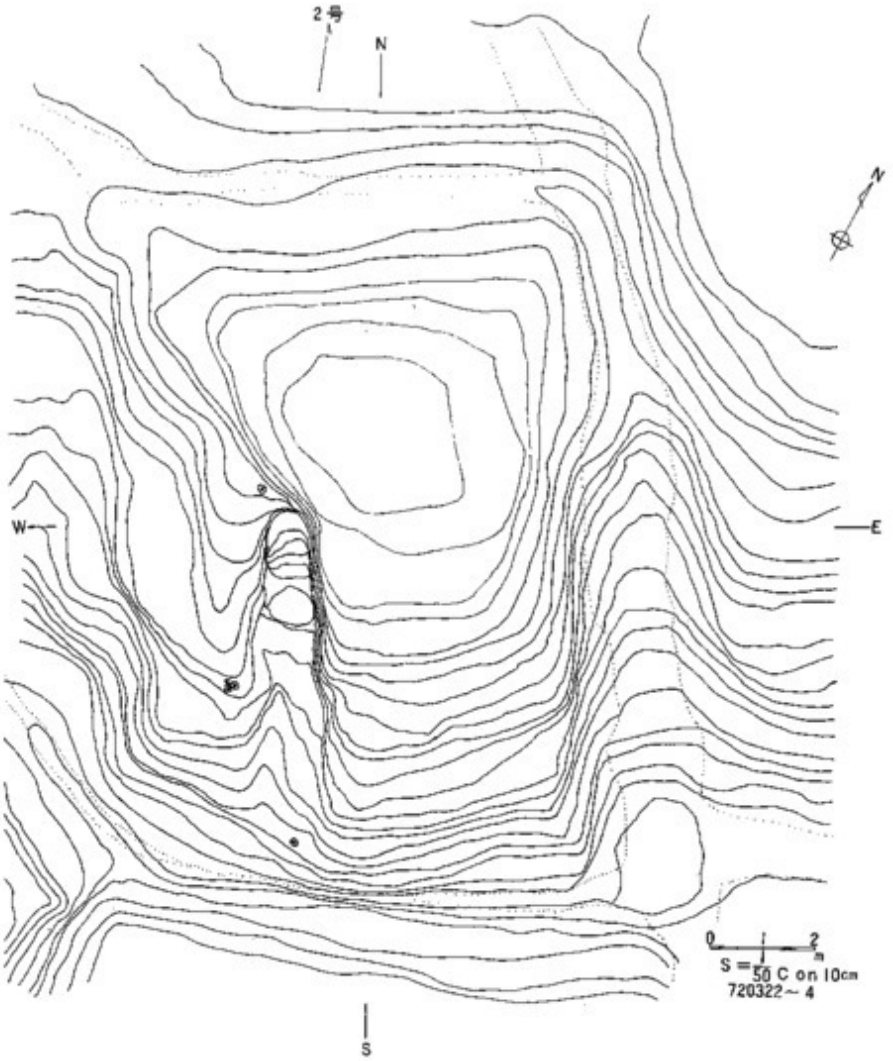
主体部の掘り方の内，羨道部においては，左右の壁面の構築が図４の如く第１段の基礎石から積石構築があり，その上端に天井石を架構している右壁に対して，左壁面は天井石架構のための積石は１～２段のみで，その下部は，地山の掘り方による壁面を露出させ代用している。基底部は地山面を露出させているが，羨道部の中央部と玄門位置に，それぞれ扁平な和泉砂岩による裾石とこれに直交して壁面には立石を配置している。

基底面は羨道口から奥壁に向い２度の勾配をつけており，玄室内部へ雨水の侵入を考慮した自然排水の機能を有したものと考える。

(2)　玄室部の構築

奥壁部の上部数個を欠損しているほか，前述の天井石１個不明である以外は，玄室内の構

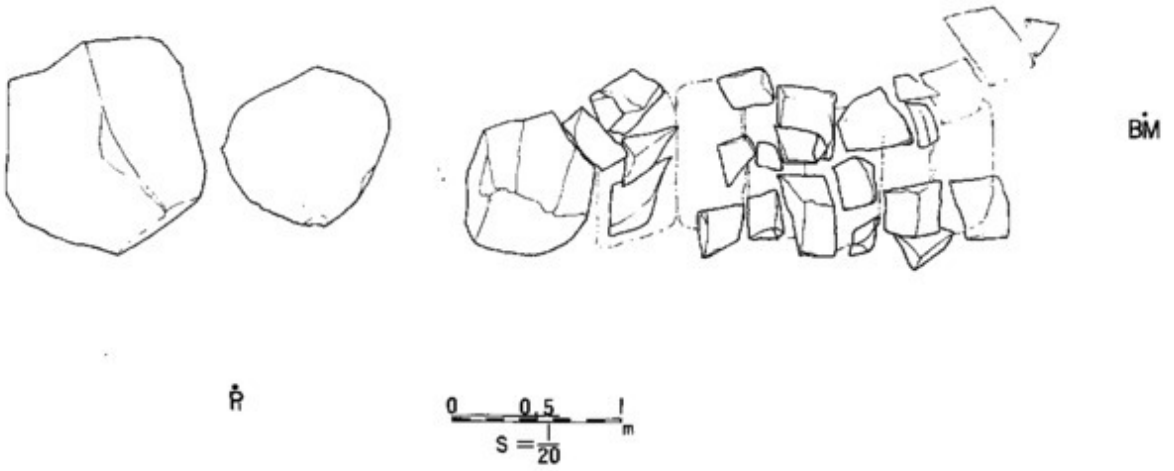
図2　1号墳々丘実測図



築は完全に残っており，玄室内の壁面に使用されている石材は，いくばくかの手が加えられている切石積である。

天井石は玄門部の天井石構架より一段高く側壁は横架され，第一石の天井石が横架されている。床面はよく整地された後に扁平な和泉砂岩を敷き，障壁により棺床部と区画されている。棺床部は盗掘により一部敷石は欠損しているが，構築時には全面に布石がなされていたと思う。障壁から玄門に至る間は左右の壁面より30～40cm控えて布石されている。これら布石の

図3　1号墳天井石俯瞰図



後，一面に河原石による円礫（玉石）が敷きつめられている。奥壁面の積石は垂直であるが，両側壁は縮約して天井石を横架している。

(3) 主体部の構築形態について

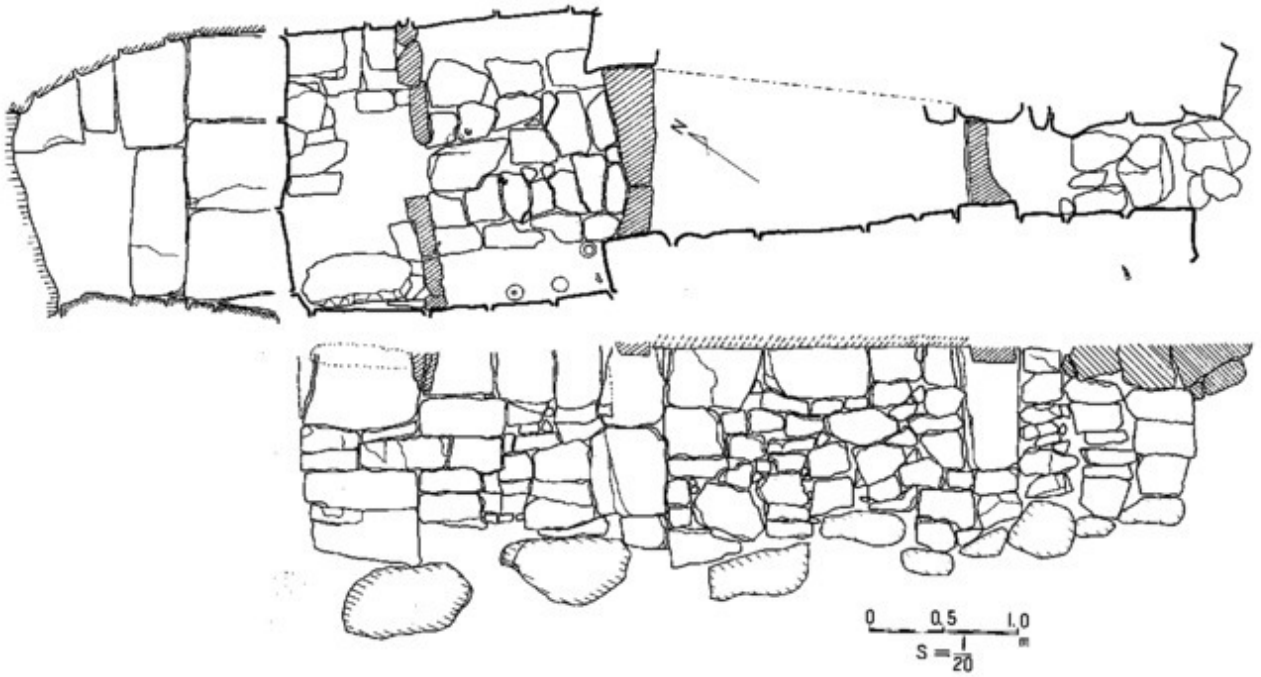
以上(1)(2)でふれた如く，主体部は両袖式の横穴式石室の構築であり，全長604cmの内羨道部の長さは364cm，玄室の長さは240cmで，羨道部の閉塞口の基底部の巾は55cm，玄門位置の基底部巾は110cm，玄室内の棺床は玄門位置より215cmで巾80cmの棺床と区画されており，玄室の巾は玄門側及び奥壁面側も190cm，天井部では130cmであった。

天井石の花崗岩2個をのぞく他は，和泉砂岩による構築となっている。

さらに主体部全体の区画についてふれておきたい。図4，図版第3に示す如く，閉塞口より120cmの位置に玄門部と同様な立石と楣石を構えており，前部と後部の区画がなされている。この区画から主体部は玄室部，中室部，前室部として構築されたものと判断して，その計測値は前室部120cm，中室部240cm，玄室部240cmとなる。また前述した如く羨道部全長364cmに対し，玄室部での計測長240cmとなり，玄室中央部の基底面の巾は190cmである。この計測からみて俗にいう三味線形の横穴式石室で，主軸を南37°東の方に向け開口している。

3 出土遺物

出土遺物は再度の盗掘により，僅かに須恵器3点と金環2個，銅鏡1個の出土はみたが，何分にも副葬品の全貌を知るすべもない。だが出土遺物の銅鏡と須恵器は少なくとも定位置であったと考えられる。また銅鏡および金環の出土が，棺床部以外で発見されたことにより，



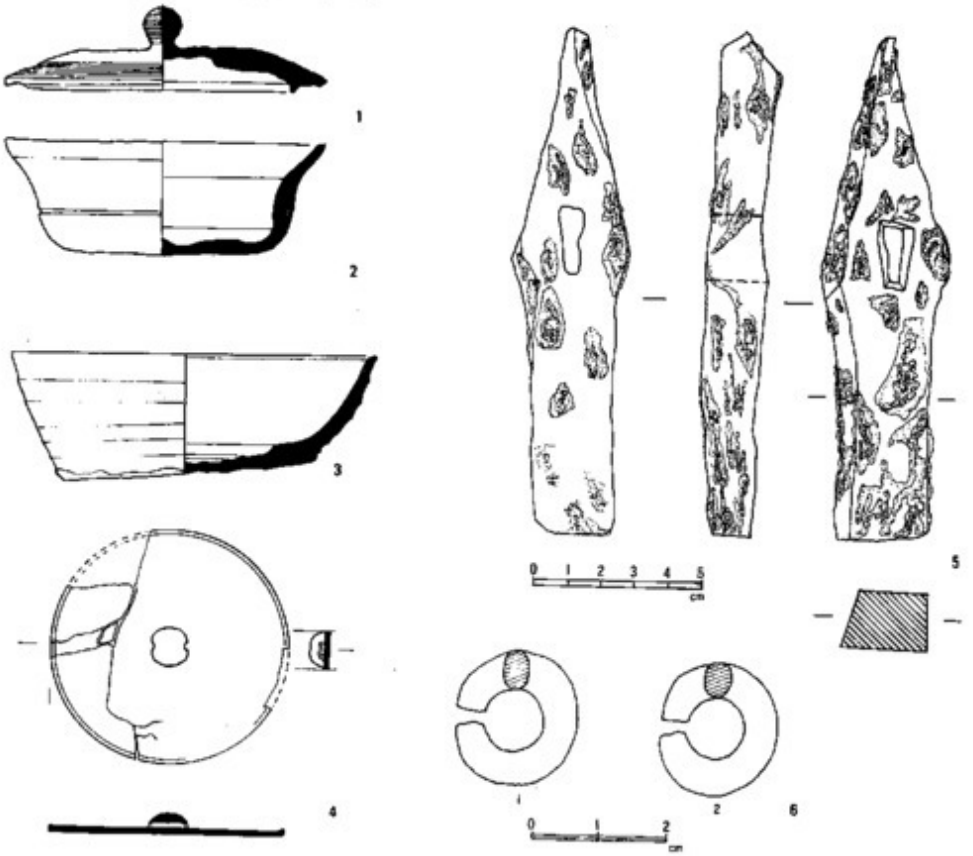
棺床部に安置された遺体の外に追葬者も考えられるが，雨水の流入により，遺体は発見することができなかった。

(1) 須恵器　　図5の1・2・3　図版第9上段の2・3

須恵器の1～2はセットである。坏身は口径9.5cm高さ3.4cmで体部に貧弱な凹線を有し，凹線より底部にわたりヘラ仕上となっている。凹線上部でしぼり気味に立ちあがり口縁部で外向する。口縁端は丸くおさめられている。内部は横ナデによる仕上がりで中央部に轆轤目がのこる。器形はやや焼成時の歪があり，器表面の一部に吹き出しによる自然釉が見られる。

坏蓋は直径9.5cm器高1.3cmで，天井頂部に1.2cmの宝珠形のつまみを有する。天井部は篦仕上げ左廻り，内部は横ナデ仕上げ，端部は丸くふくらみをもたせ，かえりは口縁部より突出し，身受部は巾広のくぼみをもつ，口縁の立ち上りは低く斜めとなる。器全体に歪みがあり，また3分の2以上に吹出釉がみられる。1・2共に焼成はやや軟弱で胎土中には多量の砂粒を含有している。

坏（図5の3）は口径10.5cm，高さ3.5cm，体部厚0.4cm，色調内外面共にレンガ色，底部から体部全域をへら削りしているが胴部に軽くナデ調整を行なっている。底部からの立ち上がり付近には，底部のヘラ切りによる盛り上がりがある。体部は外向し，中央部から垂直になる。口縁端では内湾気味にまるく仕上げている。内部は全面横ナデによる仕上がりであるが，底部中央には径4.5cm深さ0.5cmにわたってロクロ目の凹地がある。回転方向は右で底部に篦記号がある。焼成は良好である。



(2) 銅　鏡　図5の4　図版第9上段の5

銅鏡の面径7cm厚0.153cmで，はなはだしく緑錆化し，文様等不明である。鈕の径は1.1cm高さ0.55cmを計測した。総重量23.9gであった。

(3) 金　環　図5の6　図版第9上段の4

出土時は緑錆が付着していたが，容易に緑錆は除去できた。光沢さん然たるものである出土数は2個で計測値は下記である。爪で傷がつくほどの硬度である。

長　径	短　径	太　さ	重　量
1.81cm	1.74cm	0.59cm	6.30g
1.81cm	1.74cm	0.60cm	6.80g

(4) その他　図5の5　図版第9上段の1

その他に主体部外での出土遺物として，羨道口の基礎石の第1石と第2石の間に鉄器を発見した。

鉄器の全長15cm，その中央部には長さ2cm巾1cm下端で0.5cmの穴を穿ち，奥行の計測値は長さ0.7cm，巾0.3cmと狭まっている。この穴を中心に一方は長方形に，また一方は4面より狭まりピラミッド状に調整ている。両端部には共に平面な接着面を持っていることと，穴に付着している植物遺体から柄を挿入し鎚としての機能を持つものと考えられる。

Ⅳ　かいなご2号墳

1　外部構造　墳丘

2号墳の天井石はすでになく，墳丘を思わせるよりも，凹地を呈しており，ただ尾根の切り込みから墳丘であることが観察できたにすぎない。

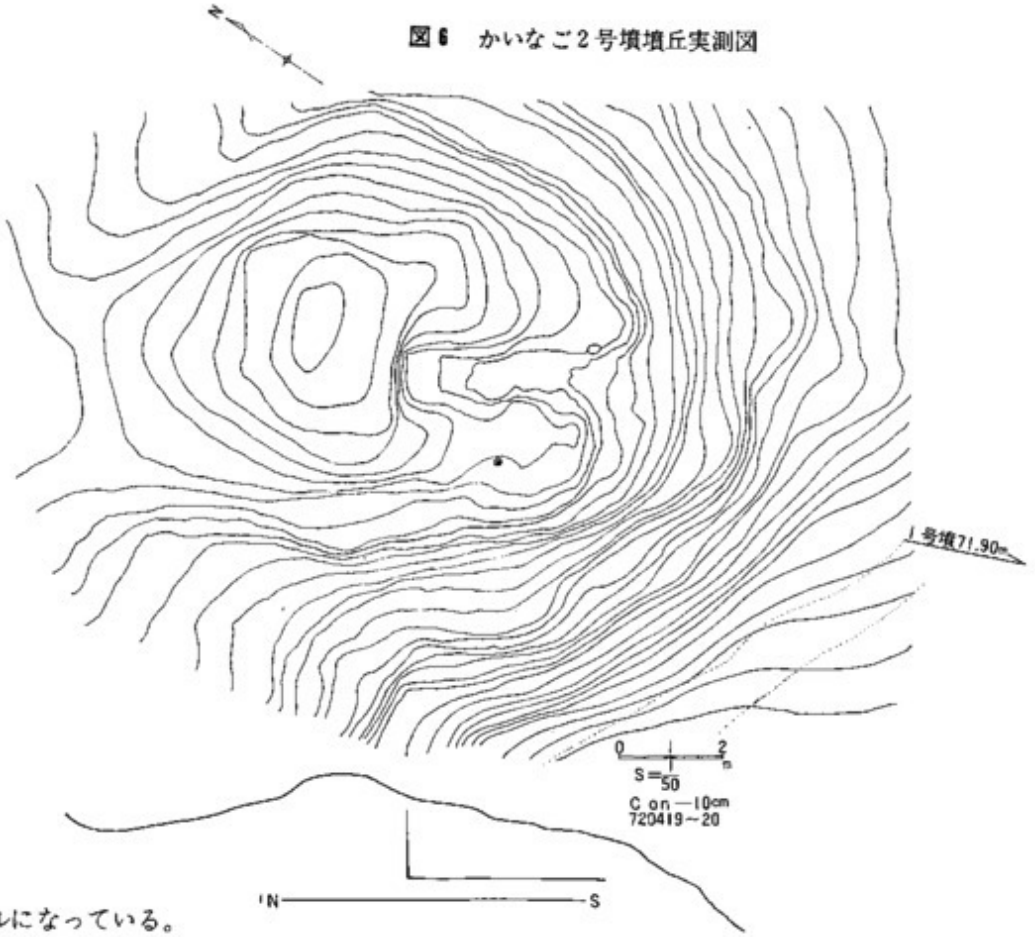
1号墳と同様に尾根を切り取り，その切り取った土塊により封土作業を完結させたものである。墳丘の現在の高さは1.3mであり，天井石を横架し復元高は2m前後になろう。ただ図6に示す立地にあるために，封土の流失は激しく行なわれ，天井石は早くより露出した状態であったと推察される。立地条件から墳丘の規模は判然としないが，ほぼ直径9m程度の円墳で外部遺構は認められない。

2　内部構造

主体部の構築は一気に尾根を切り込み，羨道部にみられる掘り方の不完全性からみて，相当に省力化された構築となっている。

玄室部は無袖の横穴式石室であるが，図7に示す如く，羨道部は玄室の閉塞の補助的機能をはたす程度のものであり，掘り方においても玄室内の第1段（基礎）の石積の上端部と同

図6　かいなご2号墳墳丘実測図



レベルになっている。

石積は第1段目（基礎）と奥壁を除いては，石材の選択は粗雑である。奥壁は垂直であるが，両側壁は天井部で縮約した持ちおくりとなった小口積である。石質はすべて和泉砂岩であった。

主体部は主軸を南34度東に開口している。

閉塞施設の第一石の内面を基準として玄室長は260cm，基底部巾125cmの長方形である。天井高を現存する壁面の上端面にそのまま横架させたと見れば，天井高は140cmとなる，羨道部を含めた数値は390cmとなる。

3　出土遺物

天井石は皆無の状態であったため，出土遺物は望めないと憶測していたが，意に反して遺物は，ほとんど定位置で発見された。また遺物の大半が完形品であった。ただ1個天井石が玄室奥壁面の中央に落ち込み，遺構の基底面に打げきを与えていた。この天井石皆無の状態で永く，風雨にさらされ，雨水の流入を受けると同時に土砂の堆積するところとなった。この流入土の充塡により遺物の保存が保たれた一面，遺体は完全なる消滅を見たものと思う。

発見された遺物は，土師式土器の坏1個，須恵器の壺1個，甕1個，有蓋坏2組，高坏1個，提瓶1個，横瓶1個，玉類は勾玉1個，管玉10個，丸玉28個内色玉6個，棗玉1個，切

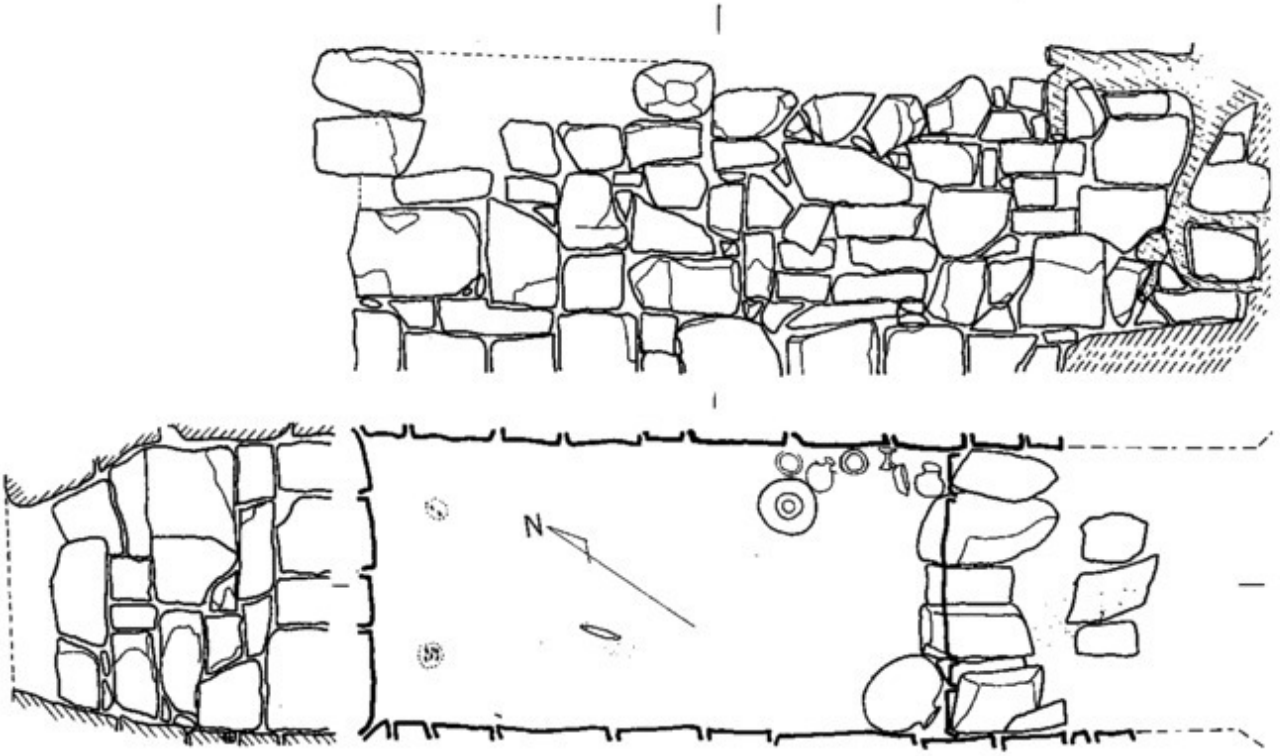


図7　主体部実測及び出土遺物状況図

子玉1個，鉄器として鉾1であった。

① **土師式土器**　坏　図9－1　図版第9下段4

土師器の出土は1点のみであるが，発見時には器に亀裂は生じていたが，完全な形態をとどめていた，何分にも還元しており，補強剤（バインダー）による修復をした。坏の計測値は口径14cm，高さ5.5cm，器厚は底部で0.7cm，体部で0.5cm，胎土は赤味茶の砂質粘土で0.02cm前後の砂粒を多量に含む胎土を素地として，調整の泥が0.08cmの厚味で全面にナデ付けされている。

② **須恵器**

⊙ **壺形土器**　　図8－6　図版8(1)・(4)

土器の計測値は口縁部径9.8cm，頸部径7.6cm，胴部最大径14.4cm，器高13cm，器厚は体部で0.6cmで器壁はやや一定している。

体部はやや肩張りのある球形を示すが，頸部からの立ちあがりは，口縁部で強く外反し，口縁端部は反転し口縁唇部は稜をなす。

肩部は明瞭な横ナデ仕上げを観察することができ，内表面は入念な横ナデ仕上げであるが，器底部の器厚は不調が目立つ，胎土焼成共に良好で色調は青灰色を呈する。

⊙ **有蓋坏と坏蓋**　図8－2・3・4・5　図版第9下段1・2

イ）坏蓋　2，4共に天井部は丸く仕上げられており，4においてはやや歪が認められる。また共に天井部と口縁部を区画する稜が明瞭である。坏蓋の口縁端面は2に明瞭に4は僅か

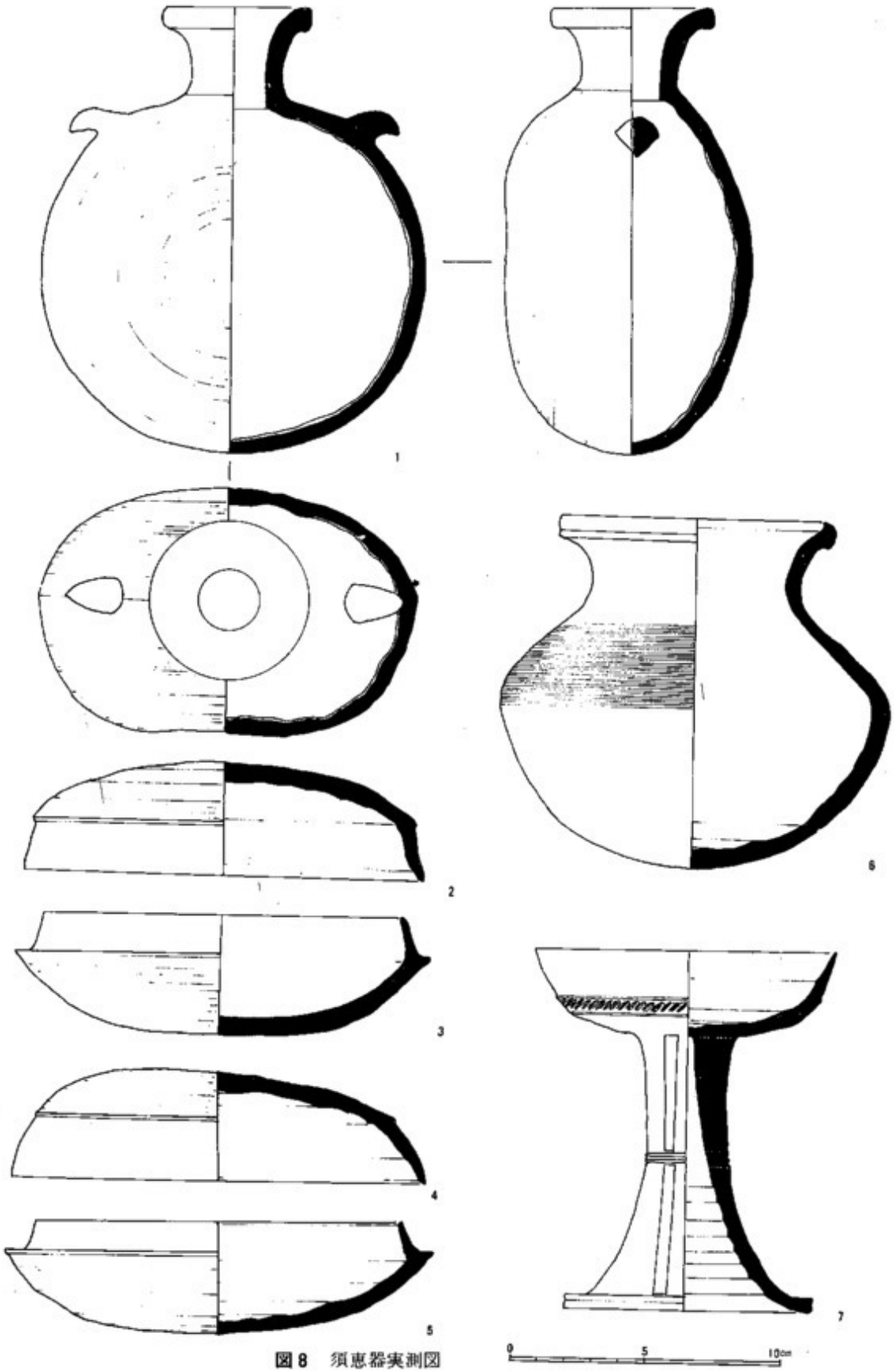


図8　須恵器実測図

にくぼむ程度である。

2は天井部ヘラ削り左廻りで天井部の稜付近から横ナデが見られ，口縁部は入念なナデ仕上げである。4はヘラ削りの痕跡を僅かにしのばせる程度の横ナデ仕上げが天井部全面にほどこされ，口縁部は2と同様である。計測値は口径14.9cmと15.5cm，器高4.3cmと4cm，器壁最大は0.6cmであるが共に一定しない。胎土には砂粒をわずか含むが焼成は良好である。

⊙ 坏　身

坏身3と5はいずれも，受身が水平に近い状態で外方にのび，端部は丸くおさめられている。口縁部のたちあがりは，共に1.5cm程度を有し，口縁昏部は3では丸く，5は稜をなす。器形は3は丸味を，5は扁平な感じを受ける。仕上げナデを内面に残している。ヘラ削り方向は逆まわりである。

⊙ 提　瓶　図8－1　図版第9の下段3

体部の背面には回転を利用したカキメが施されており，体部肩部には鉤状に屈曲する耳をつけ，頸部の立ち上りは口縁部で強く，くの字形に外反し，口縁端部は反転せず丸くおさめられている。口径5.3cm，器高16.5cm，体部径14.3cm，体部最大厚9cm，器壁厚は0.6cmであ体部の器壁厚は計測不安のため誤差値を白地で示した。

⊙ 高　坏

図8－7　図版第10の2

無蓋高坏で，長脚2段透しの高坏である。坏部には口縁部と底部を区画する稜を有する。

口縁部は外上方にのび，端部は丸くおさめられている。坏の内表面は横ナデ仕上げである。稜と底部のにぶい凹線との間に櫛描き列点文をめぐらしている。脚部は2段に別れ，三方に透しをもつ。裾部は外方に大きくひろがり，脚部端は段をなしている。

口径11.2cm，器高13.5cmで焼成も良好でにぶい光沢をもっている。

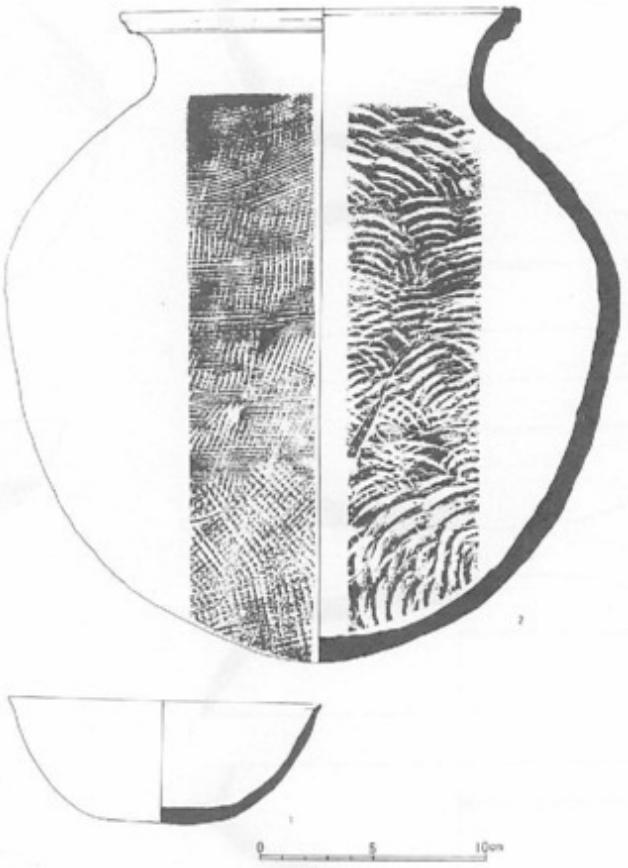


図9　土師式土器と甕

⊙ 甕　　図9－2　図版第8の(1)(2)

口縁部はくの字形に短く外反しながらもち上げられ，外面に2稜を有し頸部と区画をしている。口縁端は丸くおさめられている。内面部では反転しくびれている。口縁部での内外表面は共にナデ仕上となっているが，体部の内面は波文を捺押し，表面には格子目の叩目文を有する。胴部から肩部にかけてやや右上りのロクロ目がみられる。口径17.7cm，胴部径27cm，器高29cmの小型の甕であり，焼成はよく胎土も良質である。口縁部が僅かに破損している。

⊙ 横　釜　　図10　　図版第8(2)第10の1

松山市では初めての出土遺物である。完形品である。発見位置は，閉鎖施設と近接し，閉鎖面と側壁の角の2等分線上に，口縁部を玄室の隅方向にむけて置かれていた。頸部から垂直にたち上り，口縁部は強く外反しており口縁端は引き下げるような形で丸くおさめている。頸部及び口縁部は内外面ともにナデ仕上げである。体部では内面に渦文を捺押し，表面に叩き目文を有する。拓本図10の1・2に示す叩き目とロクロ目がそれぞれに方向を異にしており，器物の製作の工程がよく観察できる。計測値は，口径12.5cm，器高32.8cm，胴部径36.5cmと中29.3cm，さらにロクロ目，叩き目の変化位置は，断面図方向では中心線より14cmの位置，正面図方向では中心線より12cm位置から変化が始まる。胎土焼成共に良好で淡青灰色の仕上りとなっている。

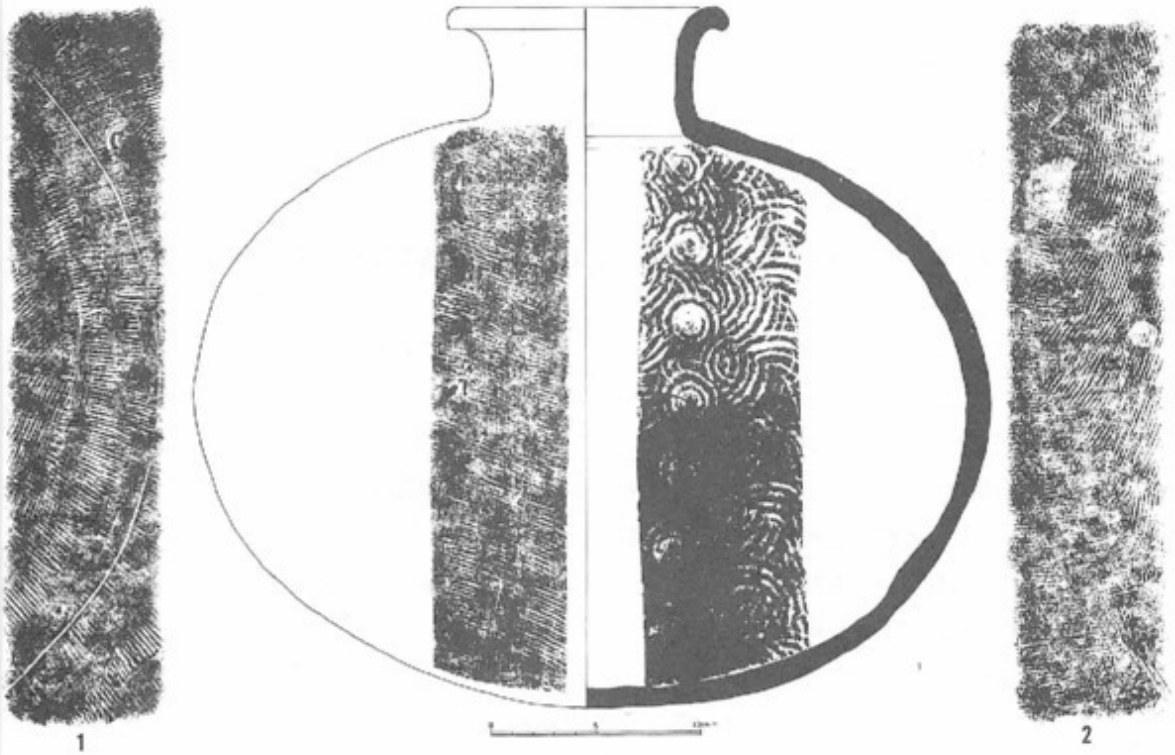


図10　横　釜

③ 玉 類

⊙ 勾 玉　図11—5　図版第10—6

乳白色を地色とする緑色の勾玉で，穿孔は両面より行なわれ，孔径最大，A面0.4cm，B面0.26cmである。頭部は4方向よりのにぶいカーブを持つ研磨である。背部は丸味をもたせており，腹部にはえぐり込みがある。総体的にコの字形に湾曲している。計測値は，全長18.55mm，巾9.9mm，厚味7.20mm，重量1.30gの硬玉である。

⊙ 管 玉　図11—6(1)~(10)　図版第10—5

緑色の碧玉で俗にいう出雲石である。穿孔は10個とも1方向よりうがたれているが，1のみはややことなる。研磨は良く，(5)のみ，にぶい稜角が認められる。両面の切断面に丸味をおびるもの(1)・(2)・(3)・(4)・(6)・(10)である。

No.	全長	長径	孔径	短径	孔径	重量	単位mm，g
1	16.55	5.90	1.0	5.66	2.4	1.0	
2	17.65	5.23	2.0	5.13	1.2	0.9	
3	20.05	6.67	2.8	6.45	0.8	1.6	
4	19.13	7.18	3.6	6.94	1.4	1.7	
5	19.62	7.45	1.0	7.45	2.6	2.2	
6	25.35	7.84	3.6	7.76	0.8	2.9	
7	20.37	8.63	1.6	8.49	2.0	2.9	
8	20.42	6.75	4.6	6.73	1.65	1.5	
9	20.90	6.96	2.2	6.96	1.4	2.0	
10	22.00	10.25	2.4	9.95	1.0	3.5	

⊙ 切子玉　図11—3　図版第10—4

石質は水晶で平らな底面を共有しており，断頂部では円錐状である。穿孔は一方向から行われている。

No.	全長	長径	孔径	短径	孔径	断頂部径	
	7.25	7.15	4.0	6.50	1.3	9.30	単位mm，g

⊙ 棗 玉　図11—4　図版第10—4

石質は緑色の出雲石である。研磨時の稜角がにぶく残る。穿孔は一方向から穿たれ，穿孔角に傾斜がある。底断面もやや傾斜している。

No.	全長	長径	孔径	短径	孔径	断頂部径
	12.20	6.00	2.00	5.80	0.8	8.80

⊙ 丸 玉　図11—2　図版第10—4

ガラス玉（玻璃）で，器形は各種各様の不ぞろいであるが，直径0.7cm，全長0.5cm以上を丸玉として取り扱った。色調は紫紺色を呈するもののみであった。出土数30個の内形の顕著に

異なるものを図示した。

⊙ 小　玉　　図11—1　図版第10—4

丸玉以下の計測値を有するものを指すが，色調は，黄色，緑色，水色の玻璃である。

④ 鉄　器

本遺構においても，鉄器の出土は1点のみであった。天井石の撤去により，雨水にさらされた結果によるものかとも推察される。

⊙ 鉾　　図11—7　図版第10—3

矛は全長19.5cmを有するが，先端部の刃部を欠損しているため，両刃なのか，片刃なのか不明であり，また石突を具備する通有のものなのか不明である。ただ身の断面は長方形を示し，基部の袋の形は円筒形である。

V　結　　語

かいなご1号墳と2号墳とでは，出土遺物からみて，2号墳が，1号墳よりやや先行するものと判断される。構築面から考察すれば2号墳にくらべ1号墳ははるかに入念な計画設計となっている。

盗掘により，遺物の全貌は不可能ではあるが，残存する遺物の内銅鏡及び金環等からみても，また主体部構造から推測しても明白である。

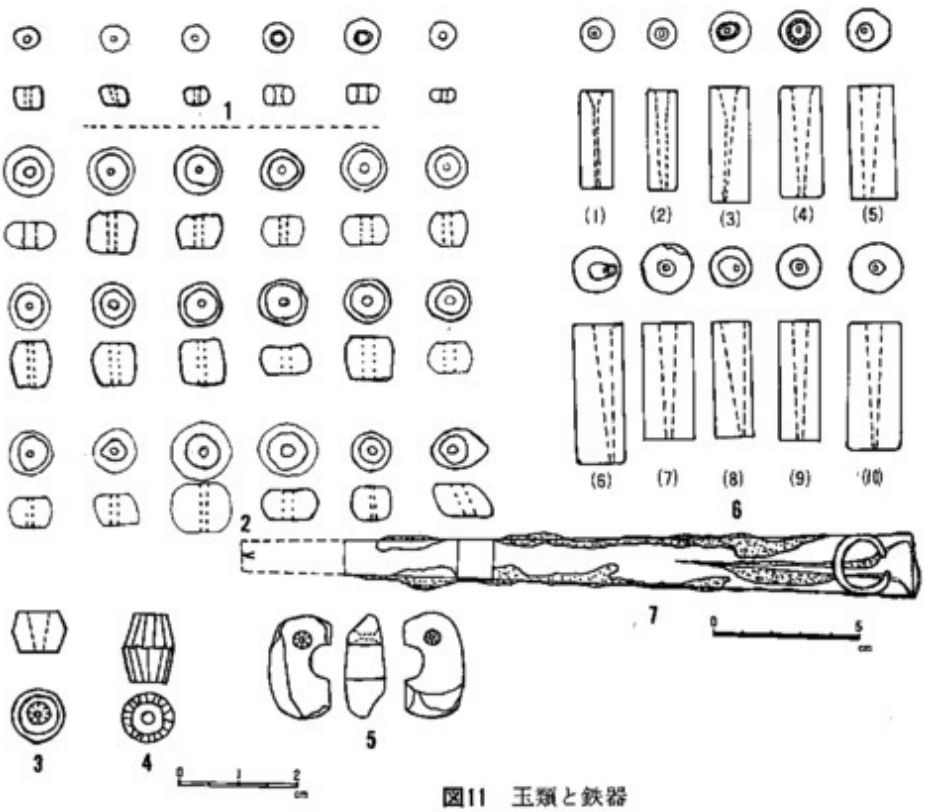


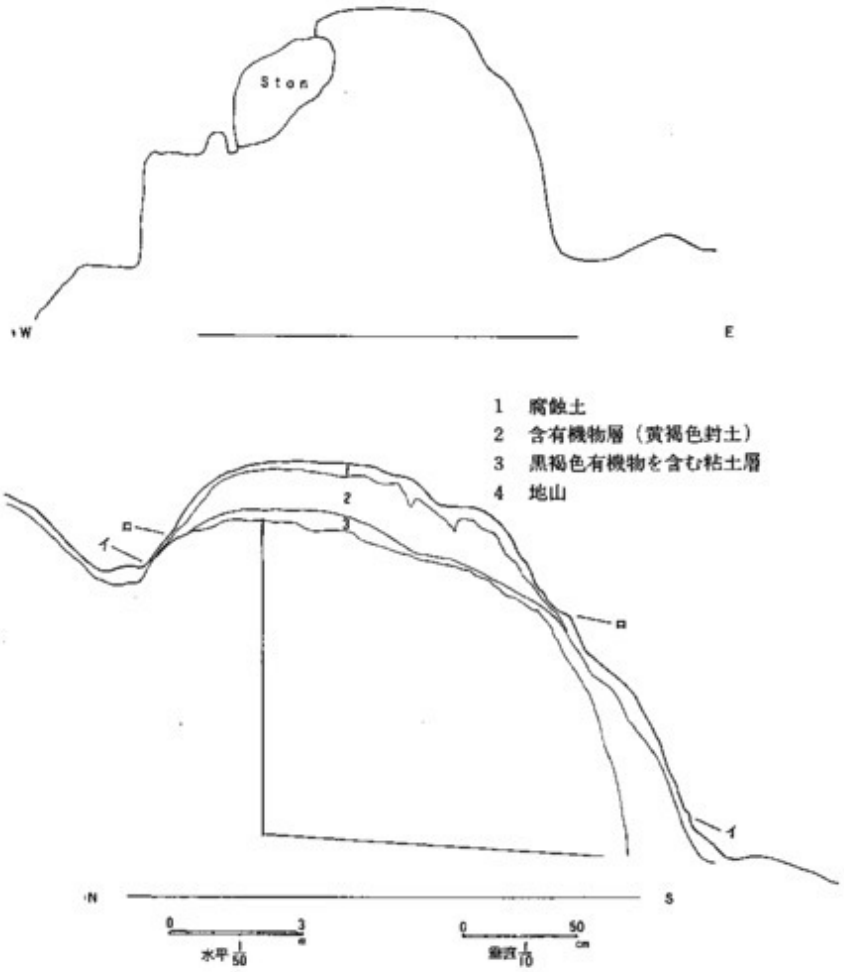
図11　玉類と鉄器

さらに玄室内に炭や，灰の遺存物が多量に検出されたことにより，玄室内での宗教的行事が実施されたものと考えられる。２号墳では炭や灰は認められなかったが，副葬品が定位置よりセットとして出土を見た。このことにより当時（埋葬者）の生活用品の一端がうかがえる。主体者の生前の社会的位置付けも可能になりはしないか，ちなみに埋葬された武具は鉾であり，その他の武具は一切埋葬していない点を強調すれば身分的な社会構成にまで波及したとも見られるまでに副葬遺物は整然としている。

１号墳については，本文中にもふれたごとく，玄室，中室，前室とを横ギした横穴式古墳の形式を有する主体部構造となっており，羨道部の東壁に一部地山を活用した粗雑性はあるにしても，前述の配置構成となっている。

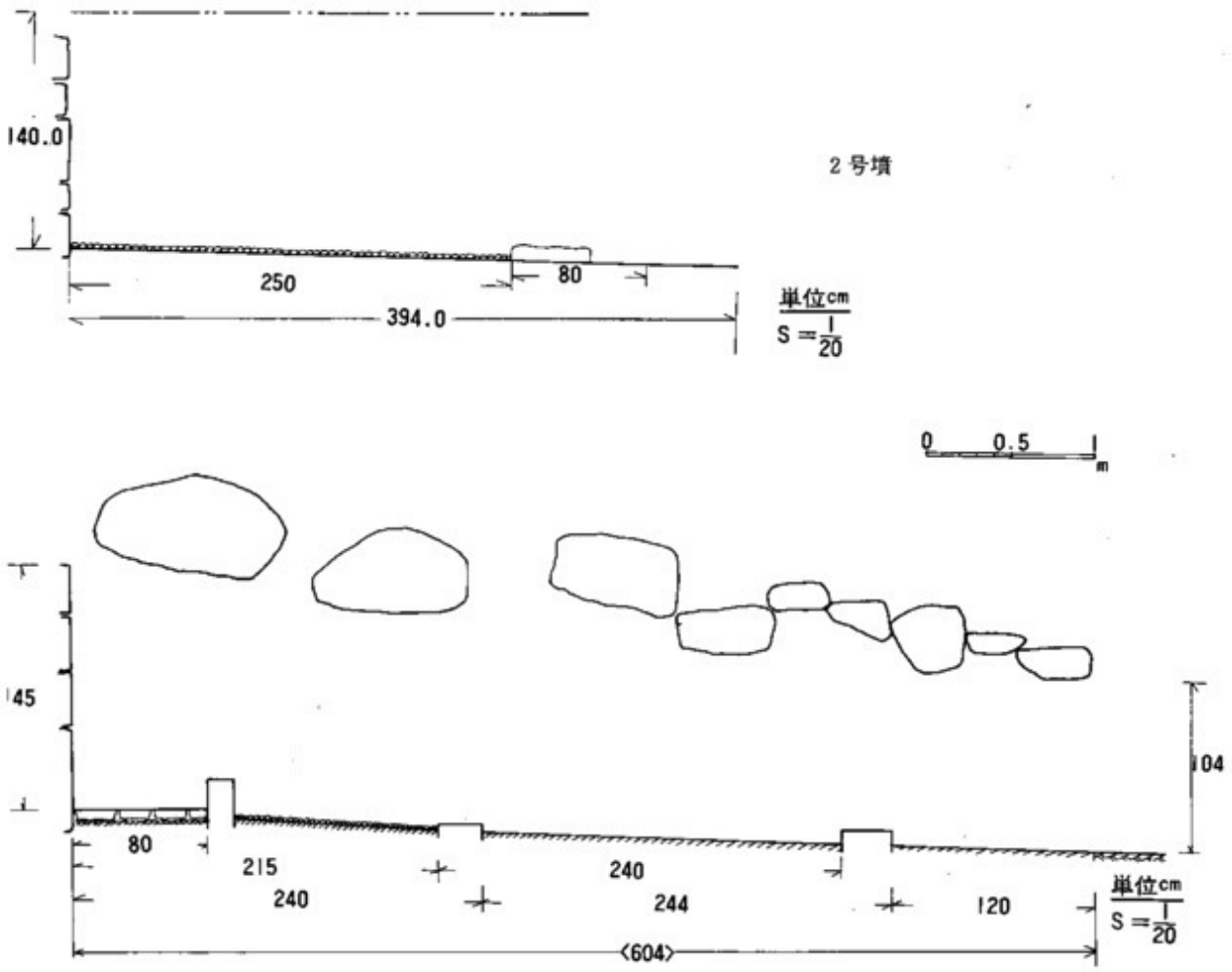
ちなみに24cmを単位として算出するならば，前室は閉塞位置から中室の立石までは，５尺×２尺，中室は全長10尺×巾２尺で玄門部では巾５尺と広がっている。玄室は全長10尺×巾６尺となる。天井高は羨道部３尺，玄室部奥壁では基底面で５尺を計る。この数値で２号墳を算出すれば，玄室部は全長10尺×巾４尺となる。さて１号墳における前室部の５尺×２尺を基準にすれば，１号墳の各室の比は，前室１に対し中室のしめる面積は２倍となり，玄室では３倍となる。また２号墳では２倍となる。さらに玄室にしつらえられた棺床は約４尺×３尺となる。

図12　１号墳墳丘断面図とセクション



かいなご古墳群として17基確認されているが，いずれも尾根の陵線を利用した１，２号と同様形式の封土でもって，墳丘造築を行なっている。これらの古墳は家族墳的な複数の埋葬者を有する古墳と第２号墳の単一埋葬(註１)

図13　かいなご１号墳と２号墳の計測比較図



者によるものとが共存している。開口せる古墳の主軸方向は南北を取る古墳が多いが，うち２基は主軸方向を東西に取り西に開口している。(註１)

かいなご１，２号墳については，発掘中途に地主よりの保存問題を提案され，開墾の予定外に置かれたことにより，調査も最少限の調査にとどめた。特に１号墳にみられる墳丘は当地では数少ない形態であると同時に，１号墳の内部遺構についても，当地では未発見の主体部構造であった。２号墳は無袖の最少規模の横穴式の石室を有するもので，当古墳群の内すでに開口している２基は，持ち送りの天井の高い横穴式石室と構造を異にしている。

以上の差異を有する２基の古墳が永く保存されることを希望していただけに，調査側として最大のよろこびを感じるものであり，保存への万全をきすための配慮をした。

註１　愛媛大学農学部付属農高教諭森浩一氏により，農道開設中に発見され調査されたところでは，２体の遺骸が安置されていた。

松ヶ谷古墳

松ヶ谷古墳

I　調査にいたる経過

松ケ谷古墳所在地付近の丘陵は第二次大戦後山林を開墾し，果樹園として造成を行ない，現在は柿を栽培している。この地目変更による開墾により，墳丘部は周囲の客土に利用され一部に天井石を露出した状態であった。その後人の知るところとなり再度の盗掘に会い，また，柿の成長にともない，盗掘部分より崩壊を始め危険な状態であった。また考古学ブームで子供等の恰好の探検場所となっていた。発掘調査終了後は危険防止の上からも地主の快諾もあり，埋めもどすこととなった。

この過程ででき得る限りの調査を実施し記録保存としての調査を実施した。

遺跡の位置と環境

1　遺跡の位置

松ケ谷古墳は，松ケ谷古墳群の内10数基の内にある本古墳は，東経132 48′ 32″，北緯33° 44′ 33″の交差する周辺の地域である。行政的位置は松山市恵原町 松谷202番地で所有者田和岸夫氏の果樹園である。

2　自然的環境

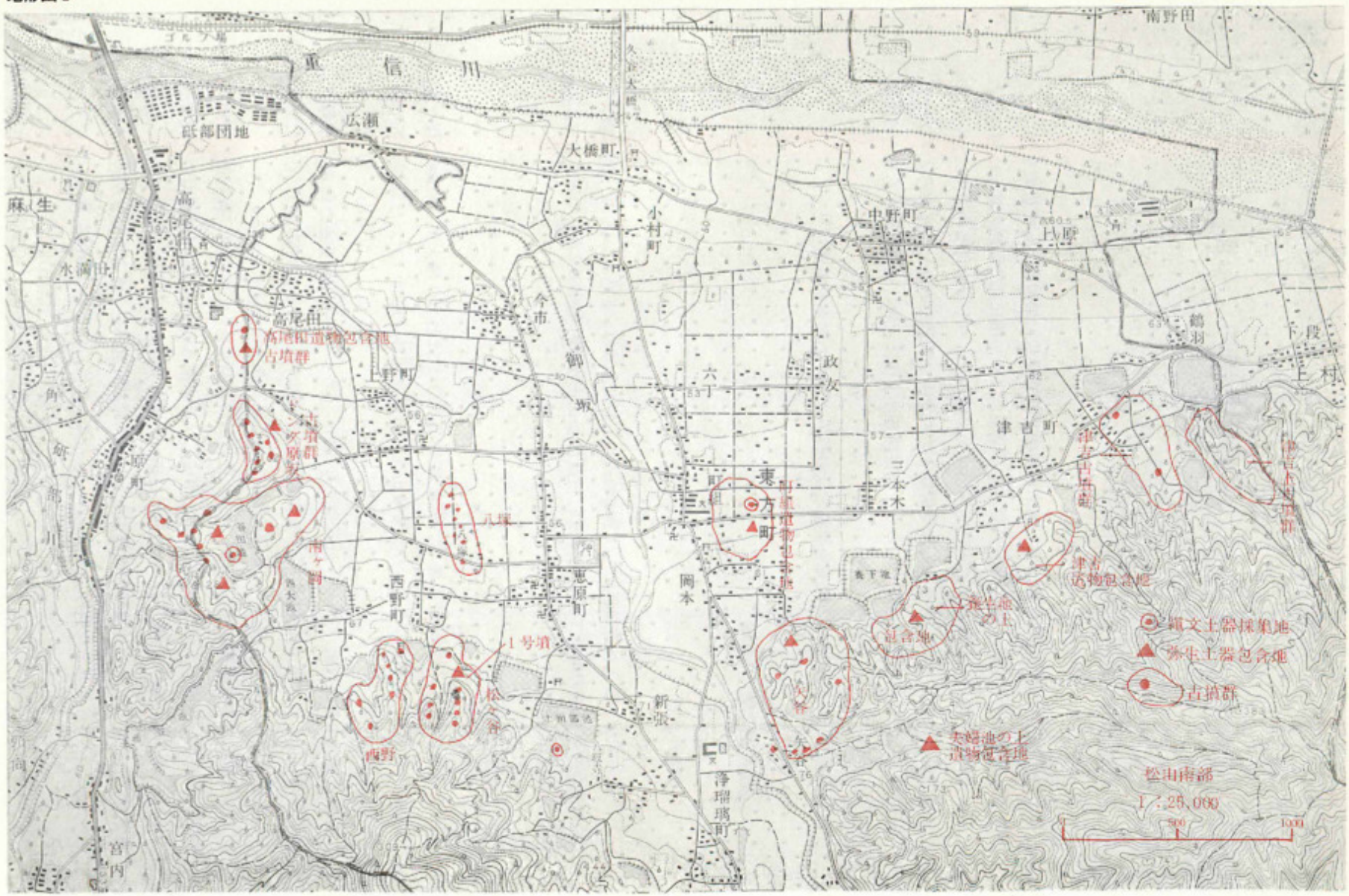
四国山地を背景にした分岐山塊で，黒森山（1154m）にはじまり峰大平（651m），塩ケ森（347m），大友山（407m）と連なり，分岐山塊の端部は通谷（120m）どんだ原坂付近で80mとなり消滅する。

分岐山塊の中腹三坂峠（756m）は国道33号線のハイウェーが，山腹をまた陵線を蛇行しながら走行し，その眺望は四国の季節を満喫させる地域である，また地質学的にも実に豊かな研究の場所でもある。ちなみに砥部の衝上断層も塩ケ森とは直線上にある。

この分岐山塊を分水峯とする河川がある。三坂峠に水源を発した久谷川（御坂川）は周辺の開析谷の水を集め下流地帯では扇状地を形成し，その後下流で西流して砥部川に合流する。

また一方分岐山塊の西側を流れる砥部川は藤川に水源を発し，下って砥部町で肥よくな盆地を形成している。その後地盤の隆起にともない，砥部町宮内をすぎるあたりから，小平垣面または小緩斜面を有する地形となり，かつての谷床が伺われる谷壁階段が発達している。

地形図 2



重信川
広瀬
砥部団地
大橋町
小村町
中野町
上原
南野田
鶴羽
下段
上村
高尾田
高尾田遺物包含地
古墳群
上野町
今市
御坂
六丁
政友
津吉町
三本木
東方町
八塚
西野町
恵原町
岡本
新張
浄瑠璃町
1号墳
松ヶ谷
西野
津吉古墳群
津吉古墳群
津吉遺物包含地
縄文土器採集地
弥生土器包含地
古墳群
夫婦池の上遺物包含地
松山南部
1：25,000
0
500
1000

この谷壁階段地域を貫流し下流の平野部高尾田で久谷川と合流したあとまもなく，水満田で重信川と合流している。

3　歴史的環境

重信川の南岸地域はかつては重信川の侵蝕をこおむった地域である。その跡をなぞらえる地名がある。上流地域の重信町では宮ノ段，下三段，松山市津吉町では沖中，東方町では政友，現在の大橋町は旧名河原分であり，これより南に小村があり，この小村より約100m行けば東方町六丁の河岸段丘につく，この付近で現在の久谷川は西流している。大橋町をすぎれば，砥部町広瀬につき，高尾田では，かって分岐山塊の山麓を穿った侵蝕による露頭がある。この松山平野を東西に貫流する重信川にさえぎられた南岸地帯でのかっての古代の生活舞台は，この河岸段丘上に点在している。ちなみに現在発見されている遺蹟の内，古くは縄文時代後期に属するものに砥部町と松山市にまたがる，総称して南岡遺跡がある。(註1)その他に東方町町組遺跡，坂本町八坂寺周辺の縄文式土器を出土する遺物包含地がある。

弥生時代の遺跡，遺物包含地としては，津吉，岡本，矢谷，新張，恵原，西野，上野とそれぞれ海抜100m前後の等高線上に列点状に存在する。久谷川の上流地域には，標高140mラインに，夫婦池の上遺物包含地があり，坂本町関屋では，抉込石斧や石剣を出土している。一方砥部川流域においても前述の谷壁段丘には，弥生中期の遺跡がある。さらに行道山は弥生時代の高地性遺跡として指摘されている。(1)　古墳時代における遺跡もまた多く点存する。中には群集するものもあるが，いずれもその多くは，後期の古墳から終末期にかけてのものが大半をしめている。しかしこれらの古墳も戦後の相橘類の造園化により破壊されたものが多くまた破壊寸前にさらされている。古墳分布状況は地形図2を参照されたい。

註1　県立運動公園として開発されるため，調査を実施している。

III　発掘日誌

発掘期間中に再三に渡り，集中豪雨の襲来があった。泥水化した流入土との戦いに始まり天井石，側壁の崩壊に逢い，当初計画より長期にわたっての調査となった。玄室部前半部に集中していた副葬品の発見から取りあげまでの間は実に危険な状態で発掘調査を行った。

8月6日　　晴

墳丘付近の除草（草刈）を行ない，その後，墳丘実測を開始した。

8月7日　　晴

墳丘の実測および周辺部の古墳の再確認を行った。

8月8～9日晴

盗掘部分に流入した土砂の排土作業をした。

8月10日　晴後集中豪雨

集中豪雨により作業は9時30分に中止した。

8月12日　晴

終は集中豪雨による流入土の排土作業をした。

8月13日　晴

盗掘による玄室内の調査により盗掘は基底部にまで達していた。基底部で切子玉，銀環及び須恵器片数点を発見した。

8月16日　晴

玄室内に天井石が傾斜し落下しており，内部の清掃に手間取った。午后3時夕立があり両側の壁がゆるんだ。

8月17日　晴

羨道口方向に充鎮する落石と流入土の排除を進めながら，落盤のための防止対策を取りつつ作業を続行した。

8月22日　晴

19日～20日の3日間に至る大雨のため，ついに壁面は崩壊した。

主体部内の水のくみ出し後，崩壊した壁面の石をチェンブロックに排出した。

8月23日　晴

羨道口の閉鎖施設を除去し，玄関付近の充鎮した流入土を搬出した。須恵器の集中的な出土を見たが，泥状化した流木土にはばまれ発掘日困難を極めた。

8月24日　文化財専門委員会のため中止，松ヶ谷の現状を報告する。

8月25～26日

玄室内の羨道部付近の土砂を搬出したために，25日，26日と2日間の間に両壁はゆるみ崩壊をはじめ，近くの柿も1本転した。

8月27日日曜

日曜日を返上し，敷石が確認できるまでに検出作業をすすめた。

8月28日月曜晴

玄室内の敷石の実測並に，敷石（玉石）の排除をした。床面の実測。

8月29日火曜

雨により玄室の東側の壁面もゆるみはじめ崩壊の前兆を示してきた。できうる限りの記録を取った。

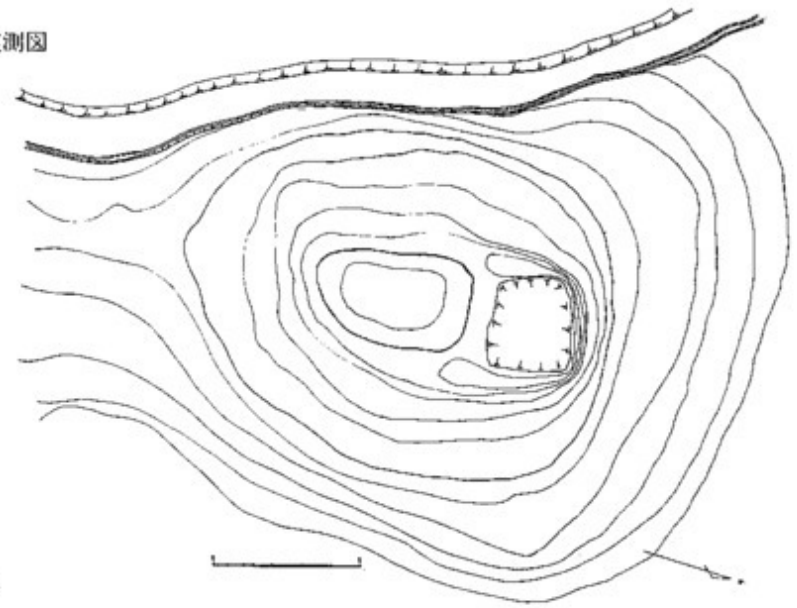
8月30日から9月6日まで実労働日数7日をかけて埋もどしの作業を完了した。

Ⅳ　松ヶ谷1号墳

1　外部構造

松ケ谷1号墳は墓地の直上にあり，前述の開墾により墳丘は完全に破壊され，僅かに50cm程度の封土を部分的にとどめていた。造園地内のため，可能な範囲内での調査実施となり，墳丘及びトレチ調査により外部遺構の確認は不徹底とならざるをえなかった。

図14　松ヶ谷墳丘実測図



2　主体部の構造

石室は両袖式の横穴式石室である。羨道部と玄室は2個の立石で区画され，閉塞施設は玄門の位置で行われていた。主軸を南5度東の方に向け開口している。玄室は全長510cm巾は玄門のところで170cm，奥壁では200cmである。天井の高さは玄門位置170cm，玄室内240cmであった。壁面は，奥壁では直立し両側壁での石積は持ちおくりとなっている。基段石および，玄門立石，奥壁の大盤石と天井石は自然石をもって積まれているが，他の石積は割石がほとんどである。石質は和泉砂岩で統一されている。羨道は掘方の基底面を基準とした石積みとなっており，天井石の横架は玄門部の横架に次いで1石しかなく，壁面を玄門部の閉塞工程に至る間の土留的機能を有したにすぎない程度の構築となっている。

閉鎖口の施置は玄室面に一列と，巾最大90～70cmの距離に一列に割石で石積みが施され，内部に地山の同一土質土を持って，叩きしめた状態で天井部まで構築されていた。ただ天井部下段の1～2段は，構築まもない時期に崩壊した（崩壊による落下石は玄室内の流入土の最下部に，副葬された遺物の直上にあった）と思われる。

横穴式石室とはいえ，図16で示めす如く羨道部の構築は貧弱で，形式化されたものと見るべきであろう。なお下部遺構は閉塞口の前庭や羨道部にもみられなかった。なお玄室部の天井石は8～9段積築されたものに横架させたものと推察できる。

図15　松ヶ谷1号墳天井石俯瞰図

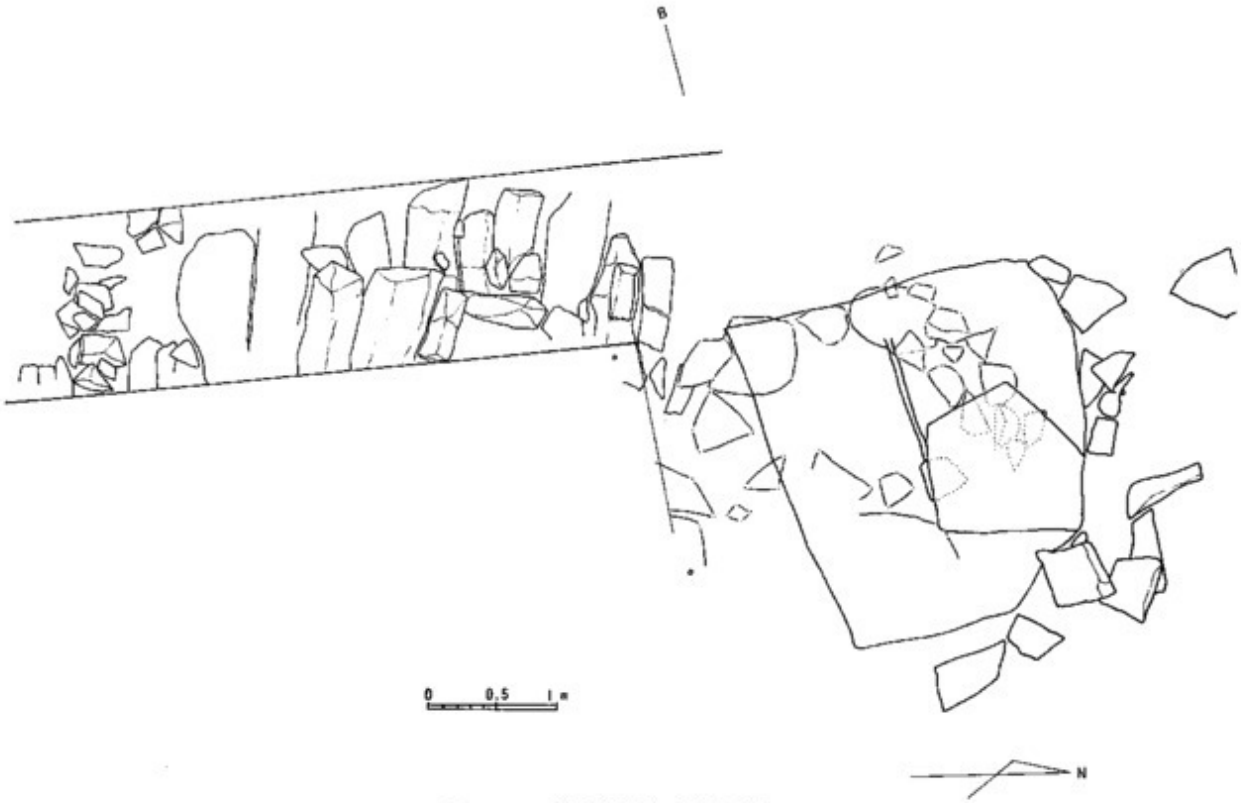
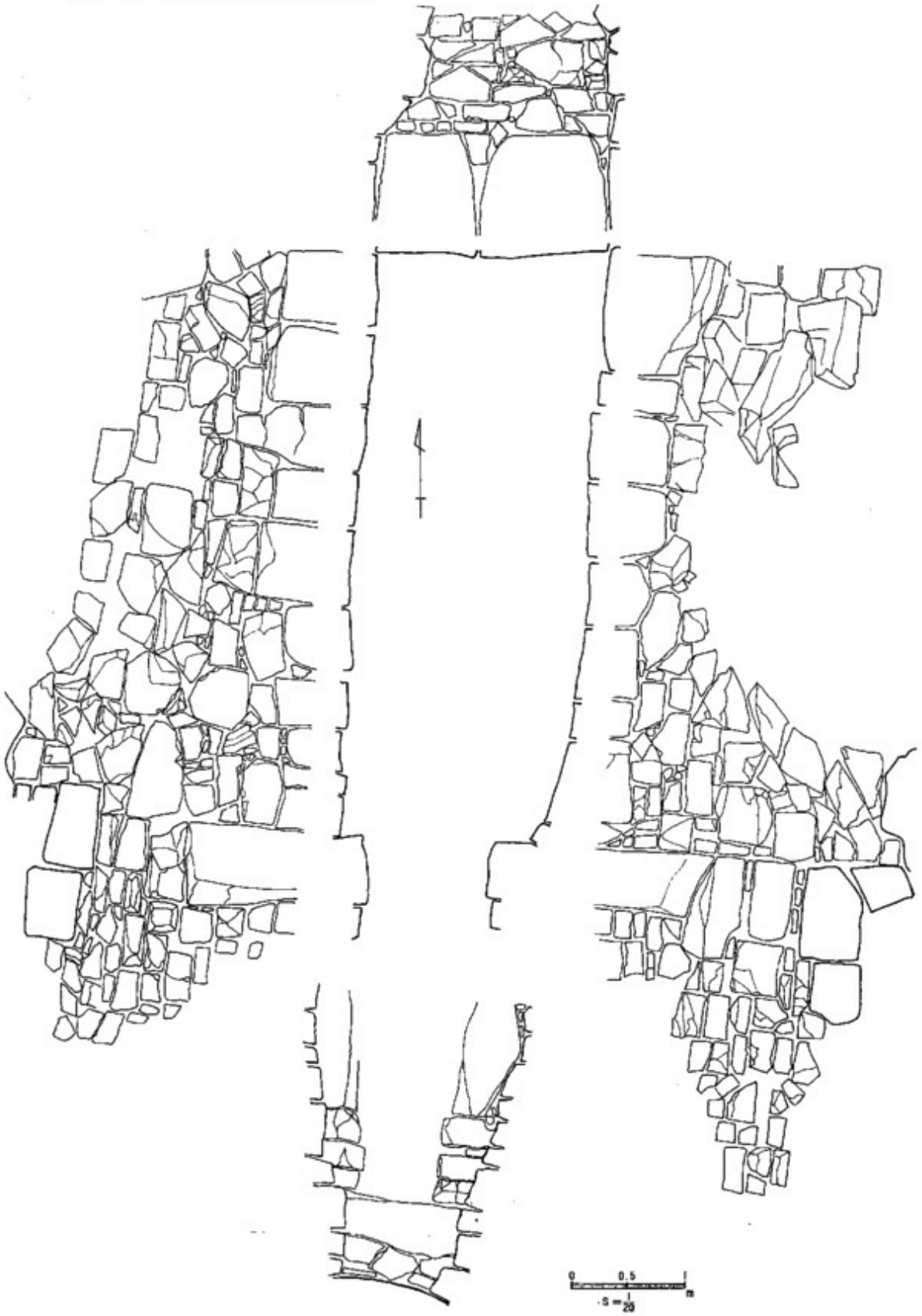


図16—1　墳丘断面と土壌セクション

0　多量の有機物を包む腐蝕土
I　黄褐色土層ひ層の物理的な流入土層
2　灰褐色土層のシマ状をなす層で地山のカクラン層である
3　地山（黄褐色土層）で中に砂岩礫を含む

図16－2　松ヶ谷１号墳主体部実測図



3　出土遺物

出土遺物はすべて玄室内における遺物である。玄室内は流入土で充満しており更に20数年に亘り近接して植樹された柿の根の活動は，壁面の積築時の位置を激しく移動させており，調査中においても再三崩壊の危険にさらされた程である。狭長な石室には２個の天井石が落石しており内１個が中央部分より玄門方向を半ば閉塞する状態で落石していたために盗掘からまぬがれた。奥壁面には扁平な天井石が玄室に突きささるような格好で落下しているが，流入土からみて盗掘後に崩壊したものと判断した。すなわち落下した天井石の上層は和泉砂岩の風化土壌に対して，風化土の上部に堆積している。腐植土壌（耕作土）と，落下した天井石の下部には和泉砂岩の風化土と耕作土の混入を見た。奥壁周辺には玉石の布設がなく掌大の円礫が敷かれているのに対し，玄門から中央部には掌大の河原石の上に玉石が敷きつめられているなどの差異から，相当入念な盗掘があり，その後にも小規模の盗掘がなされた形跡がある。出土遺物は，土師式土器として，高坏形土器４，坩形土器２があり，須恵器では，坏19，無蓋高坏5，有蓋高坏10，壺６，坩11，甑１，提瓶２，器台３，鉄器は，鉾１，鉄鏃１，刀子２があり，装身具としては，丸玉３，切子玉１，銀環３を出土している。

①　土師式土器

⊙　高坏形土器　　図17—3（1，2）図版第23の1，2
図17—2（3，4）図版第22の3，4

	番号	口径	器高	脚高	裾径	色調
A	1	9.5	11.4	7.5	8.0	5—18—4
	2	10.0	10.5	6.5	7.5	5—16.5—4.5
B	3	14.0	11.0	6.2	9.2	5—16.5—4.5
	4	15.0	11.5	6.0	10.8	5—16.5—4.5

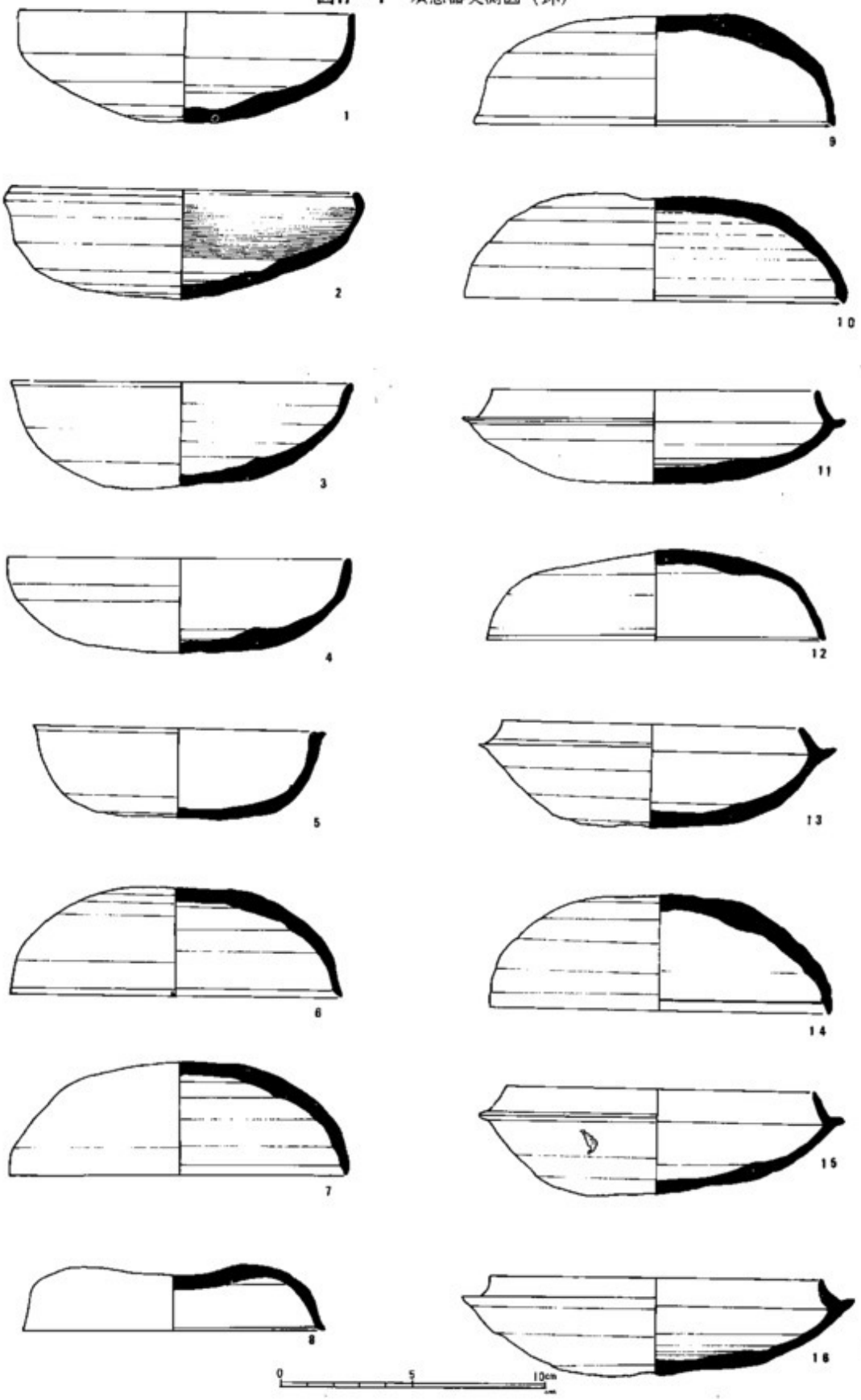
１～２は共に小形の高坏形土器で，素縁口辺の坏をのせたものである。２は１にくらべやや外反しているが共に口縁端は丸くおさめられたボール状の坏部である。裾部は肢柱より急に広がるがあまり広がらない。全面に丹彩をほどこしている。

３～４も同一パターンの土器であるが，４では口縁端でやや外反している。棒状脚部の外表には縦方向にヘラ削りの痕をとどめている。３の裾部の広がりは，ゆるやかに肉厚である。４はラッパ状の広がりとなっているが，共にこの棒状脚部を有することにより重量感がある。

⊙　坩形土器　　図17—5（5～6）図版第25の5，6

丸底の扁平な球形胴部で頸部のくびれは，ほとんど認められない直口の口縁部を有する坩形土器である。５では頸部外面に，６では頸部から口縁部にかけ内外面共に，細かい刷毛目整形による調整痕がみられる。５の口縁内面はよこなでがみられる。口縁部外面は縦方向のヘラ調整である。また頸部から胴部にかけて黒斑が一部に見られる。底部は１cmと肉厚であるが，共に焼成もよい。

図17—1　須恵器実測図（坏）



No.	口径	胴径	器高	器厚	色調
5	10.7	12	15.0	0.5~0.7	4—14—5
6	8.4	11.5	10.0	0.5~0.6	5—16.5—4.5

出土状況は，高坏形土器のAおよびBもまた坩形土器もそれぞれ一対として，左右の壁面から50～60cmの位置に置かれていた。

② 須恵器

⊙ 坏　図17—1，2（1—19）図版第21第22の17～19

本主体部出土の坏は，身7個体，蓋12個体であった。これらの出土の内10と11，12と13，14と15はセットとなって出土をみた。その他の坏は，2ないし3個体を重ね積みをした状態で出土をみた。

No.	口径	器高	頂底	色調	受部からの高さ cm	位置
1	12.7	4.0	丸底	0—14—C 一部0—16—0		W
2	13.0	4	丸	内0—15—0 外0—17—0		E
3	12.9	4	丸	0—18—0		E
4	13.0	3.6	扁平	0—16—0		E
5	11.0	3.3	扁平	内0—17—0 外5—18—4		W
6	12.5	3.5	丸	0—14—0		E
7	12.7	4.3	丸	0—16—0		W
8	11.3	2.0	扁平			W
9	13.4	4.0	丸	内0—14—0 外0—16—0		E
10	14.3	4.0	丸	0—16—0		E
11	12.0	3.5	丸	0—17—0	1.0	E
12	12.7	3.4	丸	内0—15—0 外0—16—0		E
13	11.2	3.7	扁平	0—14—0	0.8	E
14	12.8	4.3	丸	0—16—0		W
15	11.5	4.0	丸	0—16—0	1.0	W
16	12.3	3.5	丸	0—16—0	0.7	W
17	11.4	3.8	丸	0—14—0	0.8	W
18	11.5	4.0	丸	内0—14—0 外0—17—0	1.0	W
19	11.2	3.9	扁平	0—15—0 胎土露出3—15—5	1.0	W

イ）　坏蓋１類　　図17—１（１—５）図版第21

５以外は口径13cm内外で，器高４cm内外の土器で青灰色を呈する。胎土は比較的良く精選され砂粒の含有は少ない。焼成も良好である。天井部は丁寧なヘラ削りである。口縁部は直立ぎみに開き，端部は丸くおさめられているが，２のみは内湾している。天井部以外は横ナデ調整の仕上である。２のみ刷毛目状のナデ仕上げである。１—４の器壁は一定しないが，５の器壁はやや一定し，全面ナデ調整となっている。口縁端部は外反し扁平な面に凹線をもっている。

ロ）　坏蓋２類　　図17—１，２（６—10，12，14）図版第21

天井部と口縁部を分けるにぶい稜線を共有している。口縁端部は内傾して稜を持つが，８のみは外反して稜を有している。天頂部は８の扁平に対して丸味をもったものであるが７はややとがった感じがする。稜から天井部にかけては，丁寧なヘラ削りによる仕上で，ロクロ跡を明瞭に印している。器壁は共に一定しない。焼成は良好で青灰色を呈する。

ハ）　坏　身

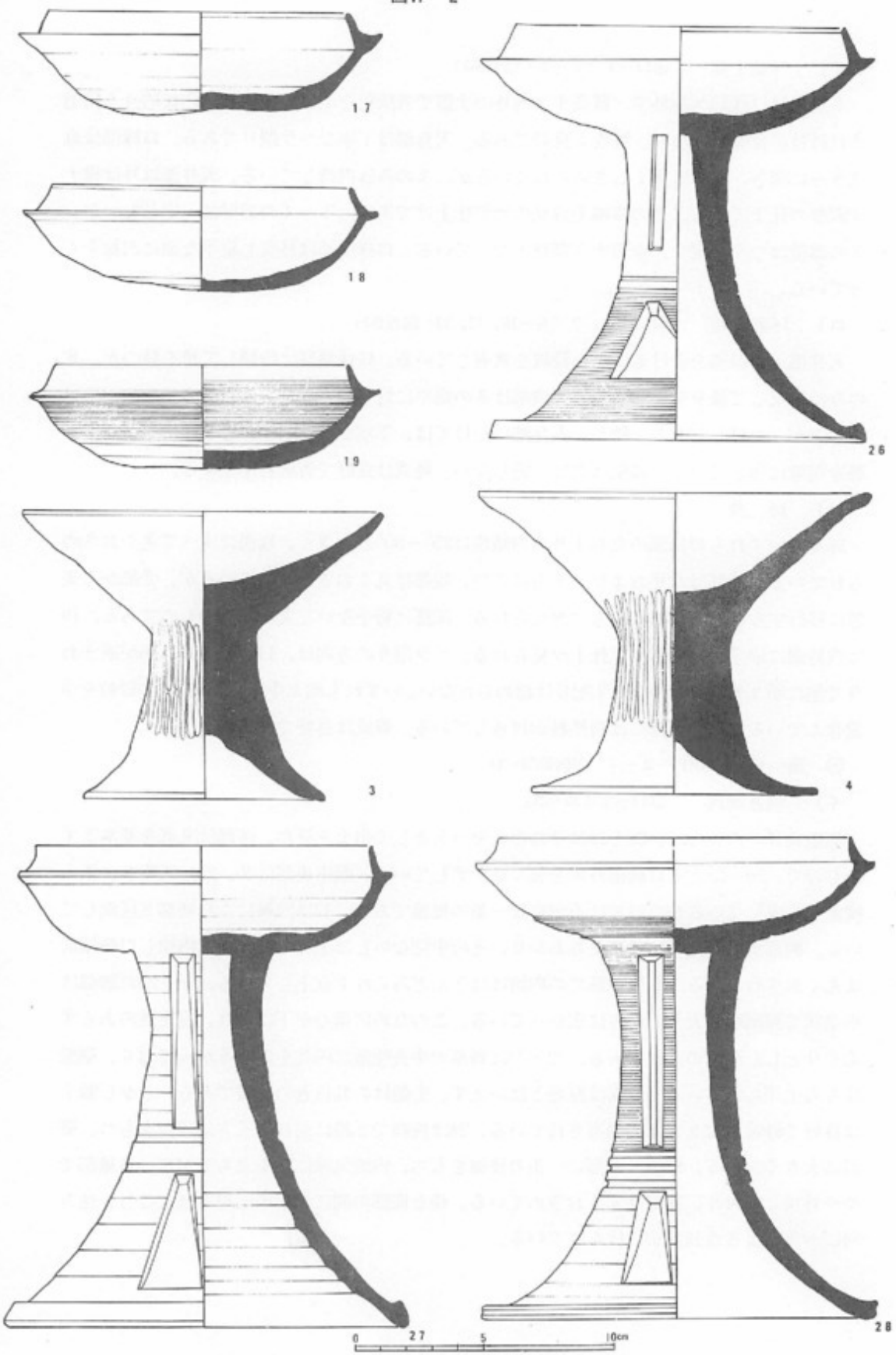
坏身はいずれも口縁部のたち上りの内傾度は25°～30°と大きく，端面はすべて丸くおさめられている。受部は水平および外上方にのび，端部は丸くおさめられているが，受部から底部に移行する線はくびれないものが見られる。底部は扁平ないし丸味をもつものである。19は内外面に刷毛目によるナデ仕上が見られる。ヘラ削りの方向は，11，13，15，16が逆まわりで他は順まわりを示す。ヘラ記号は認められない。いずれも胎土中に0.2㎜前後の砂粒を少量含んでいる。16の受部には自然釉が付着している。焼成は良好である。

⊙　高　坏　　図17—２～４　図版第22～24

イ）　無蓋高坏　　図17—２（20～24）

無蓋高坏の内20と21，22と23はそれぞれセットとして出土を見た。坏部は丸底を基本とするもので，20—23とも口縁部外側を強く横ナデしている。胴中央部に20，23は明瞭な一条の稜線を形成しているが，21では不明瞭な一条の稜線であり，22は凹線により底部と区画している。胴部が内湾気味に緩く立ちあがり，その中位ないしは上部でわずかに内傾し口縁端部は丸くおさめている。23は胴部での内湾はほとんどみられず直上している。20～23の脚部は中空状で脚裾部は大きく外方に広がっている。このために重心が下になり，安定性のあるずんぐりとした形態の高坏である。22と23は脚部の中央位置に円孔を３個うがっており，裾部はもち上げられている。焼成は良好とはいえず，生焼けの乳白色の土器である。しかし胎土は良好で砂粒を含まずよく精選されている。24は長脚で２段に別れ，三方に透しをもつ，裾部は大きく広がる，坏部は胴部に一条の稜線をもち，内湾気味に緩く立ちあがり，口縁部でやや外反しており，端部は丸くおさめている。稜と底部の間に一条の凹線をほどこし，逆方向にヘラによる点列文がつけられている。

図17—2



	No.	口径	坏高	脚高	裾径	器高	口縁部色調	透　し	備　考
無蓋高坏	20	13.0	4.1	5.5	11	9.6	0—16—0	なし	
	21	13.3	4.3	5.7	11.6	10.0	0—16—0	なし	
	22	12.7	3.3	4.8	9.2	8.1	0—15—0	3方に円孔	
	23	13.3	3.2	4.5	10.0	7.7	0—16—0	3方に円孔	
	24	10.5	3.8	19	10.8	15.6	0—15—0	2段3方	
有蓋高坏	25	13.1	4.3	14.1	15.9	18 5	0—16—0	2段3方	
	26	15.5	4.2	11.5	14.4	15.7	0—16—0	2段3方	下段三仲透し
	27	13.0	4.1	14.4	12.5	18.5	(ハ)3—10—2 0—16—0	〃	下段台形
	28	13.4	4.4	14.1	15.0	18.5	(ロ)0—13—0 2—16—2	〃	下段台形透し
	29	13.0	3.5	13.9	12.3	17.4	ロ 0—15—0 0—13—0	〃	長方形
	30	12.0	4.5	12.0	14.6	16.5	ロ 5—13—25 5—13—25	〃	下段三角
	31	12.3	4.5	13.9	14.0	18.4	ロ 0—14—0 0—10—0	〃	長方形
	32	11.0	4.2	10.6	13.1	14.8	ロ 0—16—0 0—13—0	〃	
	33	12.6	5.3	9.8	14.8	15.1	2—18—1 0—16—0	なし	
	34	14.7	5	13.5	14	18.5	6—17—2 0—15—2	(3—16—2)	ヘラ記号あり

ロ)　有蓋高坏　　図17—3，4（25～34）図版第22第24

坏部の基本形は，扁平と丸底を基本としたものである。いずれも口縁部のたち上りの内傾度は，33をのぞき大きく，逆稜線を有するものもあるが，端面はすべて丸くおさめられている。受部から底部に移行する線は，28にくびれを見る以外は，くびれを見ない。

脚部は中空状で脚裾部は大きく外方にラッパ状に広がり，脚端部において段を有するもの28，篦調整し稜となすもの32，端部を上方に持ち上げ丸くおさめられているものに27，28，30。脚端部は直立するもの25，29，31，32と変化がみられる。

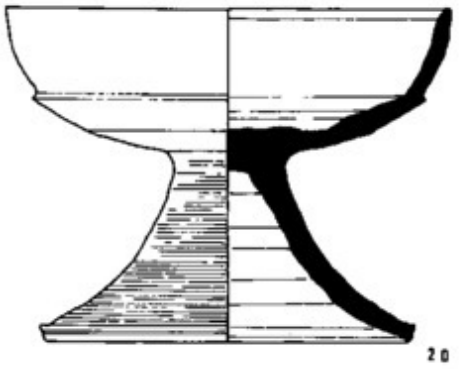
またいずれの脚部も2本の沈線で2段に大きく区画されているが，器高のバランスから見て，器高の中心より上に区画されているもの25，29，31。やや中央部付近にあるもの32。中央部より下位にあるもの34，26，27，28，30，33。さらに脚部が柱状をなすもの28，34である。内面には形成時のしぼり目痕を良くのこすものに25，27，29，31，33と外面にしぼり目痕を有するものに25，27，28がある。脚裾部を刷毛仕上げとするものに26，32，33がある。その他については別表参照。

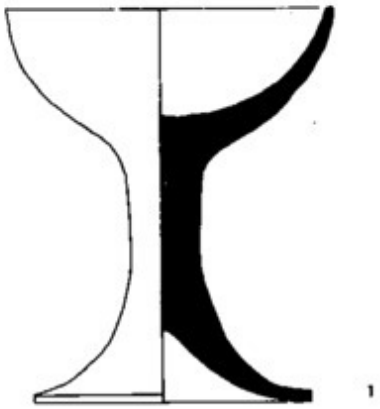
⊙　**壺形土器**　　図版第25，26

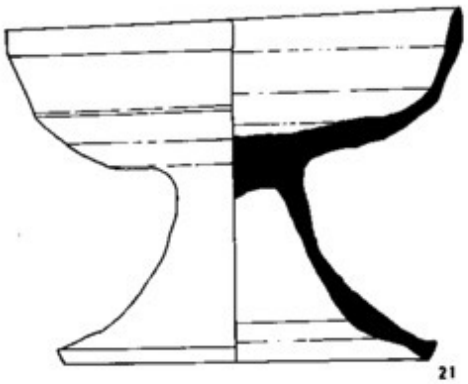
イ)　短頸壺　　図17—5，6（35～44，48，49）

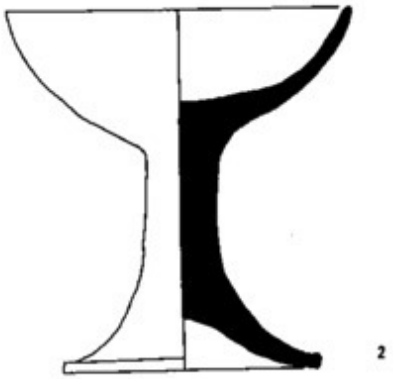
短頸壺は合計12個体の出土をした。12個体の内，頸部から口縁部への立ち上りが外反せず直口となるものと，くの字形に外反するものと2形式に分類できる。共有する形態は底部は

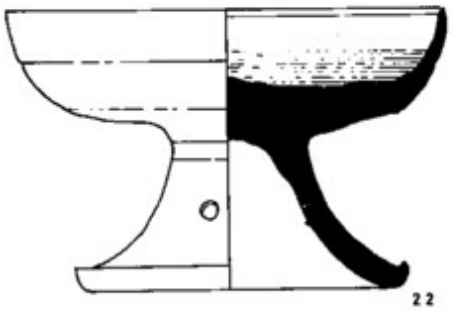
図17－3

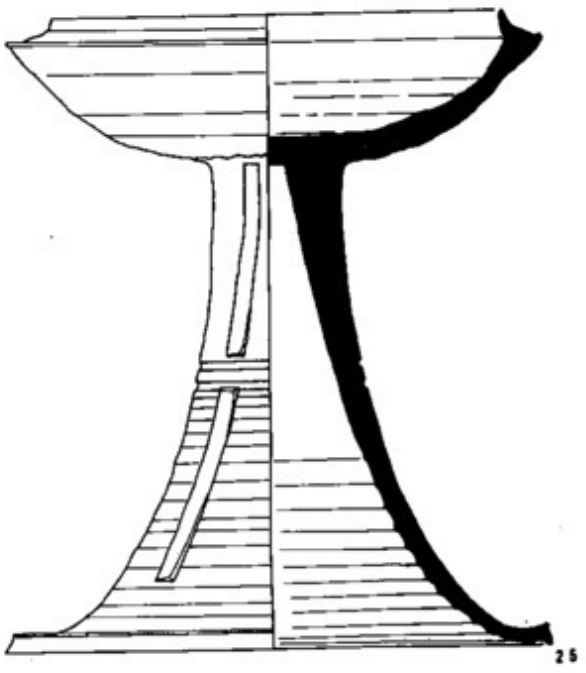












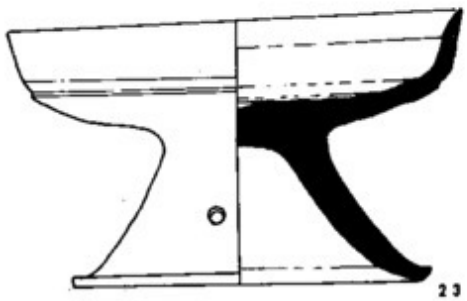


図17—4

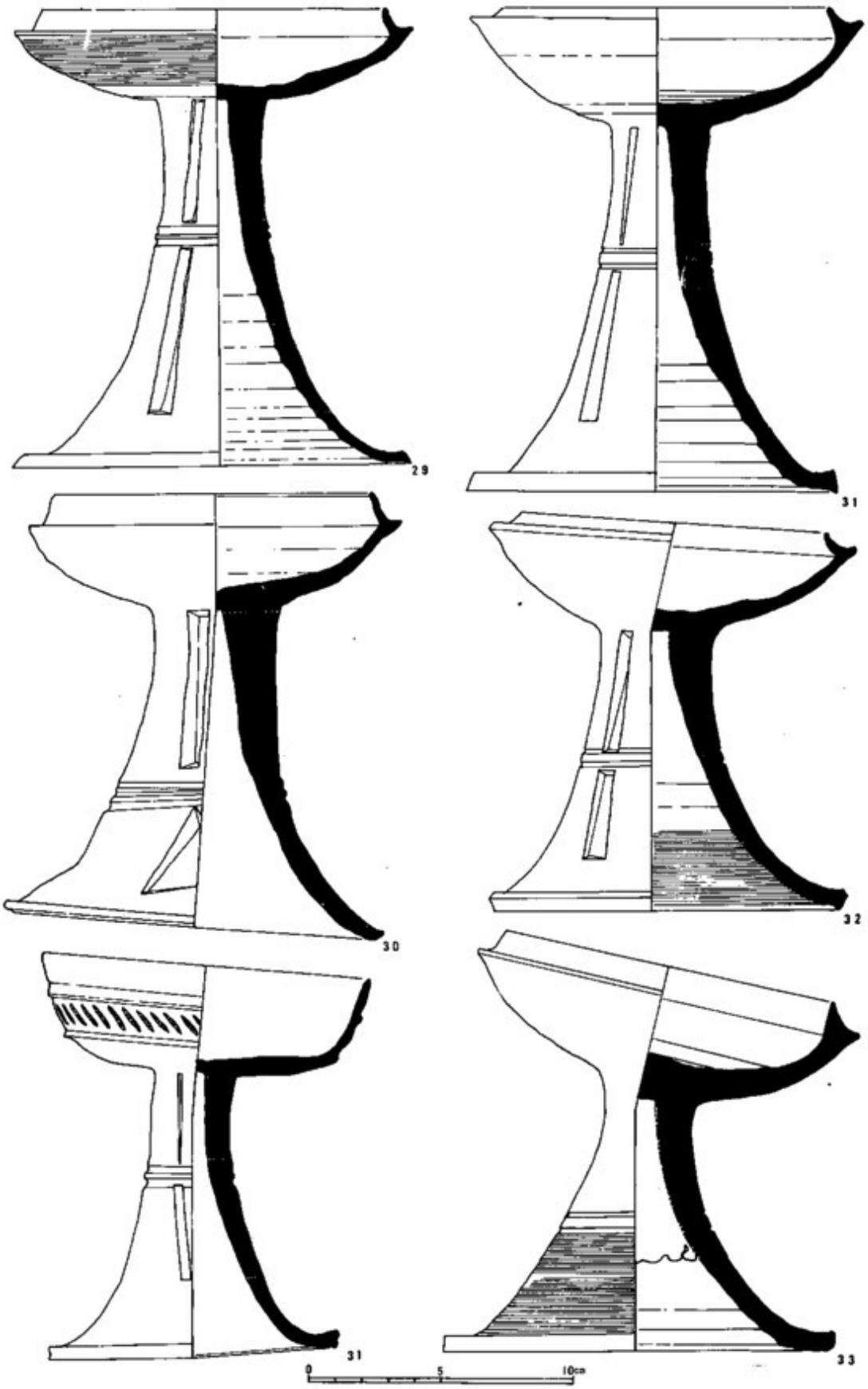


図17—5

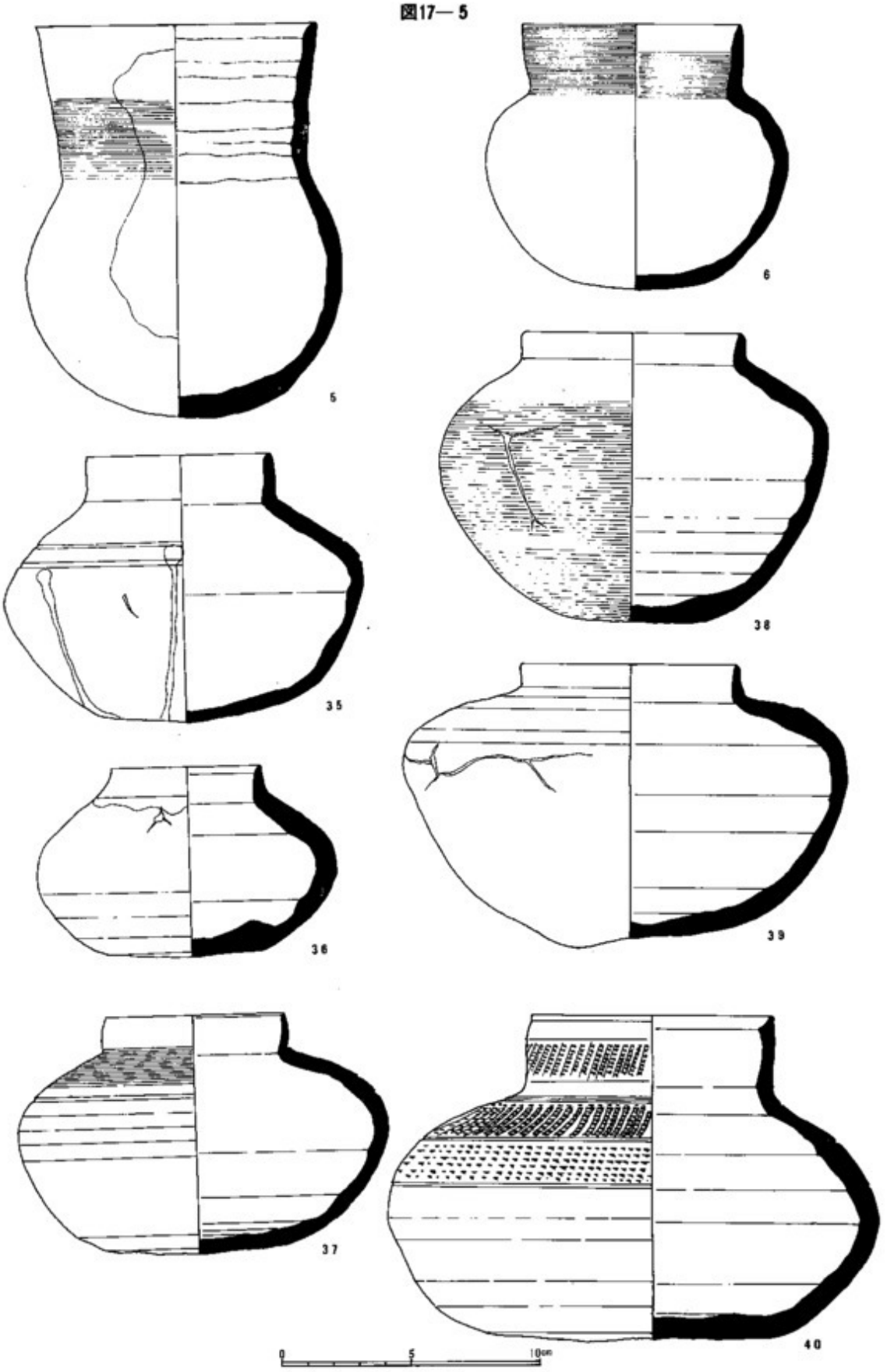
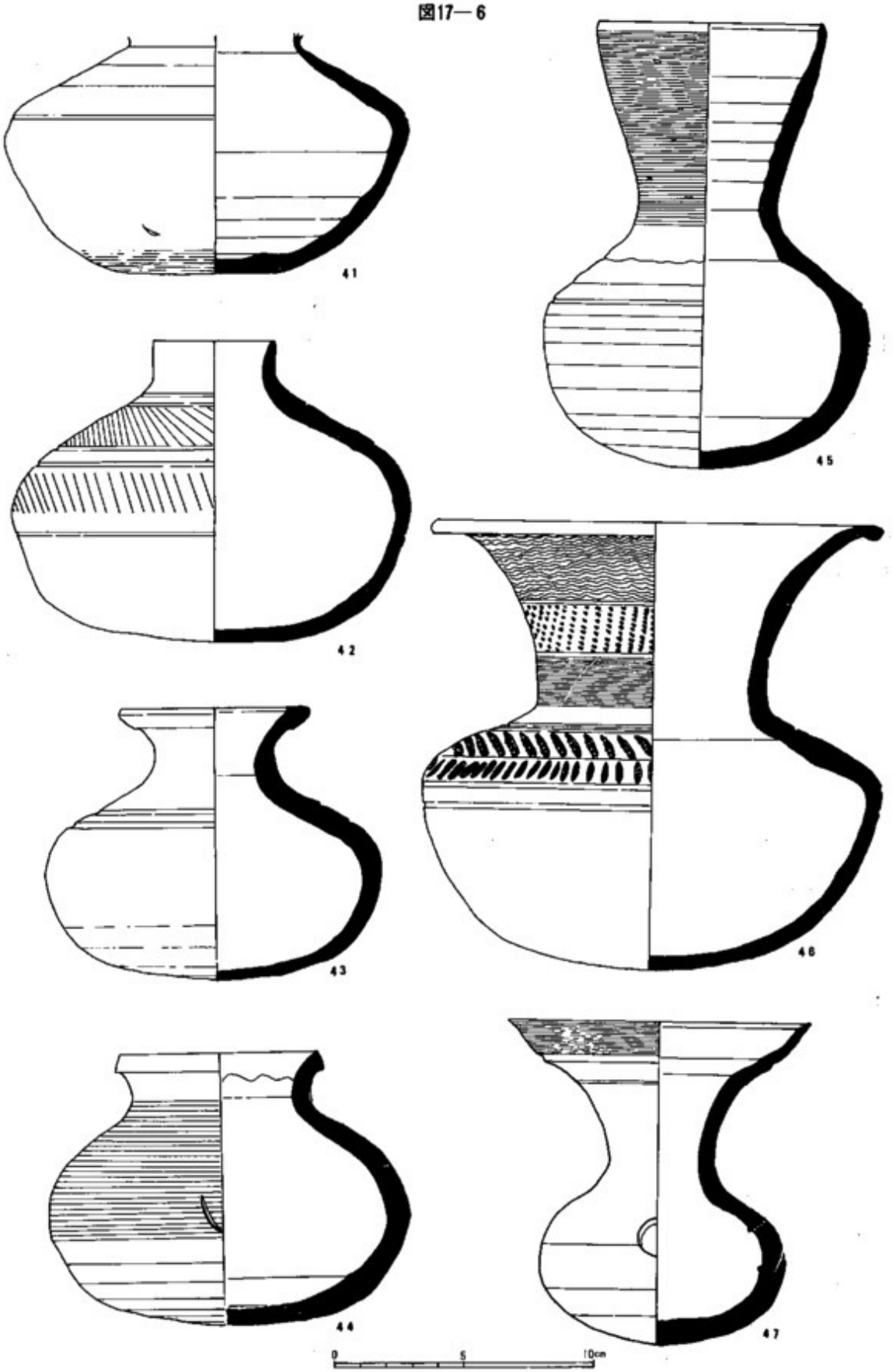


図17—6



丸底と見るより扁平な底部となっている。また底部の調整は38と41の外はヘラ仕上となっている，体部の内背の部分に特にその特長が見られ二条の沈線を35，37，40，41，42，43，46，49では施している。肩部分のカキ目痕を44，48，37に，49では箱目による点列文を40では頸部にも施し，櫛目による点列は3条帯となっている。42はヘラによる施文が施されている。この土器は器台55と共に出土したものである。施文帯に自然釉がかかっている。

	No.	口径	胴径	器高	器器厚	胎　土	色調焼成	備　　考
短頸壺	35	7.1	13.9	10.3	0.6	普通	0—15—0 0—17—0	自然釉
	36	5.8	11.6	7.7	0.8	〃	23—16—1 17—17—1	
	37	6.8	14.3	9.2	0.6	〃	16—14—2 0—17—0	器壁やや一定
	38	8.5	14.9	11.0	0.6	〃	0—15—0	焼成時のヒビ
	39	8.3	17.0	10.5	0.4～0.8	〃	0—14—0	〃
	40	9.3	18.9	12.5	0.4～1.0	〃	3—18—3 0—17—0	
	41	不明	15.5	現在高 9.5	0.5	〃	生ヤケ 不　良	ヘラ記号 頸部器壁は薄い
	42	4.8	15.3	11.5	0.6	よい	5—16—2 0—16—0	器壁は一定している
	43	7.3	12.8	10.4	0.4～0.8	普通	良好 0—15—0	底部壁が薄い
	44	7.5	13.8	10.5	0.8	よい	良好 0—18—0	ヘラ記号あり
	48	6.1	12.6	10.6	0.3～0.8	普通	やや良好 6—16—2	底部壁は厚い 釉がかかっている
	49	不明	12.1	現在高 9.5	0.4～0.7	〃	良好 0—15—0	自然釉がみられる
直口壺	45	8.5	12.3	17.0	0.3～1.1	頸部に粗粒が目立つ	0—16—0 良好	
鼓	47	11.6	9.3	12.5	0.3～1.0	良好	0—13—0 良好	横ナデ順マワリ
提瓶	50	5.0	11.0	13.0	0.6	粒子多い	良好 0—12—0	器壁は一定
	51	4.7	9.7	12.3	0.5	〃	良好 0—12—0	器壁は一定せず
広口壺	46	17.2	17.5	17.0	0.5～0.9	普通	0—15—0 0—18—0	
	52	19.0	20.5	25.6	0.6～1.3	〃	良好 0—17—0	底部壁は厚い
	53	18.7	20.5	28.0	0.6～1.1	〃	良好	ヘラ記号あり
	54	20.9	20.9	27.6	0.5～1.0	よい	良好 0—12—0	内面ナデ

単位cm

ロ）　直口壺　　図17－6（45）図版第26―（45）

胴部から丸底の底部にかけては，ヘラ切り痕がみられ，頸部から口縁部の外表面はカキ目痕が認められる。内部はナデ仕上げとなっているが，頸部からの立ちあがりは外反しながら口縁部では内傾向し口唇部は稜をなしている。頸部の内表面にしぼり目痕が明瞭に残され，体部と頸部の接合面が明らかに確認できる。

ハ）　瓶　図17－6（47）図版第26―（47）

頸部は短く外方にのび，頸部と口縁部との境は凹帯によって明瞭に段をなしている。口縁は強く外反しつつ内傾向に内湾し，口縁端は稜もなしている。口縁部は横ナデとなっている。体部はボール状をなし，体部に不明瞭な稜が認められる。

ニ）　提　瓶　図17－7（50，51）図版27（50・51）

体部の背面に回転を利用したカキ目の耳された50と回転を利用したカキ目を二条のみ施した51とがある。いずれも体部の肩部には三日月状に隆起する耳をつけ，頸部の立ち上りは，口縁部で外反し，口縁端部は50ではやや反転し，51では丸くおさめられている。体部と頸部の接合面が明瞭に残されている。いずれの土器も形式的なものである。

ホ）　広口壺　図17－7，8（46，52，53，54）図版26・27・28

広口壺46は肩部２条の凹線と体部に２条の凹線によって区画し，間に櫛描き列点文をめぐらし，肩張りの大きい扁平な底部をしている。頸部からの立ち上りは強く外反し，口縁部端で反転している。頸部にはカキ目が施され，凹線で区画した後櫛描きによる列点文を，さらに凹線で区画し口縁部に櫛描波状文を施文している。内表面は横ナデ仕上げとなっている。

52の広口壺は，外内表面共にナデによる仕上げである。体部は球形で底部は欠損しているが，明瞭に台付であったことを確認できる。しかし主体部内ではその破片すら発見していない。体部中央には帯状に篦（へら）による三日月形の刻文が施されている。頸部から漏斗状に外反し口縁部で反転しているが，口縁端部は丸くおさめている。頸部及び口縁部に２条の凹線帯で区画し，頸部に櫛描き列点文を口縁部には櫛描きの波状文が施文されている。内外表面はナデによる仕上がりである。器壁は底部に厚くなっている。

53の広口壺は球形の体部に漏斗状の口縁部をもつ土器で，体部から底部にかけてカキ目調整があり，頸部には刷毛目が明瞭に残され，施文としての効果がある。頸部と口縁部との区画として２条の凹線がある。凹線上部に裂目状のヘラ先による施文がある。内面はナデ仕上げで器壁はやや均一であり，ヘラ記号がつけてある。

54の広口壺は肩張りのある丸広である。肩部は篦調整がほどこされている。体部から底部の外表面には叩き目がある。体部の内表面はナデによる仕上りである。頸部は外反し漏斗状で口縁部端は反転して丸くおさめている。頸部と口縁部の区画として，２条と１条の凹線帯があり，凹線間に鋸歯目状の櫛描きの列点文がある。口縁部には扁平な波状文が，横帯に２条施文されている。頸部の内面にはしぼり目があきらかに残されている。

図17－7

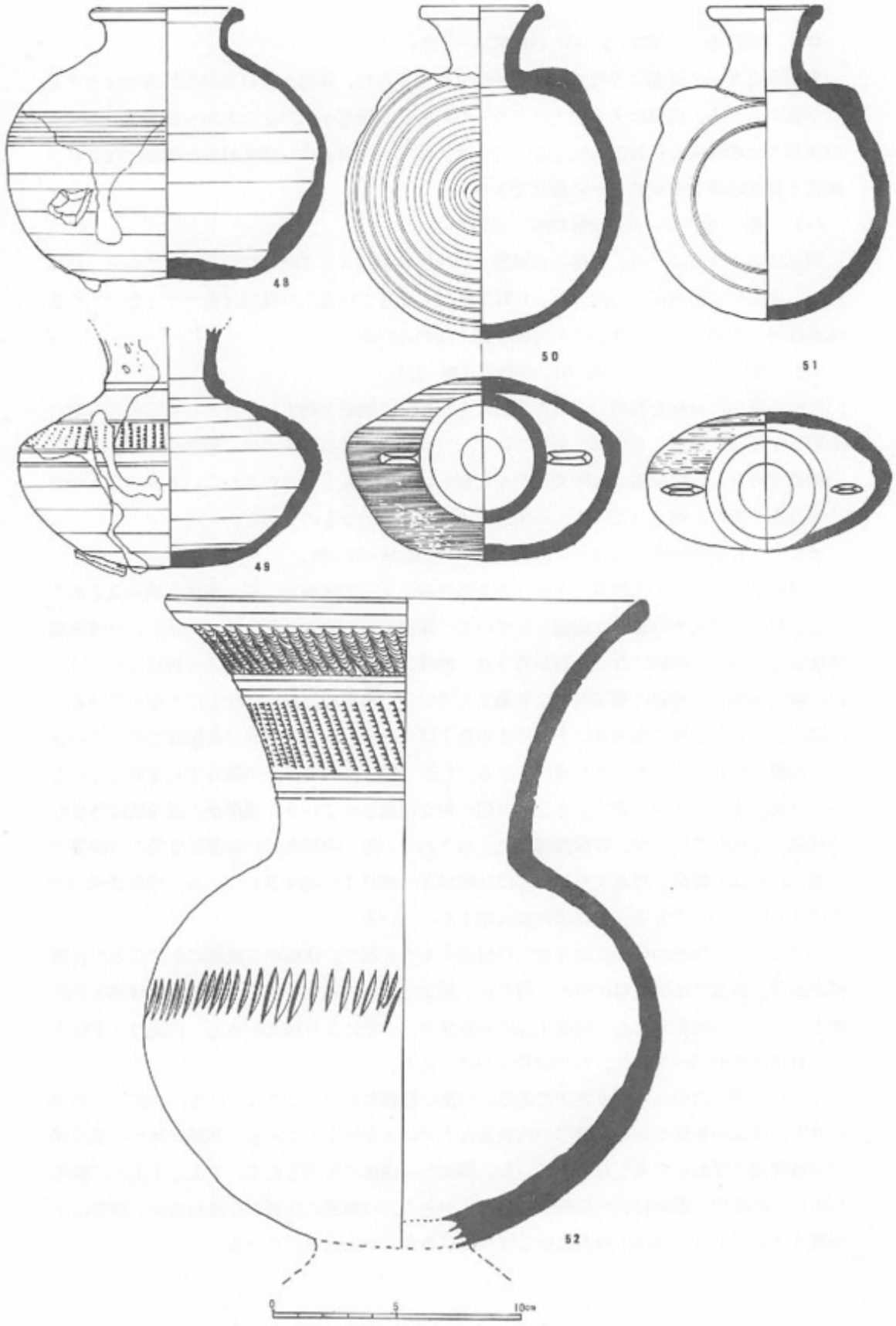


図17－8

⊙ 器　台　　図17—9～11　図版第27，28

器台は3個出土しているが，内55と56は玄門の両側に配置されており，55の上辺には，短頸壺42が重ねられていた。図版28の57は両側壁からの中央位置に，玄門からは1mの位置に置かれていた。

No.	坏の口径	坏の深さ	脚高	裾径	全体の器高	接合部重ね	脚部上端径	透し	焼成
55	29.5	12.4	32.2	29.5	42.9	2.2	14.2	方形 5段三方	0—15—0 裾部生ヤケ
56	29.8	13.0	32.4	27.8	43.2	1.9	13.6	方形3段三方 三角形1段三方	0—15—0 裾部生ヤケ 5—17.5—2
57	25.3	9.2	27.4	19.9	35+5	1.5	11.5	方形2段三方 台形1段三方	5—16—2 良好 0—15—0 自然釉付着

単位cm

55～56の脚部は共に漏斗状を示している。脚部にしぼり目跡を残す56に対して，55はナデ仕上げとなっている。55の脚部は2条凹線でもって6段に区画され，上部より5段には長方形の透しを（5段目は台形）さらに上部から4区画には，逆回りで櫛描きの列点文が施文されており，裾部の2区画には，ヘラによるカキ目文がほどこされている。6段目の区画には2段に施文されている。56の脚部は55同様に脚部外表面を丁寧なナデ仕上の後に，上端部より4・3・2・2の凹線でもって5段に区画を行ない，上部3段に長方形の透しを，4段目には三角形の透しをそれぞれ3方にうがっている。上端部の区画には，やや垂直な櫛描き列点文を，2段目の区画はヘラによるカキ目文，3段目は胴部3分の2程度に2段のカキ目文と区画の下端部に1周する鋸歯目状の刺突文が，4と5段目の区画には，施文具は櫛と推察できるが，30度内外の捜入角で垂直に切り上げた施文で，櫛目は16個（最大数）で施文断面はL字になる。

坏部はいずれも丸底である。底部との区画は2条の凹線でなされている。55の口縁は底部より内湾気味に立ち上がり，口縁部で外反したのち反転している。口縁端部は丸くおさめている。56は内湾気味に立ち上がり，口縁部は反転しており，口縁唇部は外向にもちあげられにぶい稜をなしている。口縁部は両器台共に内外表面はていねいな横ナデがほどこされており，凹線の施文後に櫛描きの波状文が施文されている。底部には叩き目が内外表面に残るが，56の内表面の波文，渦文の一部にはヘラによるスリ消しが見られる。

57は装飾器台である。坏部には，有蓋の子持の坏が，57—1に示すように，口縁端部に6

個と中心に１個を焼成時には有していた痕跡があるが，端部の１個は破片さえ発見できなかった。７個の坏蓋は天井部頂部に扁平なつまみを有する口径9.2cm～9.8cm，器高は4.2cm～3.1cmを計測する。器壁は総体的に厚く，口縁部にしたがうほど薄く口縁部では0.2cm以内にあり稜をなす。仕上りは天井部はヘラ削り，口縁部は横ナデによる。坏身は扁平な平底を有するもので，底部よりやや内湾気味に外上方に立ち上り，受部には，凹地状を呈するものもあるが，水平なものが主体である。口縁部は内傾したのち外方に立ち上り，端部は丸くおさめられている。内外表面共にナデによる仕上がりで，自噴の自然釉が付着し光沢を有している。

７個子持坏の内６個は器台の坏部口縁端部に鞍状に脚部を取り付けられている。１個の中央部の坏は円錐状の中空の脚部を器台の坏部の底部に付着させている。脚部表面には，しぼり目が明瞭に残る。

器台の脚部は，２分の１程度は柱状をなしその後内湾しながら広がり，裾部は水平に広がり裾部端は丸くおさめられている。脚部には２条の凹線により５区画されるが内３～４段目の凹線のみ省略されている。区画の内上段より２段目までは長方形の透しがあり４段目にも台状の四角な透しを持つ。脚表面の内上部２分の１はカキ目仕上である。下部半分は刷毛目仕上げとなっている。脚部の裾部の外表面にカキ目を施し，内部には明瞭にしぼり目を残している。脚裾部は，内湾気味に広がり，脚裾端部は水平に広がりをみせ焼成時の亀裂がある。

坏部は丸底を基本とするもので，底部より内湾気味に外方に立ち上り，口縁端で水平に外方にひきのばし丸く端部をおさめている。内外表面の底部位置にたたき目を残しており，内表面は波文となっている。口縁部及び体部は２条の凹線を施し区画している。外表面は刷毛目文がみられ内部はナデ仕上りである。

器全体の焼成は良好である。持坏及び坏部，脚部にも自然釉がかかっている。胎土には若干の粗粒子を有するが良好である。

図17－9

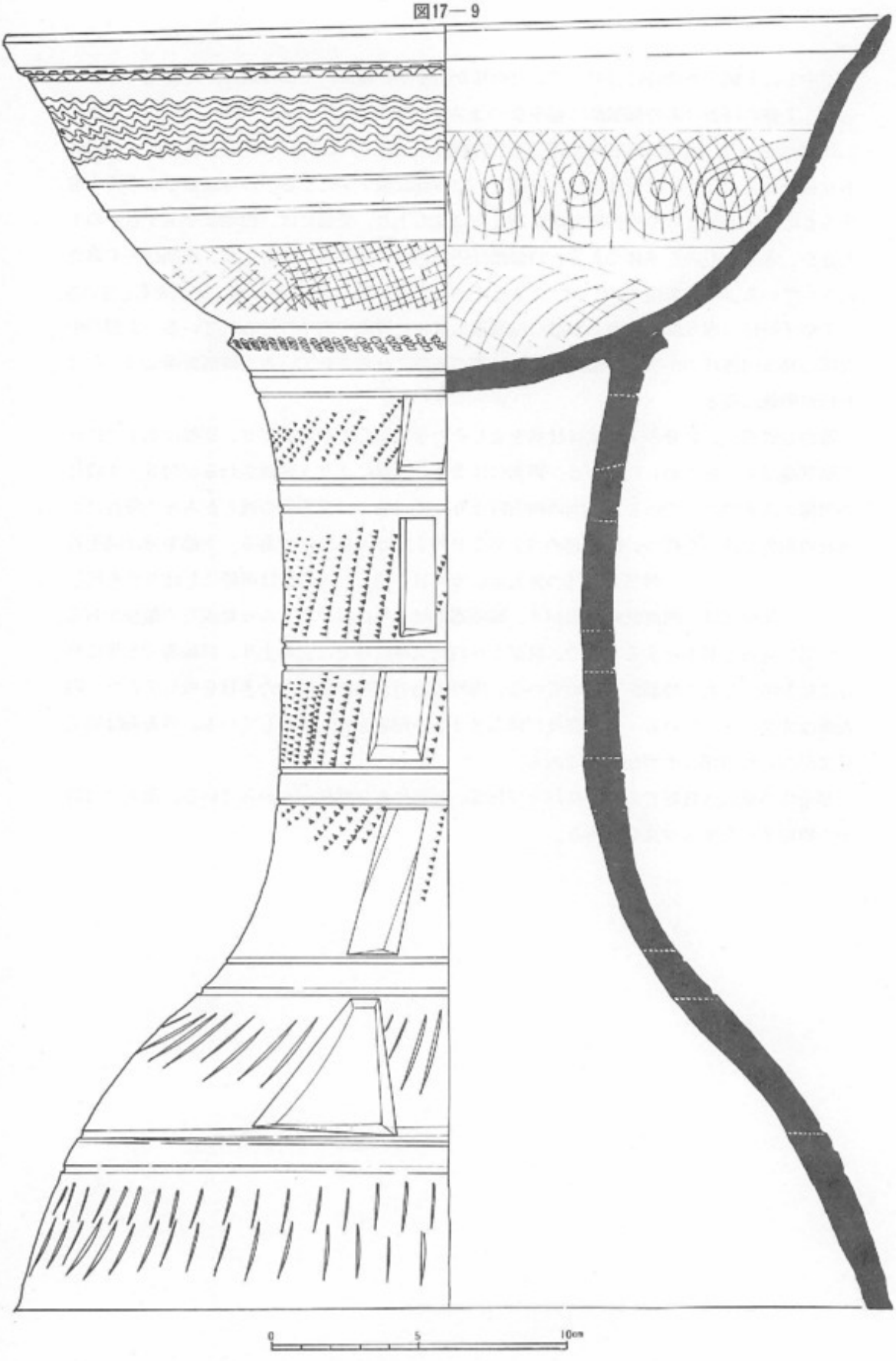


図17—10

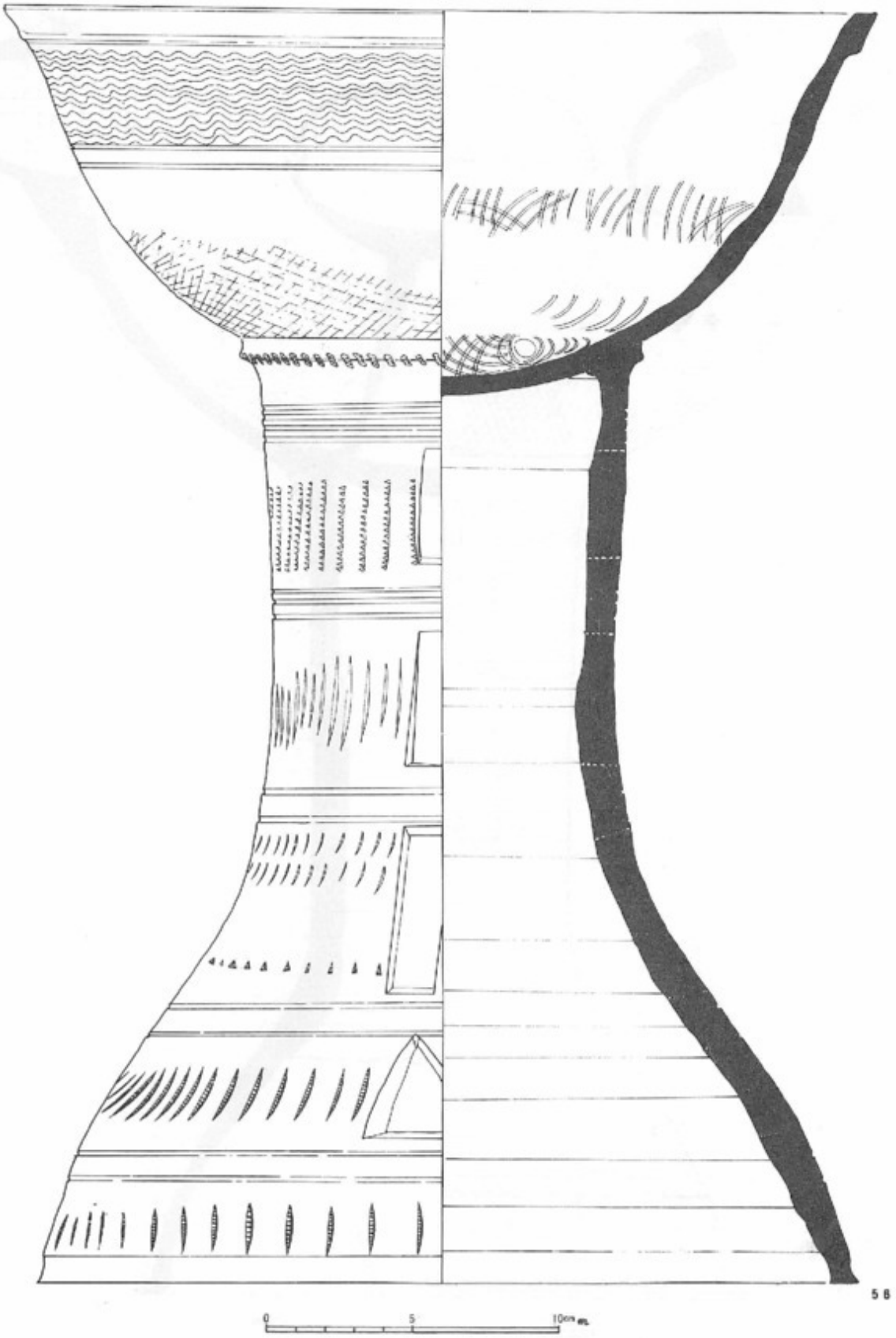
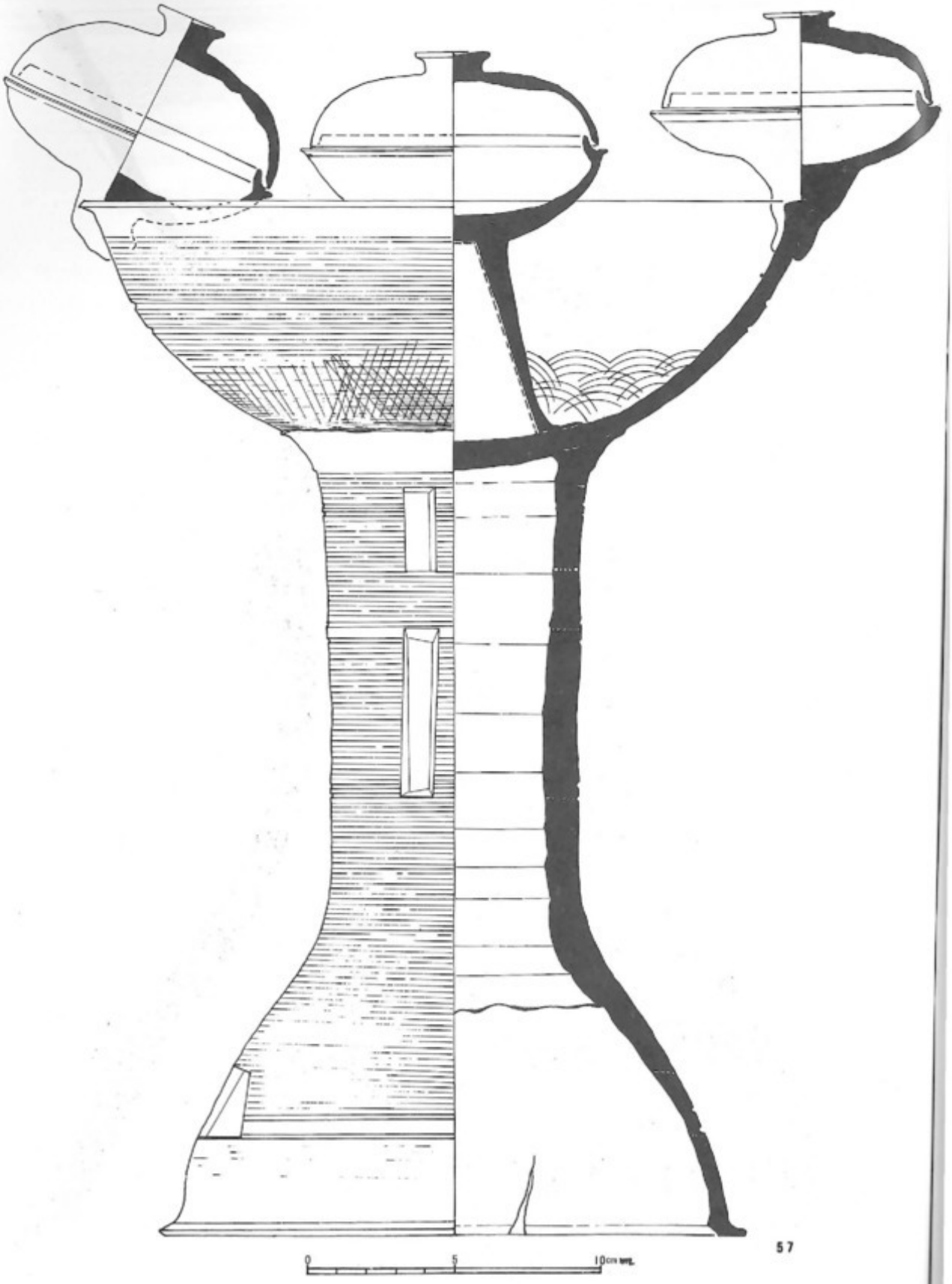
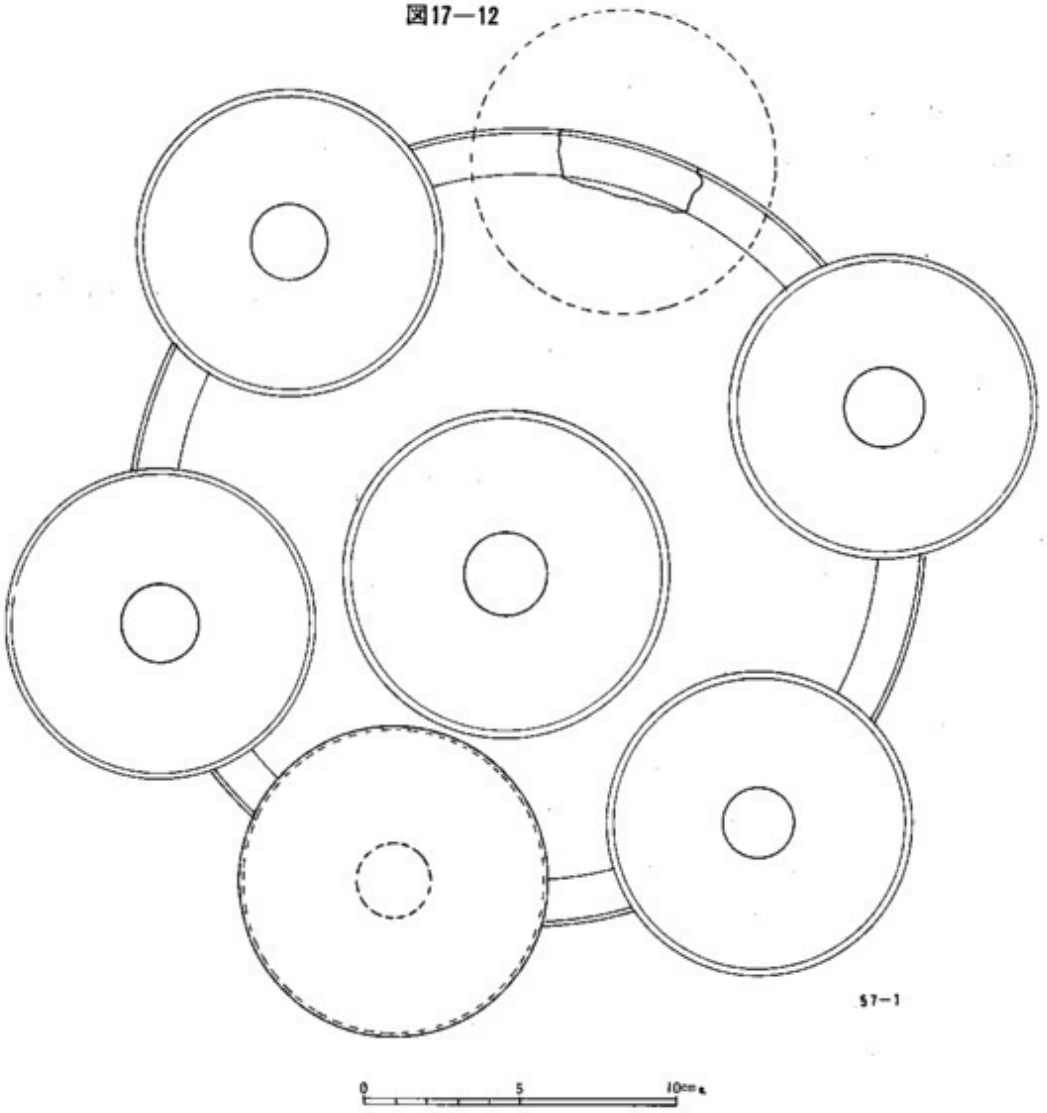


図17—11



57

図17—12



③ 鉄 器

鉄器の出土は少なく，僅かに刀子４個，鉄鏃１個，馬具轡１個である。出土位置は，刀子と鉄鏃は玄室の奥壁部で発見した。轡は，玄門の左袖部の隅にて発見した。これら鉄器の外に棺材に使用された釘は１本も発見することができなかった。雨水の直接流入にさらされた結果錆化による消滅と見られる。

１） 刀 子 図17—13(58～61) 図版第29の60，58

刀子は４口検出しているが，58は切先部を欠損しているがほぼ全容がうかがえる。全長15cmで身の長さ10.5m，身幅1.6cm，厚味0.6cmである。長期にわたる使用により刃部はかなり消耗しているが両関造りであろう。60は刃部を欠損しているが，厚味0.5cm身幅1.7cm，柄の長さ６cmで両関造りとみる。61は切先部を欠損しているが現在の長さ9.3cm，身の長さ４cm，身幅0.3cm，柄の長さ5.3cmである。59は柄の１部分であるが直径2.1cmあり把りの様子がしのばれる。柄には鹿角を利用している。60には研ぎ減りがみられる。

2） 鉄 鏃　図17—13(62) 図版第29の62

身幅3.7cm，全長10.1cmで厚味0.3cmである。断面からみて，平造りの方頭広根斧箭式である。ただ円孔があるかどうかは確かめていないが，無孔のものと思われる。

3） 轡　図17—13(63) 図版第29の63

銜（ハミ）は2本組み手で1個の全長8cmである。引手は全長17cm，鏡板は長径8.2cm，短径6.7cmであり，面繋（オモガイ）のための耳が付いている。引手の手綱側の先端部はL字状に曲げられている。

④ 装 身 具

1） 銀 環　図17—13(64～66) 図版第29の64

銀環は3個出土しているが，内2個64，65は，銅の地金に渡金をしたものであり，断面は円形である。銀環66は，断面は6面にカットされているものである。錆化もなく，地金そのものと判断している。

No.	直径	短径	断面
64	2.7cm	2.5cm	0.35cm
65	2.2	2.2	0.45
66	2.35	2.2	0.3

2） 切子玉　図17—13(67～69) 図版第29

3個共に石質は水晶である。穿穴は一方向からおこなっているが，68のみやや傾穴となっている。横面からの穿穴状況は漏斗状に見える。

No.	全長	胴部径	穿穴 短径	穿穴 大径	穿穴 小径	重量
67	1.8cm	1.35cm	0.85 0.8 cm	0.45cm	0.2cm	4.000mg
68	1.65cm	1.2	0.8	0.4	0.1	2.900
69	1.6	1.2	0.75	0.4	0.1	2.800

図17—13

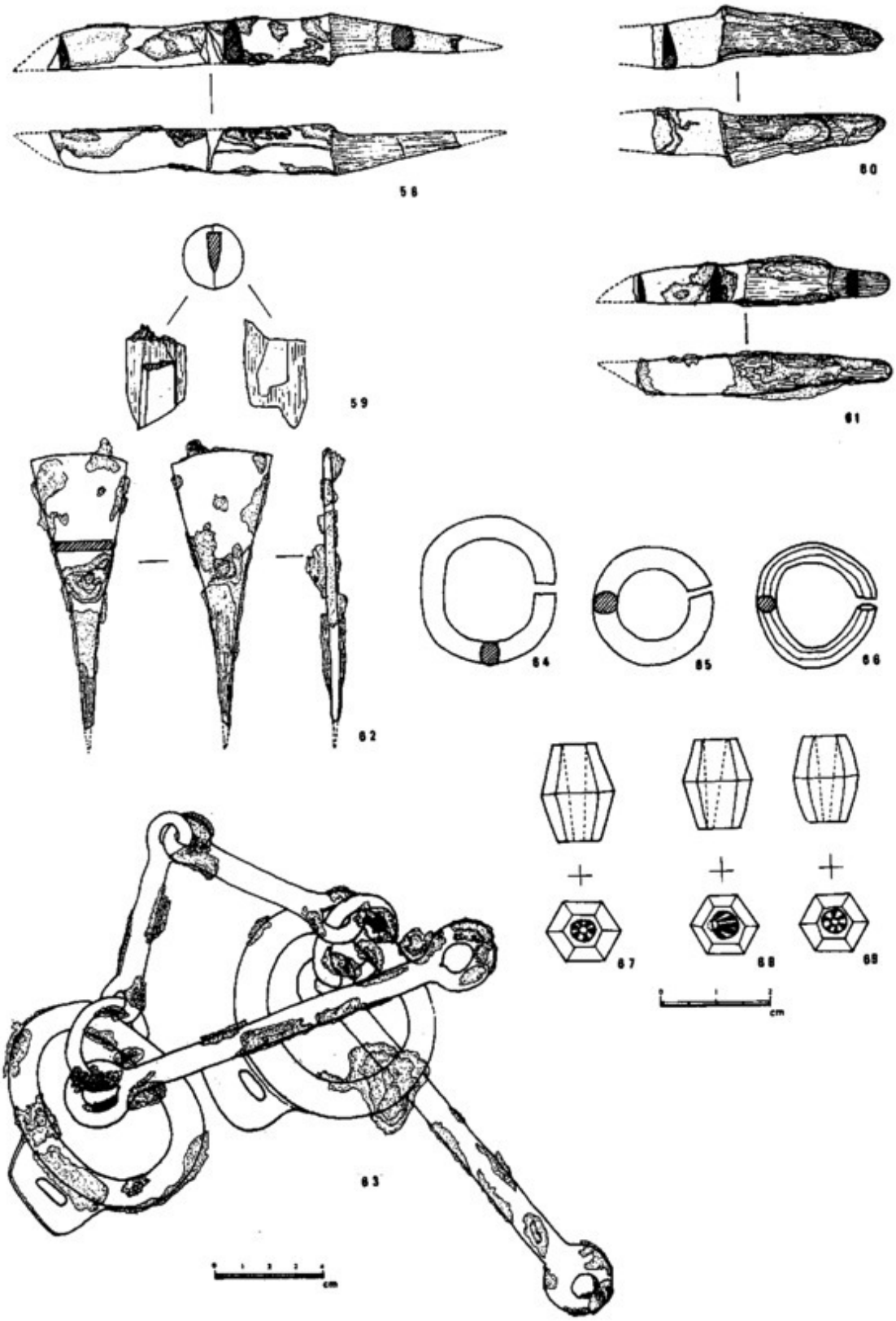
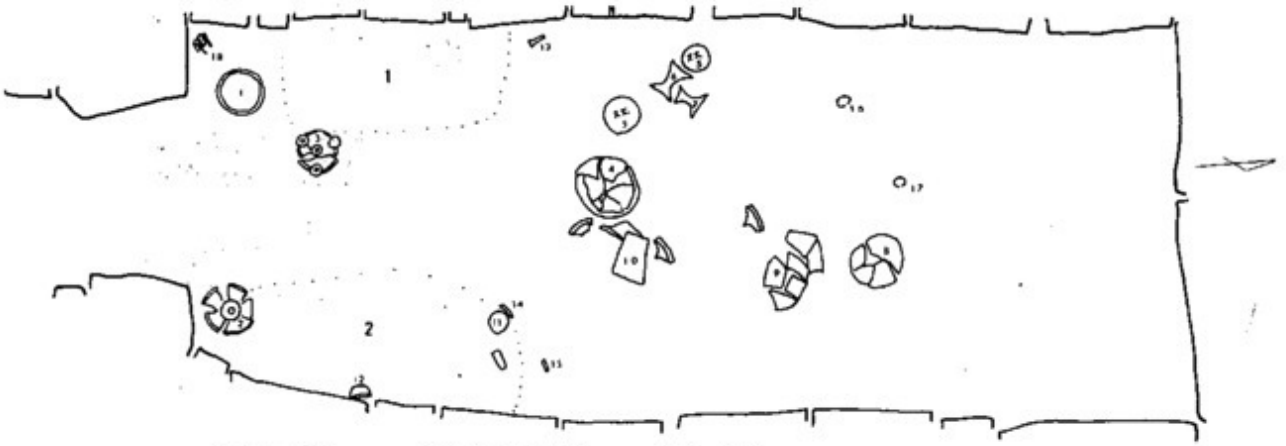


図17—14

松ケ谷1号墳遺物出土状況図



1．2．3．　器台　　8．9．10　土器片（壺）　　14．15．　刃子

4．5．　壺　　11．12．　坏　　16．17．　銀環

6．7．　土師高坏　　13．　鉄鏃　　18．　砥

1—2は壁面崩壊の危険のため実測不可能となる

V 結　　語

松カ谷古墳群は，10m内外の小円墳を中心とした古墳群であり，本古墳は同陵線では最先端に位置しており，同陵線の尾根には4基の円墳が確認されている。4号墳より分岐する北西に走る尾根に6基と麓に2基を数えるが，現存するものは10基である。2基は民家の宅地内にあり，現在は小祠を配置するのみである。これらの古墳はいずれも，横穴式の石室を主体とする古墳であり，いずれも，陵線をたくみに利用した古墳である。時期的には6世紀後半かもしくは7世紀初頭に位置されるべきでないかとみる。だが1号墳以外の古墳もすでに2，3，4号をのぞき開口しているもの，破壊されているもの等であるが，現在では出土遺物はすでに不明である。

今回の1号墳の発掘により，その全貌は知ることができないまでも，当地域の古墳を知る唯一の発掘調査であった。

主体部の構築は，地山掘り込みを基本とし半ば半地下式の構築である。封土は，掘り上げられた残土と，丘陵面の陵線をカットして墓域の構成をした残土をもって墳丘を構築するという盤築方法を取る点は，かいなご1号墳，2号墳と共通するものである。

羨道部は退化し，形式的になるが，僅かながら羨道を有し，両裾の玄門を具備することから，玄室部に対する閉塞工程を容易になさしめるとともに追葬の可能性を考慮したものである。主体部の構築に使用されている石質は，大友山の中腹一帯に露出する和泉砂岩を利用したものであり，中腹部の石材を活用すれば運搬には，自然落差を有する立地にあることから容易であったと考えられる。

出土遺物については，奥壁部は盗掘により不明であるが，玄門付近における遺物はよく保存されていた。ただ和泉砂岩の自然剝脱による器物の破壊と自然剝脱が側壁の崩壊をよびおこしたことにより大半の遺物は破損した状態で出土をみたが，これらの遺物を通して次の事項を知ることができた。

1　副葬品の配置は或る一種の埋葬形式があり，それに従った意図的な配置ではなかろうか。

すなわち配置を略記すれば，玄門から奥壁に向って左右対称位置に配置されたものと，左右対称位置の中央部分に配置されたものとがあった。左右対称位置に配置された順序は，玄門から，器台，大形の広口壺，提瓶，短頸壺（坩），高坏，坏，となり，中央部には子持蓋飾器台を配置し，その奥の少し中央部寄りに間かくをおいて土師の丹彩された高坏と坩が置かれていた。

轡は玄門の裾部と側壁の隅に置かれておりこれら器物の配置後に置かれたものと思われる。

2　副葬される器物には，すでにこの時期になれば儀葬用品（供献的器物）が準備されたのではないだろうか。

奥壁部で発見された身のまわり品に対して，玄門部に配置された器物は供物的なものである。器台は言うまでもないが，その他の器物も，提瓶においてはあまりにも形式化されており，その他壺，高坏，坏についても，いずれも歪が大きく，中には地面に置くことすら不安定なまでに歪んだものから，焼成時の亀裂により，水をいれることさえ不可能な坩があり，焼成時の誘着した器物を利用しており，また生焼の坏等々から，すでに葬儀用品としての位置付けが，日用器物と分離して調達されたと考えられる。

本古墳では特に鉄器の出土が少なく，鉄鏃を1個出土しているが，実用的なものではなく，供献的な観点から把握すべきものと見るべきでなかろうか。

総括して，副葬品は多量であるにもかかわらず，品質から見れば粗雑である。主体部の構築も基礎石以外は，粗雑な石積となっており，墳丘の盤築もなく全体的に形式化された普及形であるが，ただ果樹園地内の調査のために，トレンチ調査等細分にわたっての調査は不可能であり，発掘自体が，危険防止のためであったことなどから，最少限の調査範囲にとどまった。不十分な記録保存となったことを痛悔しながらも，崩壊寸前の玄室内での作業に献身的な努力をおしまなかったかたがたに対し厚く御礼申しあげます。

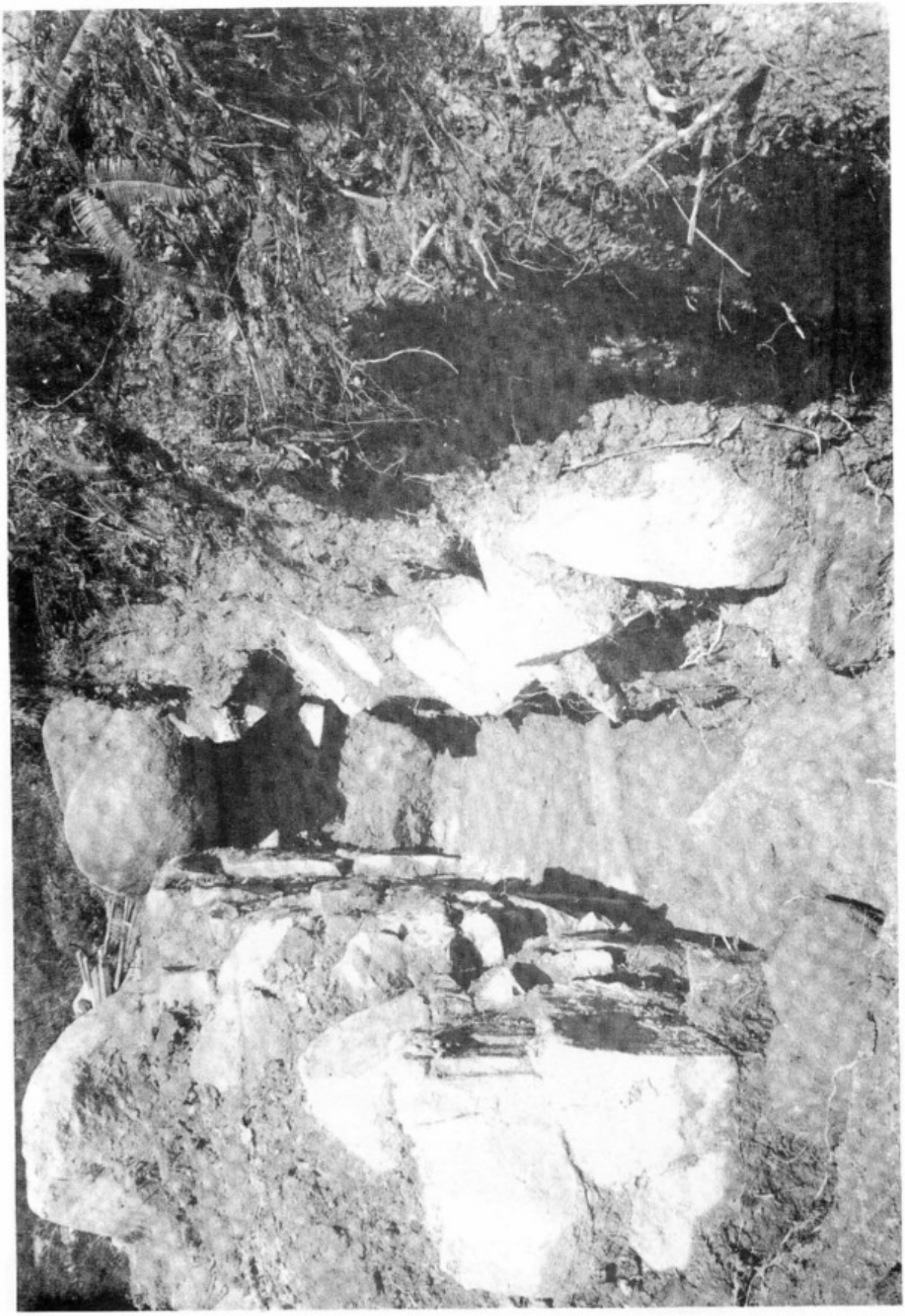
かいなご1号墳遠景

調査前の1号墳（天井石露出）

図 版　第 2

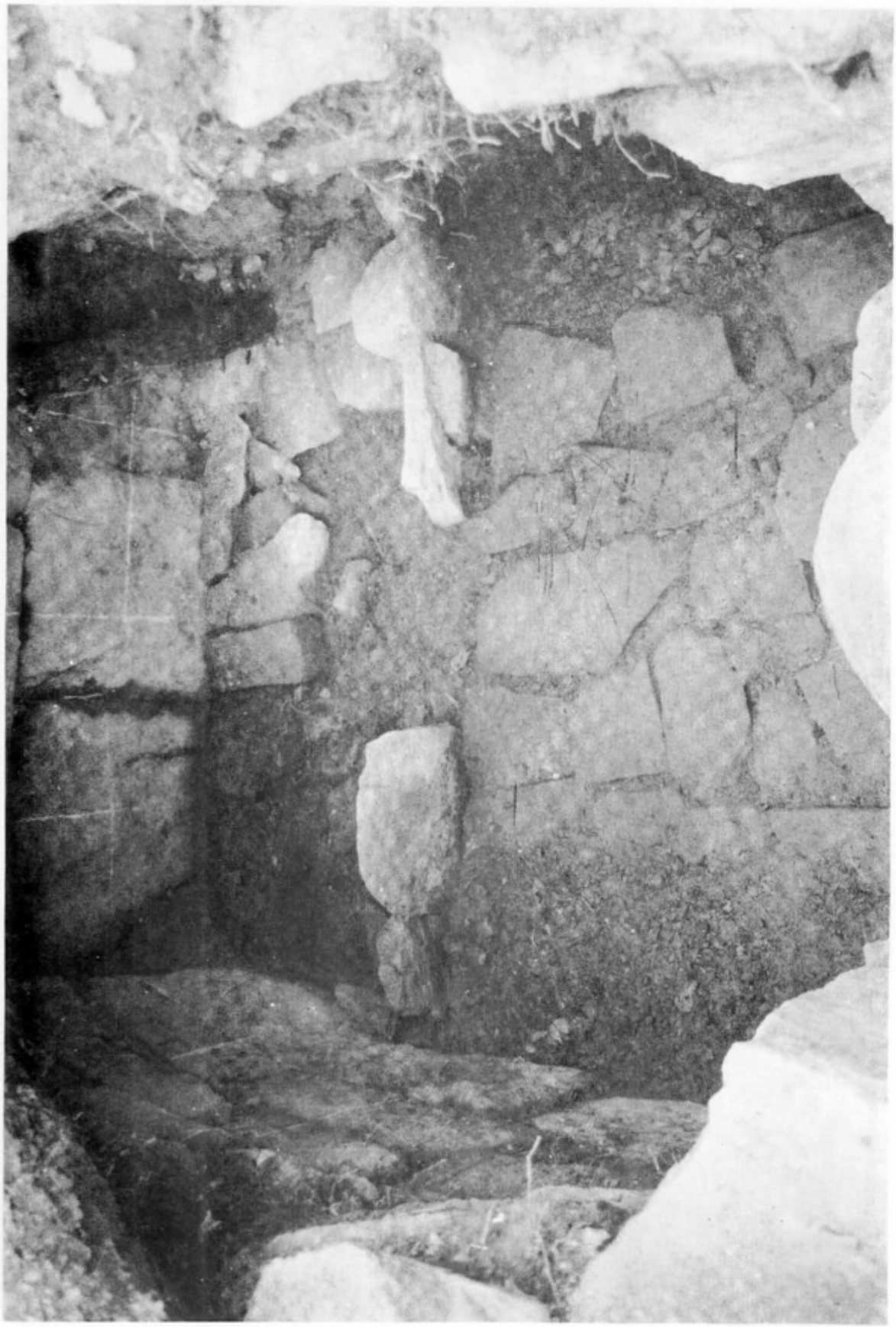
羨道部の天井石横架状況

羨道部の天井石除去状況



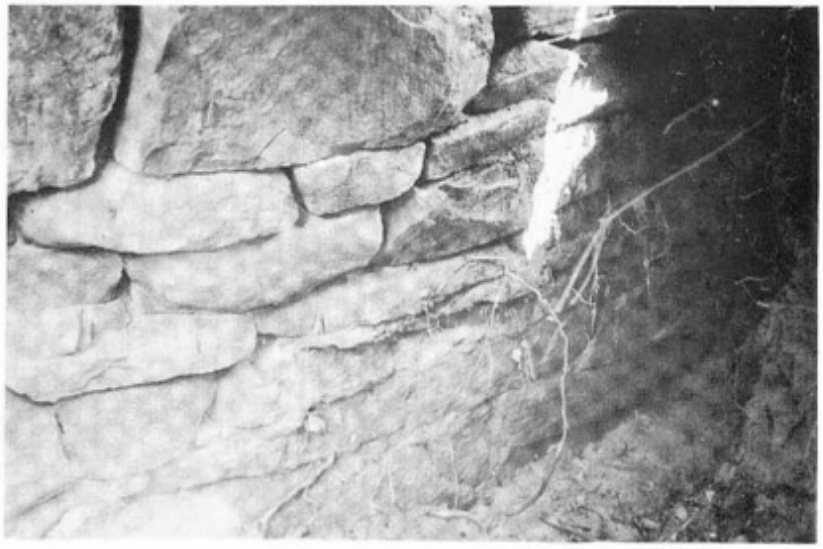
閉塞口より見た主体部の状況

図版　第4



玄室内の布石の状況

鏡の出土状況



壁面石積の状況

図 版　第6

かいなご2号墳遠景

2号墳の近景と立地

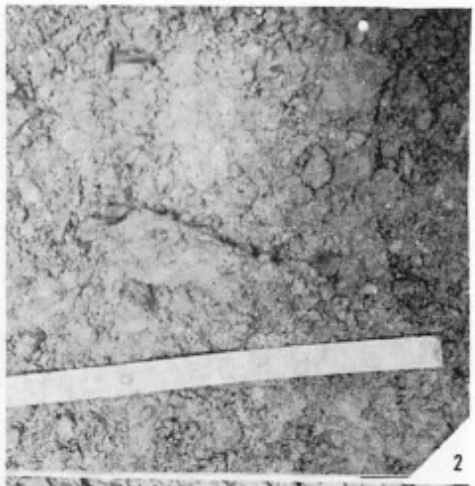
玄門部での閉塞の状況

玄室方向から見た閉塞と羨道

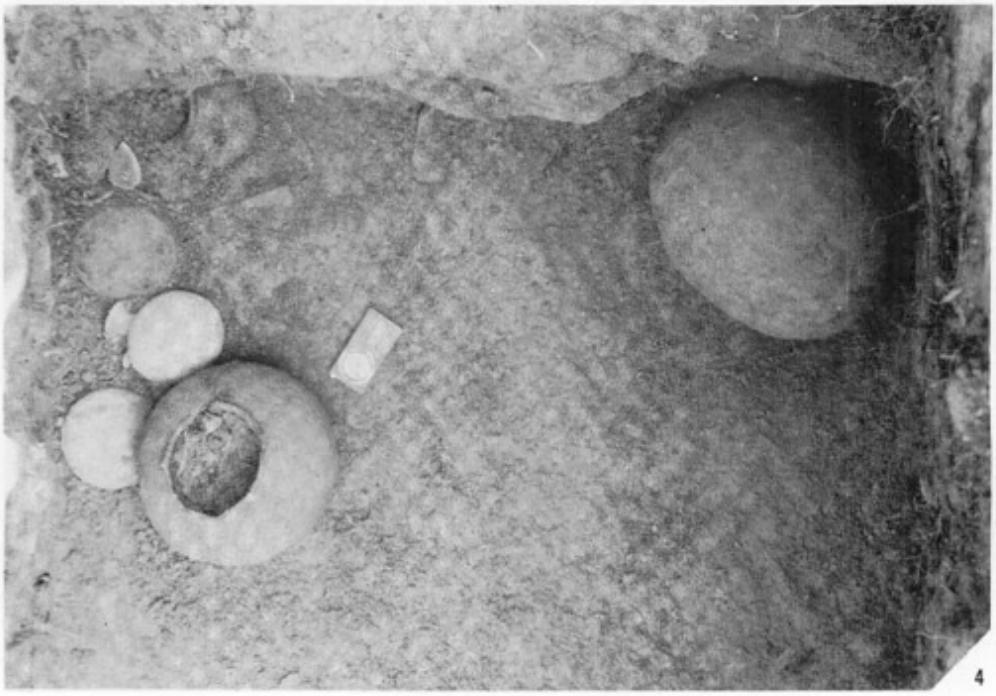
羨道部より東壁面の石積状況

上方からの玄室（天井石の落下位置）

1


2

3


4

(1)・(4)土器の出土状況　(2)・(3)鉾と管玉の出土状況

1号墳出土遺物

1

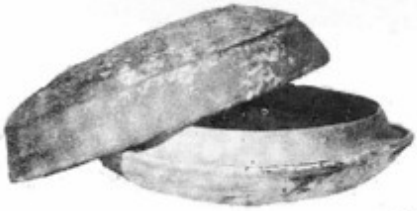
4

2

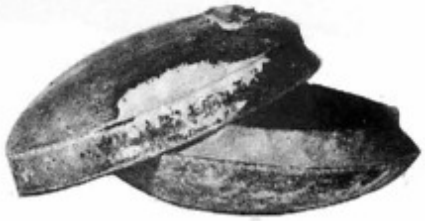
3

5

2号墳出土遺物



1



2

3

4

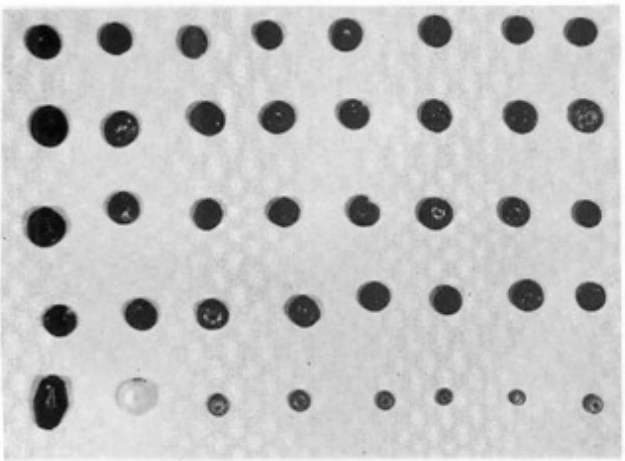
図 版　第10

2 号墳出土遺物

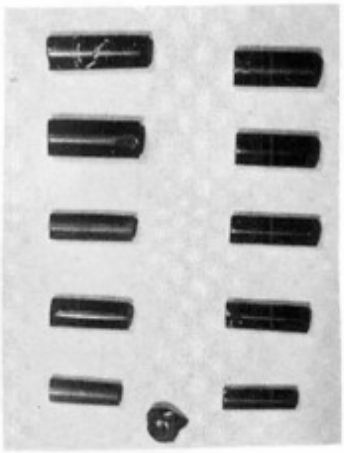
1

2

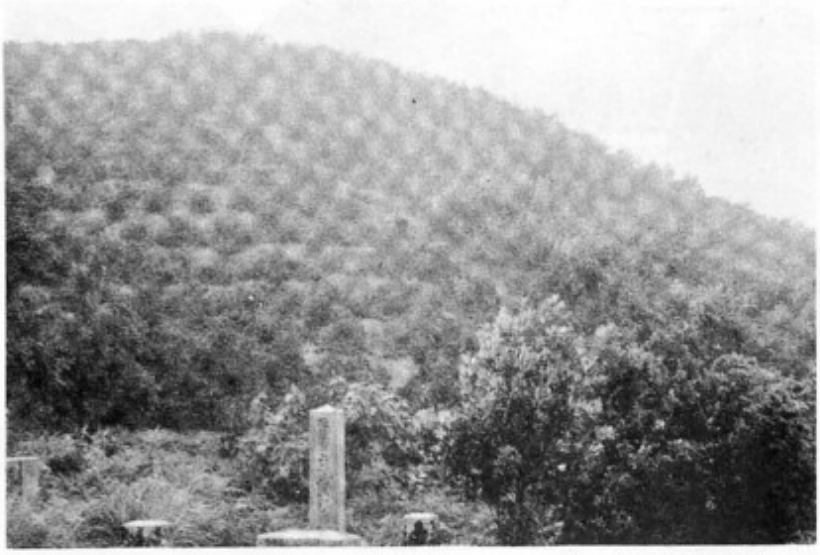
3



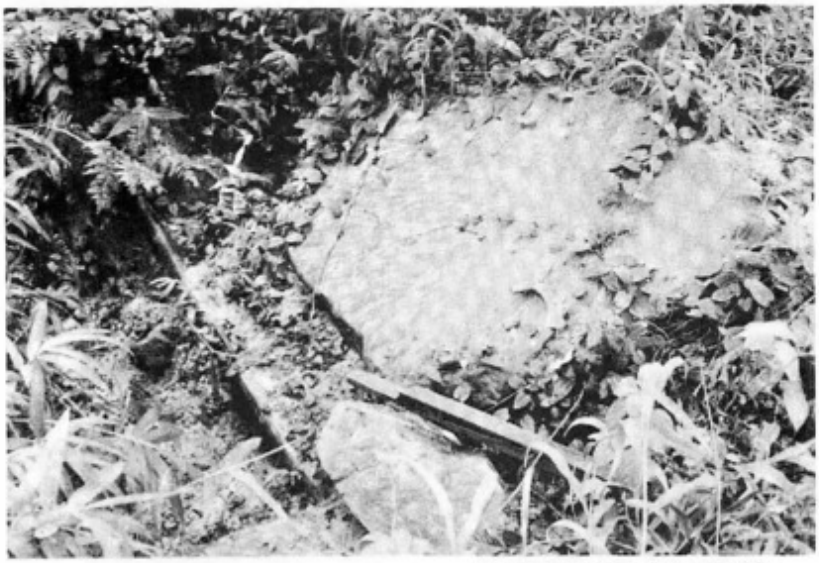
4



5



松ヶ谷1号墳の遠景



天井石を除去し侵入せる状況

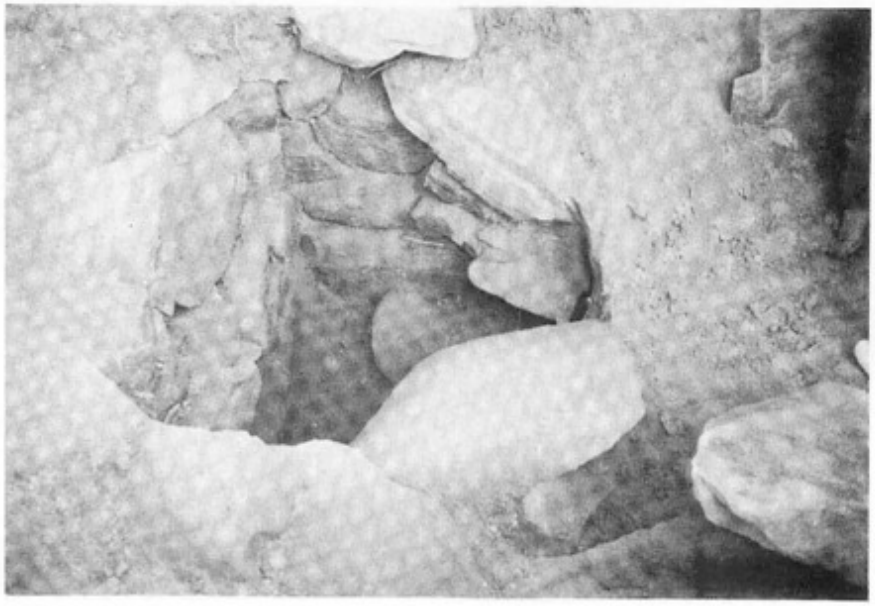
盗掘による側壁の崩壊状況

図 版　第12

発掘風景

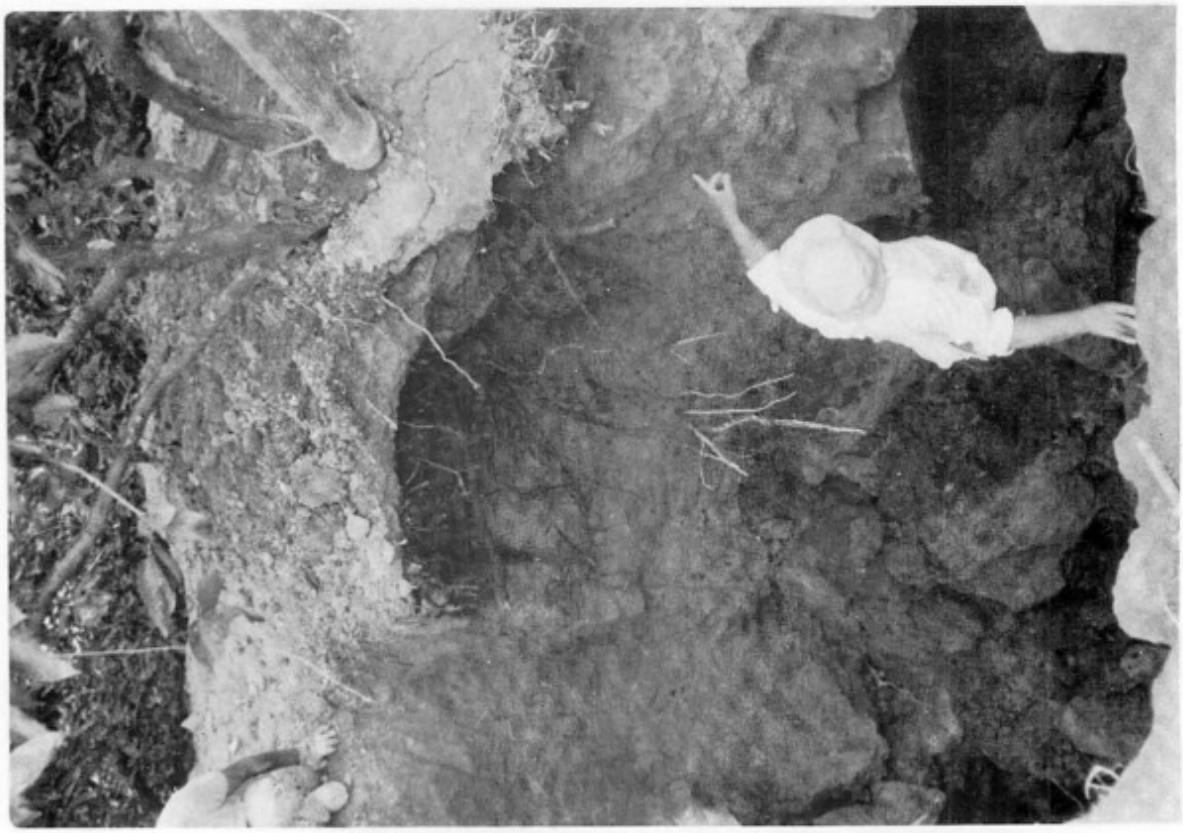
トレンチと天井石の状況

天井石の横架状況

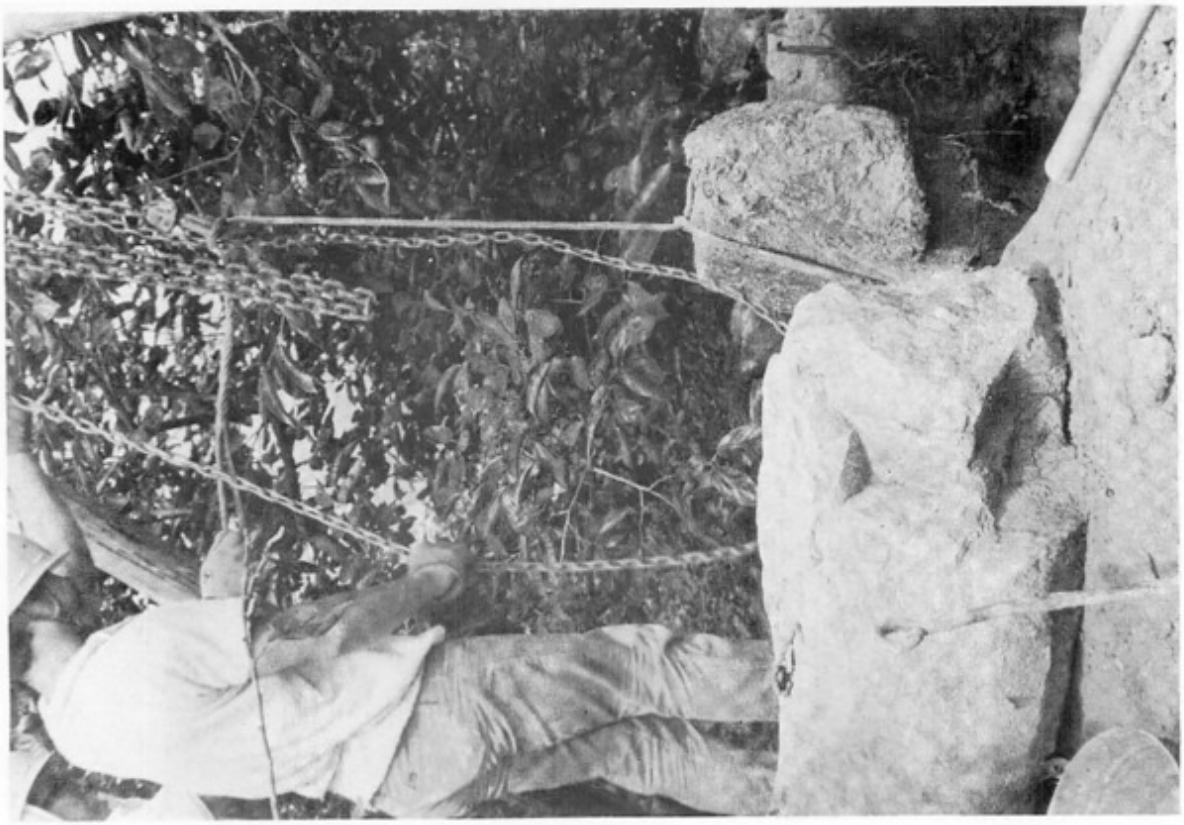


奥壁部の天井石の落下状況と盗掘口

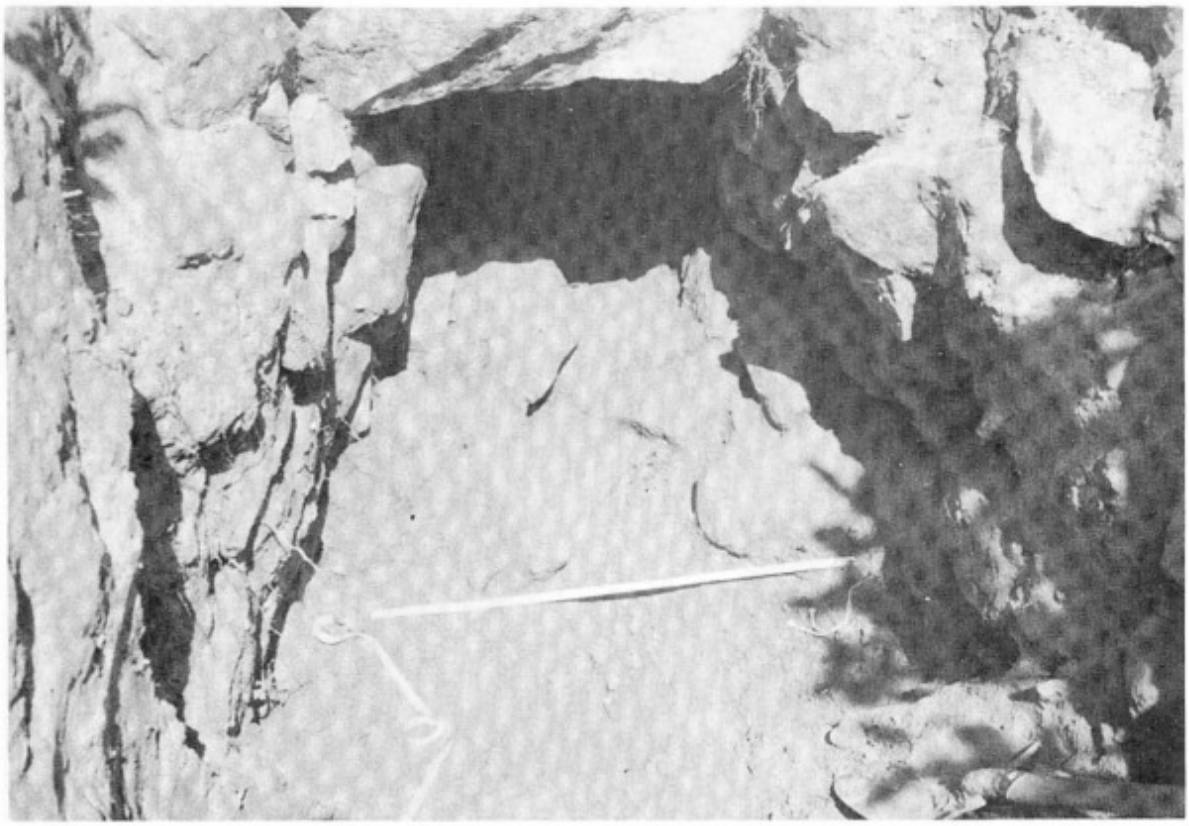
図 版　第14



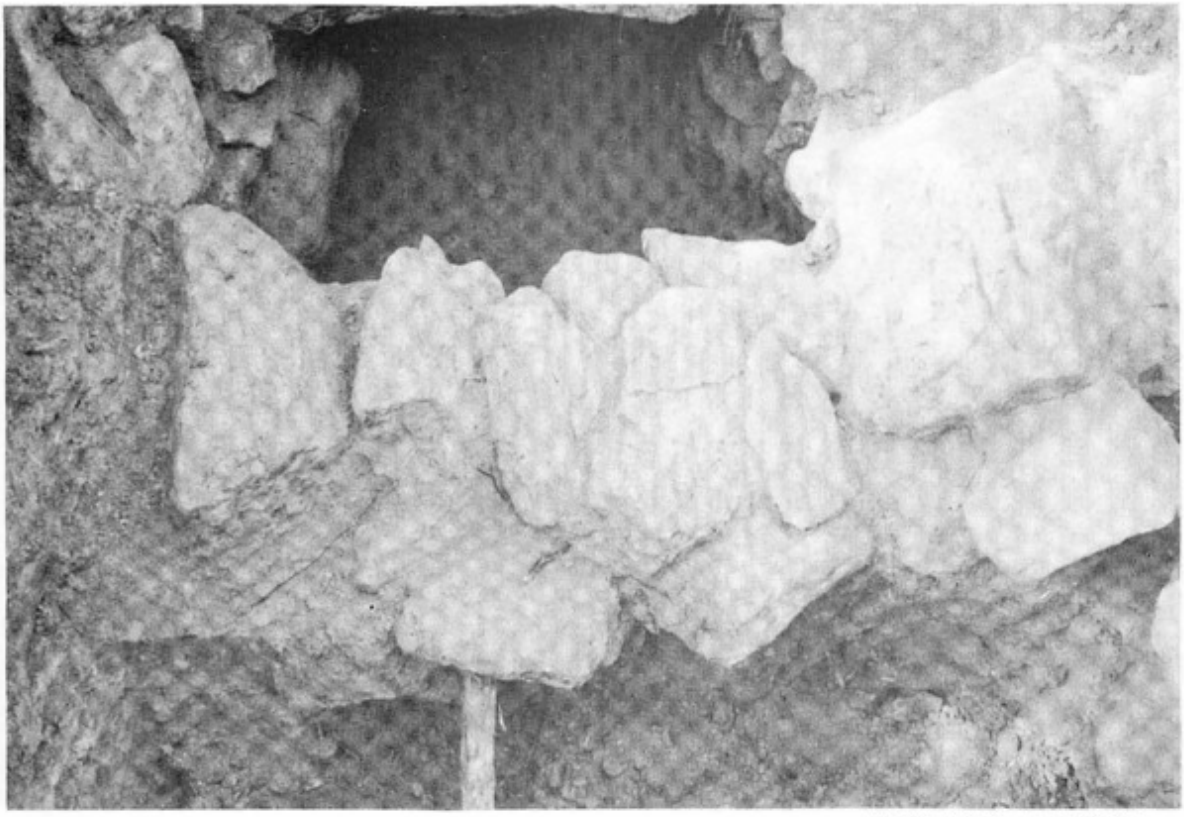
集中豪雨により側壁の崩壊状況



崩壊後の発掘状況

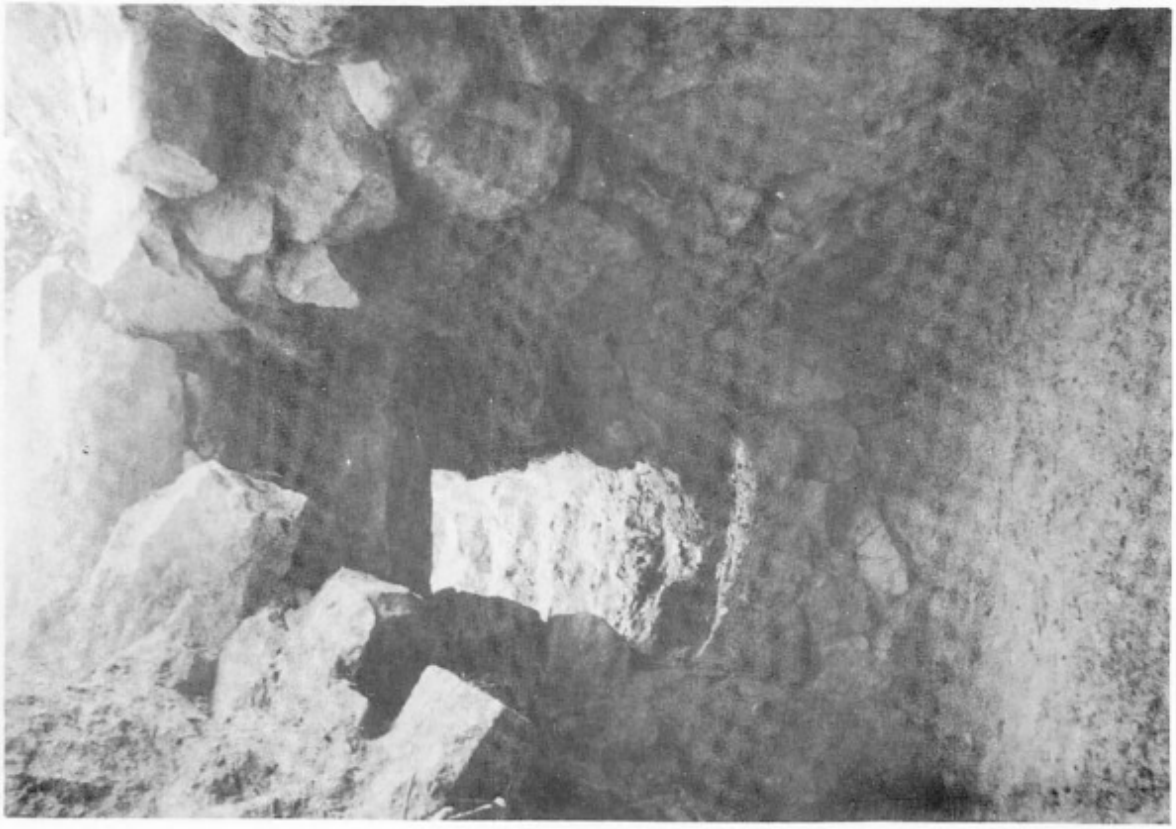


閉塞の現状

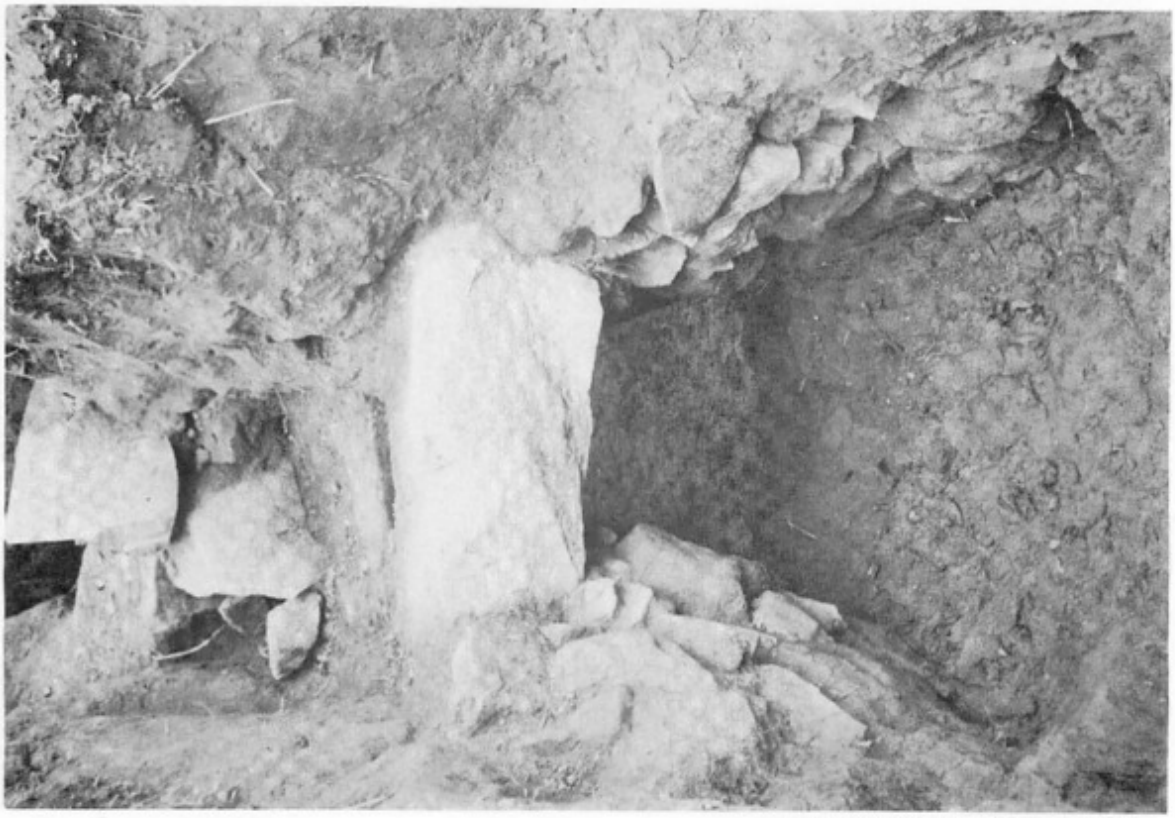


土砂を取り除いた閉塞状況

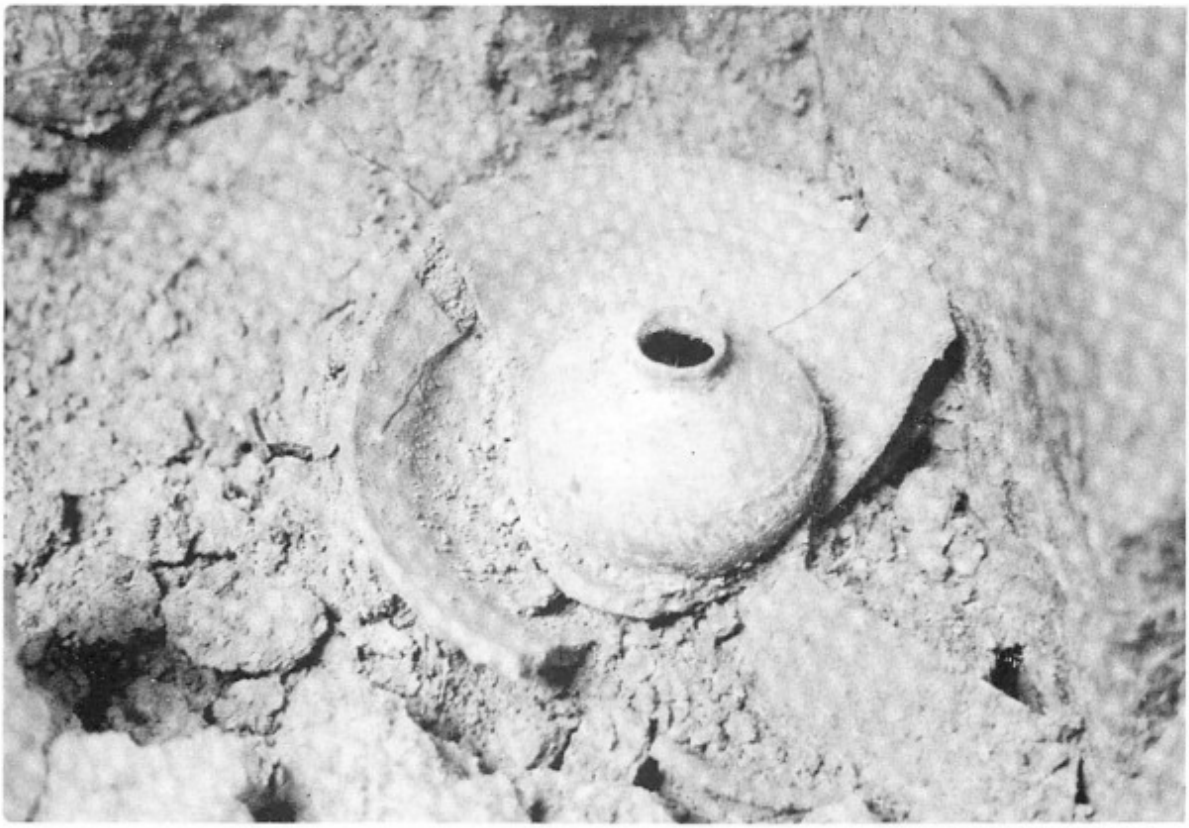
図 版　第16



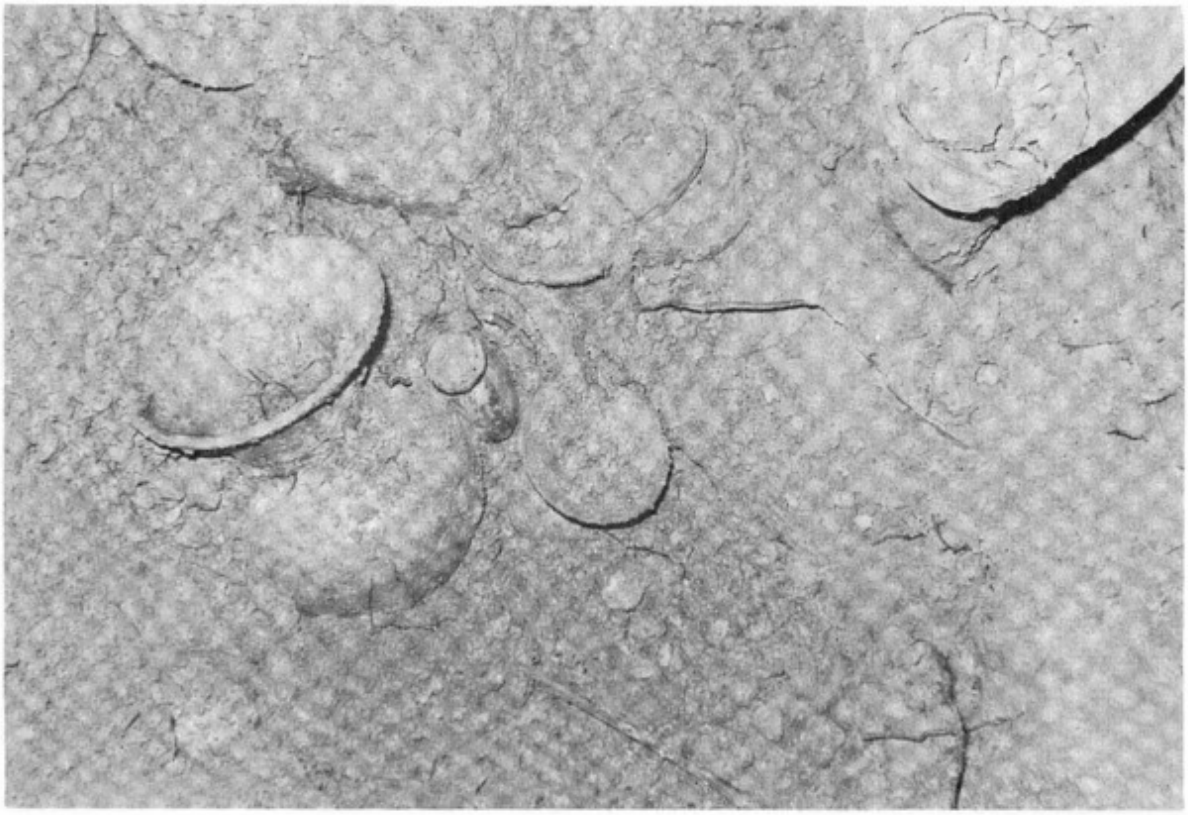
玄室内より見た羨道部



羨道口の状況と天井石の配置状況



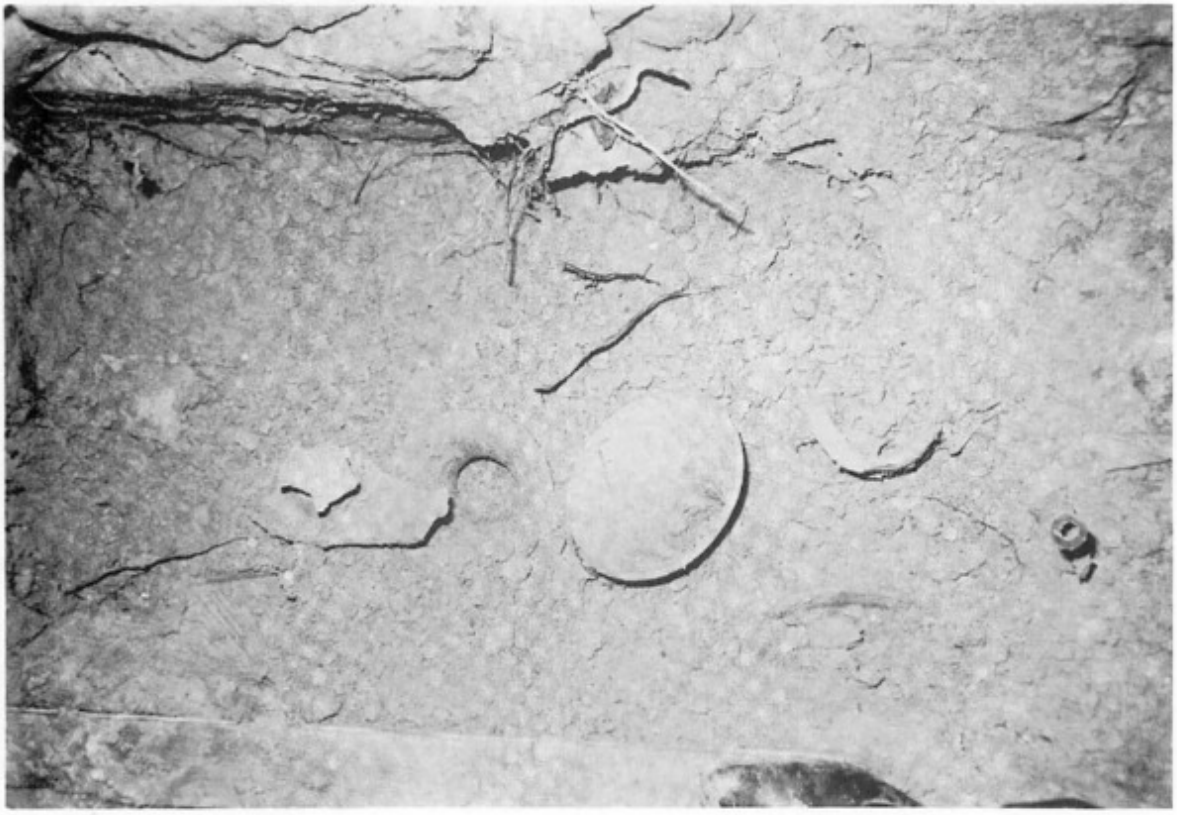
器台55の出土状況



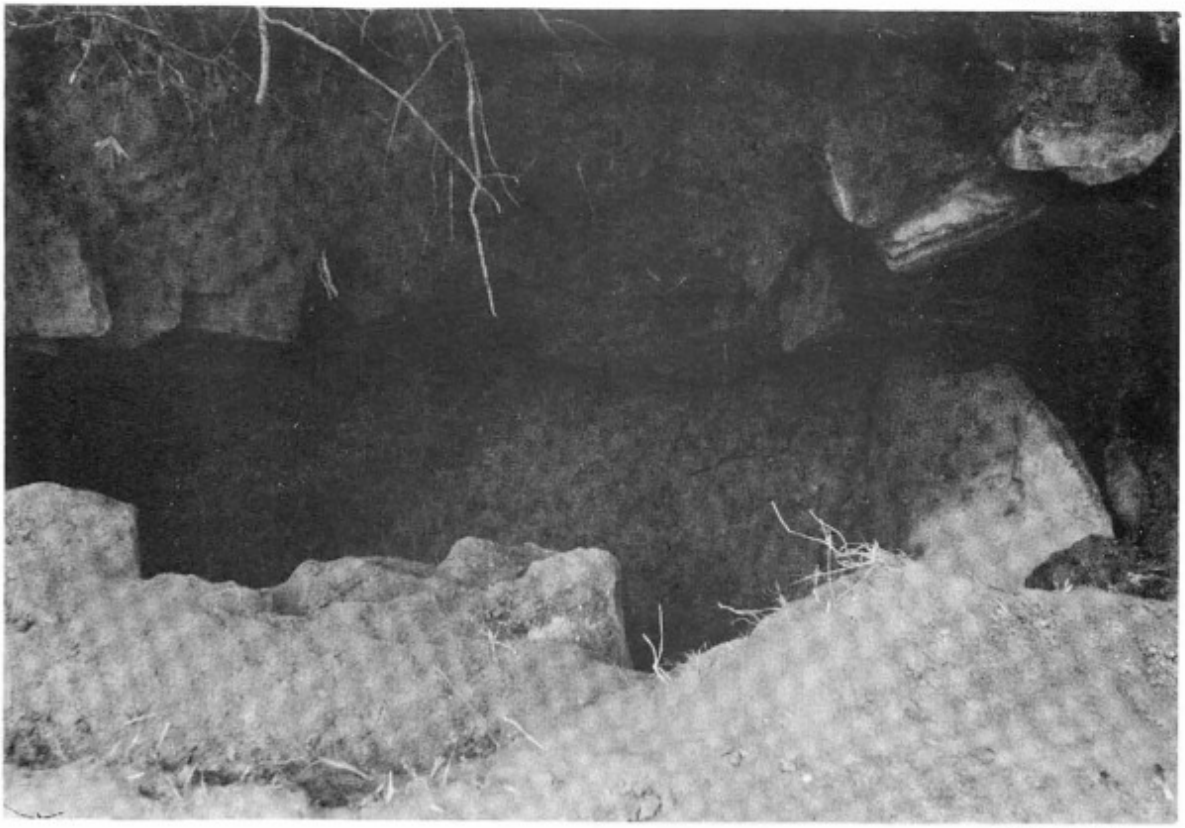
器台56広口52の出土状況

図 版　第18

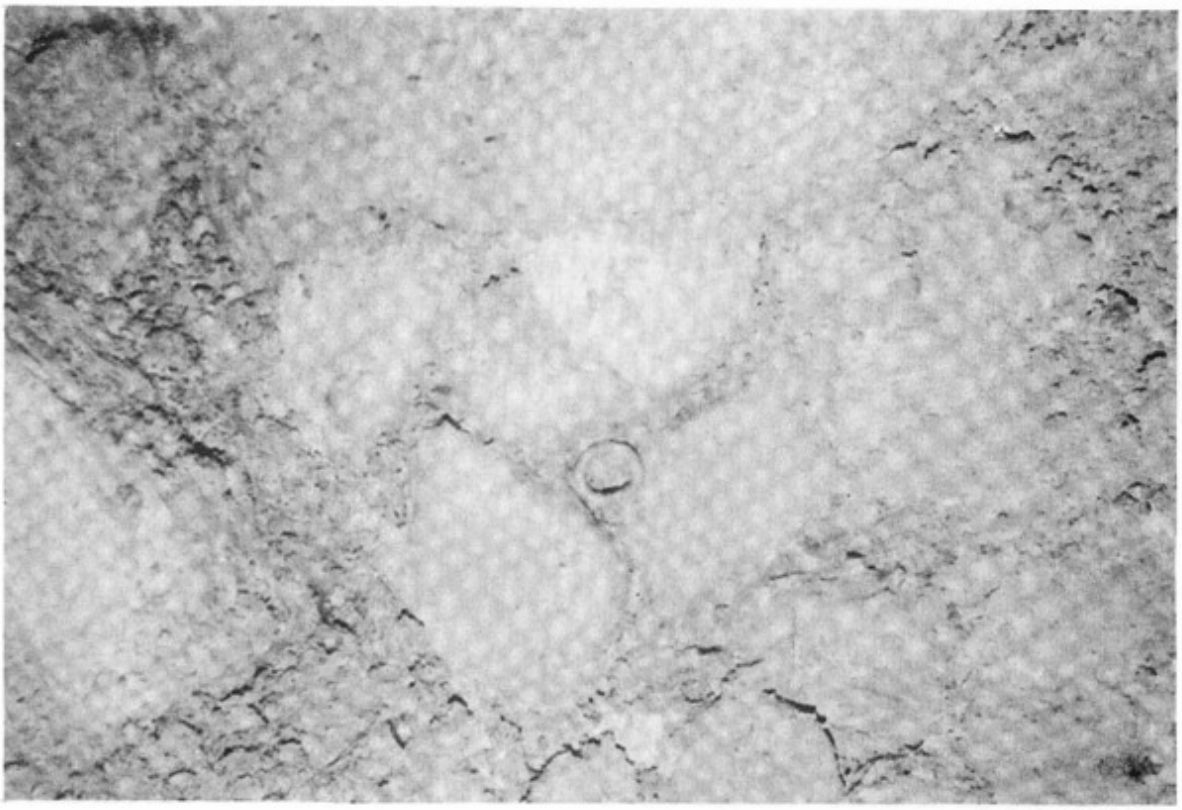
坏・高坏の出土状況



広口153、54の出土状況



天井部より写す



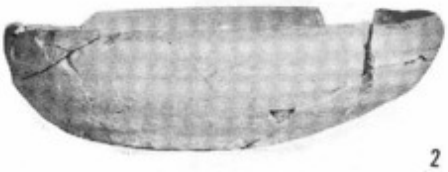
銀環の出土状況

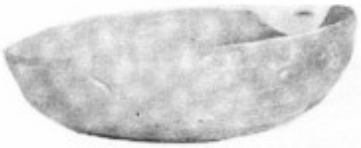
図 版　第20

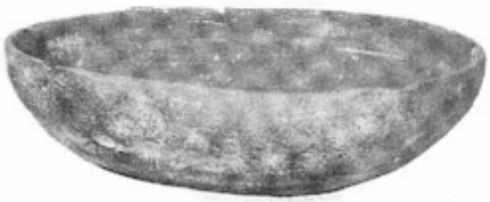
壁面の石積状況

発掘後の墳丘復元状況

1


2


3

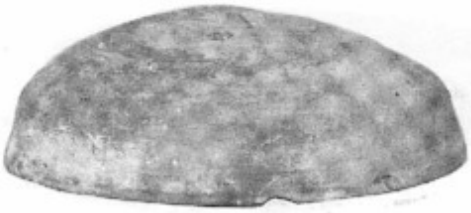

4

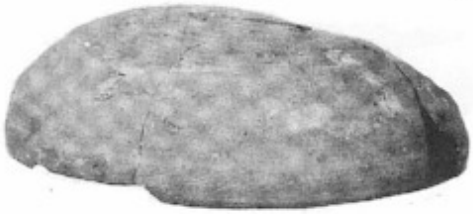
5

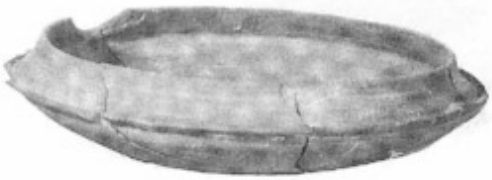
6

7

8


9


10


11

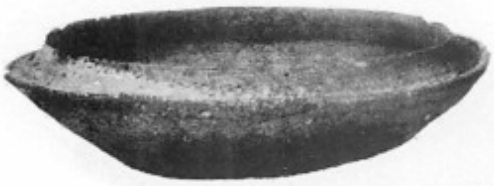
12
13

14

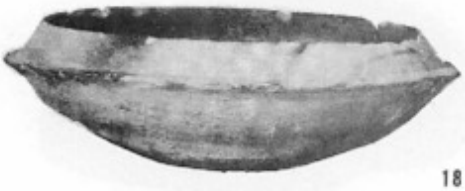
15

16

図 版　第22



17



18

19

3

4

26

27

28

20

1

21

2

22

25

23

図 版　第24

29

31

30

32

34

33

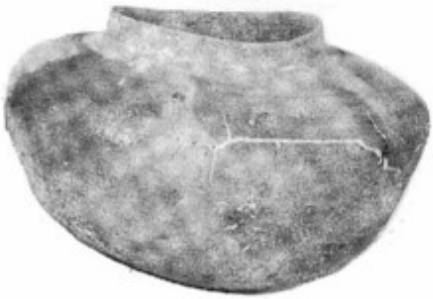
5

6

35

38

36



39

37

40

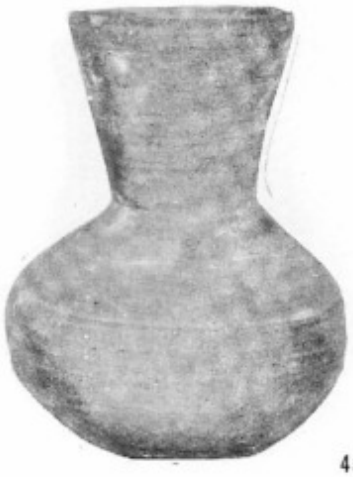
図 版　第26

41

42

43

44



45

46

47

53

42

56

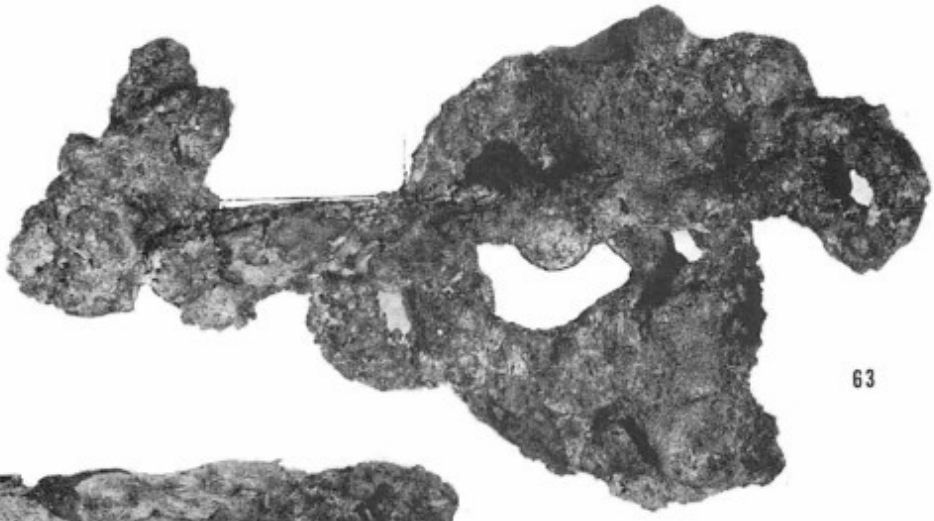
55

図版　第28

57

52

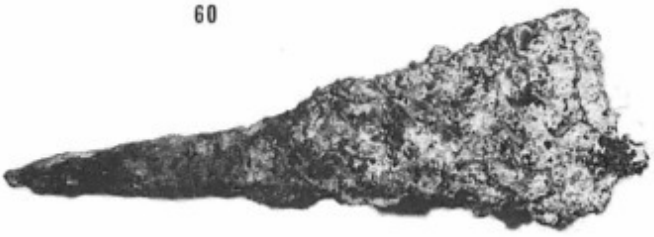
54



63

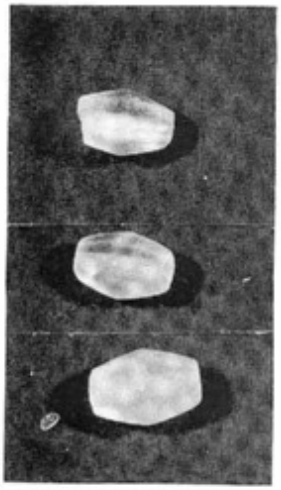
60

64



62

58



68

69

67

51

50

既刊—『松山市文化財調査報告書』

1　三島神社古墳　　昭和47年絶版
2　天山・桜谷古墳　　昭和48年　〃
3　長隆寺廃寺跡　　昭和49年
4　古照遺跡　　昭和49年
5　釜ノ口遺跡
7　国道バイパス概報
8　岩子山古墳　50年6月刊予定

松山市文化財・遺跡地図（50年版）

松山市文化財報告書　第6集
かいなご・松ヶ谷古墳
昭和50年3月30日

編集・発行　松山市教育委員会
〒790 松山市二番町四丁目
TEL(0899)48—6600（社会教育課）